

第一百七條 軍人守兵ヨリ告示スル禁令ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

二 軍中ニ在テハ一年以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テハ一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第一百八條 軍人戰鬪ノ號報アル時故ナク其集合場ニ來會セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第一百九條 軍人允許ヲ得テ他方ニ赴キ故ナク歸著ノ期限ニ後レ十日ヲ過キタル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十條 歸休若クハ非職ノ軍人徵召ノ命ヲ受ケ故ナク到著ノ期限ニ後レタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一出師ノ時ニ在テ五日ヲ過キタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 其他ノ場合ニ在テ十日ヲ過キタル者ハ一年以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十一條 新募ノ兵徵集ノ命ヲ受ケ故ナク到著ノ期限ニ後レタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一出師ノ時ニ在テ五日ヲ過キタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

二 其他ノ場合ニ在テ十日ヲ過キタル者ハ十一月以上六月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十二條 司令官事變ニ因リ已ムコトヲ得ス暗號記號ヲ改メ又ハ配置セラレタル地若ク

ハ其命セラレタル所ノ事ヲ變更シ直チニ之ヲ申報セサル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十三條 軍人命ヲ受ケス艦船内ニ商貨ヲ積載シタル者ハ十一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス但破壊若クハ危險ニ罹リタル船舶ノ商貨ヲ保護スル爲メ移積シタル者ハ此限ニ在ラス

第二十四條 守兵安リニ銃礮ヲ發シタル者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十五條 軍人禮礮號礮其他空礮ヲ發スル時ニ當リ彈丸銅鐵瓦石等ヲ裝填シテ發射シタル者ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

此條ノ罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第二十六條 軍人政治ニ關スル事項ヲ上書建白シ又ハ講談論說シ若クハ文書ヲ以テ之ヲ廣告スル者ハ一月以上三年以下ノ輕禁錮ニ處ス

第二十七條 軍人敵前軍中ニ在テ造言飛語ヲ爲シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第二十八條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシメタル者ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

看守護送者之ヲ犯シタル時ハ重禁獄ニ處ス

第二十九條 軍人俘虜降人ヲ逃走セシムル爲メ兵器其他ノ器具ヲ給與シ若クハ逃走ノ方



法ヲ指示シタル者ハ四月以上四年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス  
看守護送者之ヲ犯シタル時ハ輕禁錮ニ處ス

第三百三十條 軍人前二條ニ記載シタル所ノ輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪  
ノ例ニ照シテ處斷ス

第三百三十一條 軍人俘虜降人ヲ看守若クハ護送シ懈怠ニ因リ其逃走ヲ致シタル者ハ十一日  
以上一月以下ノ輕禁錮ニ處ス

第三百三十二條 軍人逃走ノ俘虜降人ナルヲ知テ之ヲ藏匿シ若クハ隱避セシメタル者ハ一  
月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス但犯人ノ親屬ニ係ル時ハ其罪ヲ論セ  
ス

第九章 逃亡

第三百三十三條 軍人擅ニ艦船屯營本隊若クハ職役ヲ離レタル者ハ左ノ區別ニ從ヒ逃亡ト爲  
シテ處斷ス

一 敵前ニ在テハ輕禁獄ニ處ス

二 軍中ニ在テ三日ヲ過キタル者ハ六月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テ六日ヲ過キタル者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ  
附加ス

第三百三十四條 軍人四人以上相黨與シテ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ左ノ區別ニ從テ處斷ス

一 敵前ニ在テハ首魁ハ死刑ニ處シ其他ノ者ハ輕禁獄ニ處ス

二 軍中ニ在テ三日ヲ過キタル者ハ首魁ハ輕禁獄ニ處シ其他ノ者ハ六月以上二年以下ノ輕  
禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

三 其他ノ場合ニ在テ六日ヲ過キタル者ハ首魁ハ二年以上五年以下ノ輕禁錮ニ處シ其他ノ  
者ハ二月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ將校ハ剝官ヲ附加ス

第三百三十五條 軍人敵ニ奔リタル者ハ死刑ニ處ス

第十章 詐僞

第三百三十六條 軍人敵地若クハ敵情ヲ探偵スルノ命ヲ受ケ詐僞ノ報告ヲ爲シタル者又ハ戰  
場ニ在テ命令ヲ詐リ傳ヘタル者ハ五月以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十七條 軍人糧食ノ支給ヲ掌リ健康ヲ害ス可キ食料飲料ヲ配付シタル者ハ輕懲役ニ  
處シ因テ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百三十八條 海軍醫官其職務ヲ以テ疾病傷痍及ヒ身體強弱ノ偽證ヲ爲シタル者ハ二月以  
上二年以下ノ重禁錮ニ處ス其囑託ヲ爲シタル軍人亦同シ

第三百三十九條 軍人疾病ヲ作爲シ身體ヲ毀傷シテ兵役ヲ免ル、トヲ圖リタル者ハ一月以上  
一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第六十七 陸軍刑法海軍刑法第二條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルノ規



則 十五年二月二十六日 第四號布告

陸軍刑法海軍刑法第二條第二項ニ依リ新舊法ヲ比照スルニハ左ノ規則ニ從フヘシ

第一條 新法ト舊法トノ刑ヲ比照スルニハ別表ニ從フ

第二條 舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期内ニアル時ハ新法ニ從フ但舊法ノ刑期ニ過クルコトヲ得ス  
舊法ニ於テ百日ニ該ル者新法ニ照シ二月以上四月以下ノ禁錮ニ於テハ新法ニ從ヒ二月以上百日以下ニ處スルノ類

若シ舊法ノ刑期新法主刑ノ短期ニ等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ  
舊法ニ於テ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ニ該ル者新法ニ照シ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ該ル時ハ舊法ニ從ヒ杖五十錮四十二日若クハ閉門半年後停官ニ處スルノ類

第三條 舊法新法ノ刑共ニ短期長期アル者ハ其短期ノ短キ者ニ從フ但其長期ノ短キ者ニ過クルコトヲ得ス  
舊法ニ於テ一年以上三年以下ニ該ル者新法ニ照シ三月以上四年以下ニ處スルノ類

若シ舊法新法ノ刑其短期等シクシテ舊法ニ定役ナク新法ニ定役アル時ハ舊法ニ從フ

第四條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ重罪ノ刑ニ處スル時ハ普通刑法第三十一條第二項第三項ヲ除ク  
第四項第五項及ヒ第四十二條ヲ除クノ外附加刑ヲ科セス

第五條 新舊ノ法ヲ比照シ新法ニ從ヒ輕罪ノ刑ニ處スル時監視ハ之ヲ附加セス

第六條 新法ト舊法トヲ比照スルニハ各其本法ニ照シ加減シタル者ヲ以テ本刑トナス

右奉 勅旨布告候事 別表

刑 期	將 校 刑 名	下 士 刑 名	卒 夫 刑 名
十 年	流 刑	同	同
三 年	閉門半年後奪官	徒 三 年	同
二 年	奪 官	徒 二 年	同
一 年	閉門半年後回籍	徒 一 年	同
百 日	回 籍	戒 役	同
九 十 日	閉門半年後停官	錮三十五日後黜等	杖五十錮四十二日
八 十 日	閉門四十二日後停官	錮三十五日後降等一年半	杖四十錮三十五日
七 十 日	降 官	降 等 一 年 半	杖三十錮二十八日
六 十 日	降 官	降 等 一 年	答三十錮二十八日
五 十 日		降 等 半 年	答二十錮二十一日
四 十 日	閉門九十八日	錮四十二日	答十五錮十四日



三十日	閉門四十九日	錮三十五日	同
二十日	閉門三十五日	錮二十八日	同
一日	謹慎二週日	同	同
十日	謹慎三週日	同	同

○舊軍律ト普通刑法ト比照例 十五年四月八日 第二十號布告  
 舊軍律及ヒ普通刑法共ニ罪名アリテ所犯刑法施行以前ニ係ル者ハ本年一第四號布告ノ例ニ準シ新舊ノ法ヲ比照シ輕キニ從テ處斷ス可シ  
 但罰金科料ニ該ル者ハ明治十四年十二月第八十一號布告ニ依ルヘシ  
 右奉 勅旨布告候事

〔第六十八〕陸軍治罪法ヲ制定ス 十六年八月四日 第二十四號布告  
 陸軍治罪法別冊ノ通制定シ明治十六年八月十五日ヨリ之ヲ施行ス  
 右奉 勅旨布告候事

陸軍治罪法 別冊  
 第一章 總則  
 第一條 陸軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス但官物ノ損害ニ係ルノ賠償ハ此限ニ在ラス  
 第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限り之ヲ許ス  
 第三條 軍人ト稱スルハ陸軍刑法第三條第九條ニ掲クル者ヲ謂フ  
 第四條 司令官ト稱スルハ軍團長師團長旅團長軍管司令官營所司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ  
 第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第一百條第一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス  
 第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス  
 第二章 軍法會議ノ構成  
 第七條 軍法會議ハ各軍管ニ一箇若クハ數箇ヲ設ク  
 軍中ニ於テハ軍團師團旅團ニ軍法會議ヲ設ケ合圍ノ地ニモ亦軍法會議ヲ設ク  
 第八條 軍法會議ニハ判士長判士理事理事補錄事ヲ置ク 十九年二月第六號布告ヲ以テ理事補ノ下(審事審事補)ノ五字ヲ刪ル  
 第九條 軍法會議ハ佐官一名ヲ判士長ト爲シ尉官四名ヲ以テ判士トス  
 但被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更換ス  
 同上布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

判士長判士被 告 人



佐官	一名	大尉若クハ中尉	二名	陸海軍少尉准士官及ヒ同等ノ軍人軍屬
佐官	一名	中尉	二名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
大佐	一名	大尉	二名	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
中佐	一名	中尉	二名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬
少將	一名	少佐	二名	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將	一名	中佐	二名	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
中將	一名	少佐	二名	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
大將	一名	大佐	二名	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬
大將	一名	中將	二名	陸海軍中將及ヒ同等ノ軍人軍屬
大將	一名	大將	二名	陸海軍大將及ヒ同等ノ軍人軍屬

第十條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス  
 佐官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ陸軍卿之ヲ命ス尉官ヲ以テ判士ト爲ス時モ亦同シ  
 第十一條 軍團長及ヒ獨立師團長ハ部下ノ將校ニ其軍法會議ノ判士長判士ヲ命スルコトヲ得又理事缺員スル時ハ部下ノ將校ニ命シテ其職務ヲ行ハシメ錄事缺員スル時ハ下士ニ命

シテ其職務ヲ行ハシムルコトヲ得同上布告ヲ以テ理事ノ下審事ノニ字ヲ別ル  
 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官部下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得  
 第十二條 軍管軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツ可キ將校缺員スル時ハ軍管司令官ノ上申ニ依リ陸軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 軍法會議ハ其軍管若クハ師管ノ所管地方ヲ以テ管轄ト爲ス  
 第十四條 軍人管轄地外ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ其地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得  
 第十五條 軍人數箇ノ軍法會議ノ管轄地内ニ於テ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ被告人ヲ逮捕シタル地ノ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
 第十六條 軍團師團旅團軍法會議ハ其團所屬軍人ノ犯シタル重罪輕罪ヲ審判ス  
 第十七條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス  
 第十八條 軍人任官若クハ就役ノ前罪ヲ犯シ在官現役中發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス



歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺スル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺スル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ著手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス海軍軍人軍屬ト共犯ニ係ル時モ亦同シ

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十一條 陸軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 軍法會議ハ重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦之ヲ審判ス

第二十三條 軍中若クハ合圍ノ地ノ軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ著手シタル者ハ陸軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

第四章 陸軍檢察

第二十四條 陸軍檢察ハ陸軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スル諸官ハ司令官ノ命令ヲ受ケテ陸軍檢察ノ職務ヲ行フ  
要塞副官若クハ衛戍副官  
憲兵ノ將校下士  
衛兵司令

砲兵工兵ノ監護

第二十六條 要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長及ヒ各所管ノ長官ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲シ若クハ陸軍檢察官ニ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

理事其職務ヲ行フノ際現行犯アルコトヲ知リタル時ハ自ラ陸軍檢察ノ處分ヲ爲スコトヲ得(同上布告ヲ以テ(審問)ヲ(理事)ト改ム以下皆全シ)

第二十七條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害セラレタル者ハ犯罪ノ地若クハ被告人所在ノ地ノ陸軍檢察官被告人所屬ノ長官隊長若クハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知リタル時ハ第二十七條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第二十九條 陸軍所屬ノ官吏職務ヲ行フニ因リ軍人ノ重罪輕罪ヲ犯ス者アルコトヲ知リタル時ハ其職務ヲ行フ地ノ陸軍檢察官若クハ被告人所屬ノ長官隊長ニ告發ス可シ

第三十條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得  
其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ陸軍檢察官司法警察官憲兵卒若クハ巡查ニ交付スヘシ

第三十一條 司法警察官憲兵卒及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ陸軍檢察官ニ引致スヘシ

第十二類 軍事



所屬ノ長官隊長ニ交付スヘシ

第三十三條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更センコトヲ請求スルコトヲ得  
第三十四條 陸軍檢察官軍人ノ重罪輕罪ノ現行犯アルコトヲ知リタル時ハ直ニ犯所ニ臨檢  
シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ルヘシ  
其引致ヲ受ケタル時モ亦同シ

第三十五條 陸軍檢察官要塞司令官次官衛戍司令官諸隊長分遣隊長各所管ノ長官檢察ノ處  
分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り證憑文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ具申スヘシ

第五章 審問

第三十六條 司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ左ノ諸項ヲ除クノ外審判ノ命令ヲ下シ  
其事件ヲ理事ニ下付ス可シ同上布告ヲ以テ  
被告人上長官以上ナル時ハ軍管司令官ハ之ヲ陸軍卿ニ具申ス可シ

營所ニ於テ被告人士官以上ナル時ハ營所司令官之ヲ軍管司令官ニ具申ス可シ

第三十七條 陸軍卿審判ノ命令ヲ下ス時ハ其事件ヲ司令官ニ交付シ司令官ハ之ヲ理事ニ下  
付ス可シ同上布告ヲ以テ(審問)

第三十八條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官被告人ノ官等ニ拘ハラヌ直ニ其審  
判ノ命令ヲ下スコトヲ得同上

第三十九條 理事審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問  
ス可シ

ス可シ

第四十條 理事ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ  
得

第四十一條 理事ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走ノ恐アル  
時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ迷クルノ恐アル時ハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第四十二條 理事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ陸軍  
檢察官若クハ理事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十三條 理事ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀  
ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人  
遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ理事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十四條 理事ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ上  
布告ヲ以テ(時)ノ下(理  
事ヲ經テ)ノ五字ヲ別ル

司令官ハ各軍管司令官營所司令官及ヒ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求  
ム可シ

第四十五條 理事ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコト  
ヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其收禁ヲ要セサル



者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十六條 理事ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ理事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得  
第四十七條 理事ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得若シ其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十六條第二項ノ例ニ依ル

第四十八條 理事ハ証人及ヒ通事ヲ呼出スコトヲ得

証人皇族若クハ勅任官ナル時ハ理事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

証人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ理事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ

証人若シ遠隔ノ地ニ住スル時ハ其地ノ理事若クハ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得  
第四十九條 理事ハ被告人及ヒ証人ノ訊問ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ錄取シ被告人若クハ証人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ  
被告人及ヒ証人ハ其陳述ヲ變更増減センコトヲ請求スルコトヲ得  
第五十條 理事ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術

又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ  
鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十一條 理事ハ証人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシメテ其呼出ニ應セサル時ハ二回以上拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但理事ハ其証人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得  
証人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第百八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑

法第百七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十二條 証人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時亦理事之ヲ命ス

第五十三條 理事審問ニ於テ共犯若クハ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直ニ之ヲ審問スヘシ但其共犯ノ官等其審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル者ニ係ル時ハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ  
同上布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

第五十四條 理事審問ヲ終リ若クハ審問ヲ爲サスシテ直チニ判決ニ付ス可キ時ハ意見書ヲ作り會議ノ日時ヲ定メ訴訟文書ト共ニ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報スヘシ  
其事件不問ニ付ス可キモノハ之ヲ司令官ニ具申ス可シ  
同上

第六章 判決

第五十五條 同上布告ヲ以テ削除ス



第五十六條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士理事録事各其席ニ著キタル後判士長被告人ヲ出廷セシメ之ヲ訊問シ若クハ判士ヲシテ其訊問ヲ爲サシム可シ同上布告ヲ以テ本條ヲ改正ス

第五十七條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得  
法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第五十八條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病若クハ正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ判士長ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第五十九條 禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セズ若クハ逃走シテ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ關席裁判ヲ爲スコシ

第六十條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ關席裁判ヲ爲スコシ

第六十一條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時ハ被告人中關席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對シ審判ヲ爲スコシ

第六十二條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム

可シ

證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ判士長ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ之ヲ司令官ニ具申スヘシ其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ判士長ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ共犯若クハ餘罪覺擧シタル時ハ直チニ其裁判ヲ爲シ若クハ會議ヲ中止シ理事ニ移シテ其審判ヲ爲サシム可シ但共犯ノ官等審判ノ命令ヲ下シタル司令官ニ於テ命令ヲ下スコトヲ得サル者ニ係ル時ハ判士長之ヲ司令官ニ具申ス可シ同上布告ヲ以テ第二項ヲ改正ス

第六十四條 被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ判士長ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ケ被告人ヲ退廷セシム可シ

第六十五條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シテ之ヲ作リ判士長判士録事共ニ署名捺印シ判士長之ヲ理事ニ交付ス理事ハ訴訟文書ヲ添ヘ之ヲ司令官ニ上申ス可シ

一 有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證據及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス  
二 無罪ノ判決書ニハ被告事件罪ト成ラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證據備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三 免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪



ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四 被告人ノ官位勳等隊號職名氏族籍年齢住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス

第六十六條 司令官ハ左ニ記列スルノ事件ハ陸軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス但營所司令官ハ士官以上ノ犯罪ハ軍管司令官ニ上申ス可シ

死刑

上長官以上ノ重罪輕罪

士官ノ重罪

第六十七條 司令官其判決ヲ不適當ト思量スル時其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ陸軍卿ニ上申ス可シ

第六十八條 陸軍卿ハ司令官ヨリ具申スル所ノ判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ司令官ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

陸軍卿ハ死刑並ニ上長官以上ノ重罪輕罪及ヒ士官ノ重罪ニ係ル者ハ上奏シテ命ヲ請フ可シ

第六十九條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士理事錄事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメテ判士長其宣告ヲ爲ス可シ同上布告ヲ以テ判士ノ下(理事)ヲ加フ

第七十條 闕席裁判ニ係ル刑ノ宣告書ハ軍法會議ノ門前ニ揭示ス可シ

第七十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ第六十六條ノ權限ニ拘ハラヌ直

ニ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得

第七十二條 軍團師團旅團ノ長若クハ合圍ノ地ノ司令官ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

其戴罪服務中功績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第七十三條 行刑ニ關スル方法ハ陸軍卿別ニ之ヲ定ム

第七十四條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其地ノ司令官ハ時宜ニ依リ此治罪法ノ條目ヲ省略執行セシムルコトヲ得

○陸軍軍人軍屬違警罪處分例 十九年五月二十四日布告

勅令第四十四號

御名 御璽

明治十九年五月二十日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第四十四號

陸軍軍人軍屬違警罪處分例

第一條 陸軍軍人軍屬ノ犯シタル違警罪ハ違警罪即決例ニ依リ憲兵部ニ於テ其處分ヲ爲シ憲兵設置ナキ地ニ於テハ警察署ニ於テ其處分ヲ爲ス可シ

第二條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ被告人ヲ留置シタルトキハ直チニ其所屬ノ長官若ク



ハ隊長ニ通知スヘシ

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ軍法會議ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得其裁判管轄ハ陸軍治罪法ニ從フ

第四條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ違警罪即決例第五條ニ記載シタル期限内ニ其理由ヲ記シタル書面ヲ即決ノ言渡ヲ爲シタル憲兵部若クハ警察署ニ差出ス可シ

第五條 憲兵部若クハ警察署ニ於テ前條ノ書面ヲ受領シタルトキハ二十四時内ニ認訴ニ關スル一切ノ書類ヲ管轄軍法會議ノ所管司令官ニ送致ス可シ

第六條 軍法會議ニ於テ被告人ノ訊問ヲ要セサルモノト認ルトキハ書面ニ依リ其裁判ヲ爲スコトヲ得

第七條 即決ノ言渡確定シ若クハ正式裁判ノ言渡ヲ爲シタルトキハ憲兵部警察署軍法會議ヨリ被告人所屬ノ長官若クハ隊長ニ其執行ヲ囑託スルコトヲ得

第八條 軍法會議ノ裁判ニ對シテ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六十九 海軍治罪法ヲ制定ス

十七年三月二十一日

第八號布告

海軍治罪法別冊ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

右奉 勅旨布告候事

海軍治罪法

第一章 總則

第一條 海軍軍人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス軍法會議ハ刑事附帶ノ民事ヲ受理セス

第二條 軍法會議ハ傍聽ヲ許サス但其宣告ヲ爲ス時ハ軍人ニ限り之ヲ許ス

第三條 軍人ト稱スルハ海軍刑法第五十條第五十一條ニ掲クル者ヲ謂フ

第四條 司令官ト稱スルハ艦隊司令官分遣艦隊司令官及ヒ合圍ノ地ノ司令官ヲ謂フ

第五條 普通治罪法第九條第十一條第十三條第十四條第十八條第百條第百一條ノ規則ハ此治罪法ニ於テモ之ヲ適用ス

第六條 歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者ハ軍法會議ニ於テ審判ス可キ時ノ外軍人ノ例ニ依ルコトヲ得ス

第二章 軍法會議ノ構成

第七條 軍法會議ヲ別テ四ト爲ス

- 一 東京軍法會議
- 二 鎮守府軍法會議
- 三 艦隊軍法會議

第十二類 軍事



四合圍軍法會議

東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ハ常設ト爲シ艦隊軍法會議ハ臨時艦内ニ之ヲ設ケ合圍軍法會議ハ合圍間之ヲ設ク

第八條 軍法會議ハ判士長一名判士四名主理録事各一名若クハ數名ヲ以テ之ヲ開ク

判士長ハ佐官ヲ以テシ判士ハ尉官主理ハ奏任官録事ハ七等官以下ヲ以テス若シ被告人陸海軍中尉以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ左ノ表ニ照シテ判士長判士ヲ更フ

被告人陸海軍少將以上及ヒ同等以上ノ軍人軍屬ナル時ハ勅任官ノ主理ヲシテ其職ヲ掌ラシム

判士長	判士	被	告	人
佐官 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍中尉及ヒ同等ノ軍人軍屬		
大佐 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍大尉及ヒ同等ノ軍人軍屬		
少將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍少佐及ヒ同等ノ軍人軍屬		
中將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍中佐及ヒ同等ノ軍人軍屬		
中將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍大佐及ヒ同等ノ軍人軍屬		
大將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍少將及ヒ同等ノ軍人軍屬		
大將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍中將及ヒ同等ノ軍屬		
大將 一名	大尉 二名 中尉 二名 少尉 二名 若クハ 大佐 一名 中佐 一名 少佐 一名	陸海軍大將及ヒ同等ノ軍屬		

第九條 軍人ニ非サル勅任官ヲ審判スル時ノ軍法會議ハ將官ヲ審判スルノ例ニ從フ

第十條 外國又ハ戰地ヘ數隻ノ艦船ヲ差遣スル時ハ海軍卿ヨリ其先任艦長ニ艦隊軍法會議ヲ開クノ權ヲ付與スルコトアル可シ此場合ニ於テハ其權限司令官ニ同シ

第十一條 將官ヲ以テ判士長判士ト爲ス時ハ海軍卿ノ奏請ニ依リ上裁ヲ以テ之ヲ命ス勅任官ニ主理ヲ命スル時モ亦同シ

佐官ヲ以テ判士長判士ト爲シ尉官ヲ以テ判士ト爲シ奏任官ヲ以テ主理若クハ録事ト爲ス時東京并鎮守府ニ於テハ海軍卿之ヲ命シ艦内ニ於テハ司令官之ヲ命ス可シ但檢察官若クハ審問委員タリシ者ハ其事件ノ判士ニ加フルコトナシ

第十二條 艦隊軍法會議ニ於テ判士長判士ニ充ツヘキ將校缺乏スル時ハ司令官ノ上申ニ依リ海軍卿他ノ將校ヨリ之ヲ命シ若クハ被告人ヲ他ノ軍法會議ニ移シテ其審判ヲ爲サシム但外國ニ在テハ司令官他ノ官吏ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第三章 軍法會議ノ權限

第十三條 東京軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

- 一 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セサル軍人其他海軍ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者
- 二 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セス海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者



三鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ權限ニ屬セサル海軍監獄ニ在ル未決既決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十四條 鎮守府軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一鎮守府長官ノ麾下ニ屬スル軍人其他鎮守府ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者

二鎮守府ノ所管ニ係リ海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者

三鎮守府所管ノ監獄ニ在ル未決既決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十五條 艦隊軍法會議ハ左ニ記列スル者ヲ審判ス

一司令官ノ麾下ニ屬スル軍人其他從軍諸員及ヒ艦隊ノ用ニ供スル船舶ノ乘員重罪輕罪ヲ犯シタル者

二司令官ノ所管ニ係リ海軍刑法第三條第四條ニ依リ處斷ス可キ者

三艦船内ニ在ル未決既決ノ囚人重罪輕罪ヲ犯シタル者

第十六條 艦隊若クハ數隻ノ艦船外國へ出發ノ後其軍法會議ノ權限ニ屬スル者内國ニ在テ犯罪發覺シタル時ハ鎮守府軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス可シ

第十七條 海軍卿ハ時宜ニ依リ甲軍法會議ノ權限ニ屬スル事件ヲ乙軍法會議ニ移シ其審判ヲ爲サシムルコトヲ得

第十八條 軍人任官若クハ就役前罪ヲ犯シ在官現役中發覺シタル者ハ軍法會議ニ於テ之ヲ

審判ス其在官現役中罪ヲ犯シ免官若クハ免役ノ後發覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス  
歸休兵及ヒ豫備後備ノ軍籍ニ在ル者召集中罪ヲ犯シ若クハ舊罪發覺シタル者ハ軍法會議

ニ於テ之ヲ審判ス其召集中ノ犯罪解散ノ後發覺シタル者ハ司法裁判ニ付ス

第十九條 軍人二人以上共ニ重罪輕罪ヲ犯シ各其管轄ヲ異ニスル時ハ先キニ審問ニ著手シタル軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十條 軍人ト軍人ニ非サル者ト共ニ重罪輕罪ヲ犯シタル時ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス但陸軍軍人軍屬ト共犯ニ係ル時ハ第十九條ノ例ニ從フ

第二十一條 海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ軍人ニ非スト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス餘罪俱ニ發シタル者モ亦同シ

第二十二條 重罪輕罪ト俱ニ發シタル違警罪モ亦軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第二十三條 俘虜降人ノ犯シタル重罪輕罪ハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判ス

第四章 海軍檢察

第二十四條 海軍檢察ハ海軍ニ關スル犯罪ヲ搜查シ證據ヲ拾收ス

第二十五條 左ニ記列スル者ハ所管長官若クハ所屬長ノ命令ヲ受ケテ海軍檢察ノ職務ヲ行フ  
東京軍法會議及ヒ鎮守府軍法會議ノ主理  
鎮守府及ヒ艦船營ノ士官  
學校監事



第二十六條 海軍檢察ノ職務ヲ行フ者現行犯アルコトヲ知りタル時ハ時宜ニ因リ犯所ニ臨檢シ犯罪人ヲ逮捕シ訊問ヲ爲シ其調書ヲ作ルコトヲ得

第二十七條 各廳長及ヒ艦船營長ハ各其管スル所ノ事ニ就キ犯罪アルコトヲ知りタル時ハ自ラ海軍檢察ノ處分ヲ爲シ又ハ第二十五條ニ記載シタル諸官ニ命シ若クハ委シテ其處分ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十八條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪ニ因リ損害ヲ受ケタル者ハ被告人ノ所屬長東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ司法警察官ニ告訴スルコトヲ得

第二十九條 何人ヲ論セス軍人ノ犯罪アルコトヲ知りタル時ハ第二十八條ニ記載シタル官吏ニ告發スルコトヲ得

第三十條 軍人其職務ヲ行フニ因リ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルコトヲ知りタル時ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理又ハ被告人ノ所屬長ニ告發ス可シ

第三十一條 軍人ノ重罪輕罪現行犯アル時ハ何人ヲ論セス直ニ之ヲ逮捕スルコトヲ得其犯罪人ヲ逮捕シタル者ハ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理司法警察官憲兵若クハ巡查ニ交付ス可シ

第三十二條 司法警察官憲兵及ヒ巡查現行犯ノ軍人ヲ逮捕シ若クハ其交付ヲ受ケタル時ハ速ニ之ヲ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ引致ス可シ

第三十三條 司法警察官軍人ニ係ル告訴告發ヲ受ケタル時ハ速ニ被告人ノ所屬長又ハ東京軍法會議若クハ鎮守府軍法會議ノ主理ニ交付ス可シ

第三十四條 告訴人告發人ハ願下ヲ爲シ若クハ其陳述ヲ變更センコトヲ請求スルヲ得

第三十五條 第二十五條ニ記載シタル諸官海軍檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ調書ヲ作り證據文書ヲ添テ各其所管長官若クハ所屬長又ハ委託ヲ受ケタル各廳長ニ具申ス可シ

第五章 審問

第三十六條 鎮守府長官司令官被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ速ニ左ノ處分ヲ爲ス可シ被告人上長官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申ス可シ

被告人士官以下及ヒ同等以下ノ軍人若クハ其他ノ諸人ナル時ハ其事件ノ難易ニ從ヒ鎮守府長官ハ判士ニ司令官ハ麾下ノ將校ニ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ判決ニ付ス可シ

第三十七條 各廳長被告事件ノ具申ヲ受ケ若クハ自ラ檢察ノ處分ヲ爲シタル時ハ速ニ其事件ヲ東京軍法會議ノ主理ニ移シ主理ハ之ヲ判士長ニ交付ス可シ

第三十八條 東京軍法會議ノ判士長主理ヨリ被告事件ノ交付ヲ受ケタル時ハ速ニ左ノ處分ヲ爲ス可シ

被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申ス可シ被告人下士以下及ヒ同等以下ノ軍人若クハ其他ノ諸人ナル時ハ其事件ノ難易ニ從ヒ判士ニ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ若クハ直ニ判決ニ付ス可シ



第三十九條 海軍卿被告事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ其事件ノ難易ニ從ヒ審問若クハ判決ニ付スルノ命令ヲ下ス可シ其命令ヲ受ケタル鎮守府長官司令官若クハ判士長ハ審問委員ヲ命シテ審問ヲ爲サシメ又ハ直ニ判決ニ付ス可シ

第四十條 審問委員審問ヲ爲ス時ハ先ツ召喚狀ヲ發ス其被告人出廷シタル時ハ即日之ヲ訊問ス可シ

第四十一條 審問委員ハ召喚狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十二條 審問委員ハ召喚狀ヲ受ケタル被告人其日時ニ出廷セサル時ハ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

第四十三條 審問委員ハ重罪被告人ニ對シ又ハ其他ノ被告人罪證ヲ湮滅シ若クハ逃走スルノ恐アル時若クハ未遂罪脅迫罪ヲ犯シ仍ホ其目的ヲ遂クルノ恐アル時ハ直ニ勾引狀ヲ發ス可シ

第四十四條 審問委員ハ勾引狀ヲ受ク可キ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ委シテ之ヲ執行スルコトヲ得

第四十五條 審問委員ハ召喚狀若クハ勾引狀ヲ受ケタル被告人疾病其他正當ノ事故アリテ令狀ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得若シ被告人遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十六條 審問委員ハ被告人ノ所在ヲ覺知スルコト能ハサル時ハ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ハ各控訴裁判所ノ檢事長ニ人相書ヲ送り其逮捕ヲ求ム可シ

第四十七條 審問委員ハ被告人禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發スルコトヲ得

收禁狀ヲ發シタル後若シ被告事件禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ニ非ス又其收禁ヲ要セサル者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ解ク可シ

第四十八條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ臨檢家宅搜索物件押收ノ處分ヲ爲スコトヲ得其處分ヲ爲ス時ハ錄事之ニ會同シ調書ヲ作ル可シ

其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ其地ノ司法警察官ニ其處分ヲ囑託スルコトヲ得

第四十九條 審問委員ハ事實審明ノ爲メ驛遞電信鐵道ノ官署及ヒ諸會社ニ事由ヲ通知シテ被告人ニ關係アル往復文書電報及ヒ物件ヲ收受開披スルコトヲ得

其場所遠隔ノ地ニ在ル時ハ第四十八條第二項ノ例ニ依ル



證人疾病其他正當ノ事故アリテ呼出ニ應スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其所在ニ就テ之ヲ訊問スルコトヲ得

證人遠隔ノ地ニ住スル時ハ第四十八條第二項ノ例ニ依ル

第五十一條 審問委員ハ被告人及ヒ證人ノ訊問ヲ爲ス時ハ録事之ニ會同シ調書ヲ作り訊問及ヒ供述ヲ録取シ被告人若クハ證人ニ讀示セシメ其陳述シタル所ニ違ハサルヤ否ヲ問ヒ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ記ス可シ

被告人及ヒ證人ハ其陳述ヲ變更増減セシコトヲ請求スルコトヲ得

第五十二條 審問委員ハ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ要スル時ハ學術又ハ職業ニ因リ鑑定スルコトヲ得可キ者ニ命シテ其鑑定ヲ爲サシム可シ

鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其方法結果及ヒ鑑定ヲ爲シタル時間ヲ詳記シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記シ署名捺印ス可シ

第五十三條 審問委員ハ證人鑑定人通事正當ノ事故ヲ證明セシテ其呼出ニ應セサル時ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ科ス可シ但其證人ニ對シ勾引狀ヲ發スルコトヲ得

證人陳述ヲ肯セサル時ハ普通刑法第八十條ニ依リ又鑑定人鑑定ヲ肯セサル時ハ普通刑法第七十九條ニ依リ罰金ヲ科ス可シ

第五十四條 證人鑑定人通事ニ罰金ヲ科スル時ハ普通刑法第二十七條ニ從フ但罰金ヲ禁錮ニ換フル時モ亦審問委員之ヲ命ス

第五十五條 審問委員ハ審問ニ於テ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ直ニ本件ト共ニ審問ス可シ共犯ヲ覺擧シタル時ハ之ヲ鎮守府長官司若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

第五十六條 審問委員ハ審問終リタル時ハ其報告書ヲ作り意見書ヲ添ヘ訴訟文書ト共ニ之ヲ鎮守府長官司若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ具申ス可シ

第六章 判決

第五十七條 鎮守府長官若クハ司令官審問事件ノ具申ヲ受ケ被告人上長官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

東京軍法會議ノ判士長審問事件ノ具申ヲ受ケ被告人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ之ヲ海軍卿ニ具申シ其他ノ者ナル時ハ直ニ判決ニ付ス可シ

第五十八條 海軍卿審問事件ノ具申ヲ受ケタル時ハ軍法會議ヲ開ク可キ命令書ヲ鎮守府長官司若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下ス可シ

第五十九條 鎮守府長官若クハ司令官軍法會議ヲ開ク時ハ其命令書ヲ判士長ニ下シ其謄本ヲ訴訟文書ト共ニ主理ニ下附シ主理ハ之ヲ判士長ニ交付シ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

東京軍法會議ノ判士長軍法會議ヲ開ク時ハ之ヲ主理ニ通知シ主理ハ會議ノ日時ヲ判士ニ通報ス可シ

第六十條 軍法會議ヲ開ク時ハ判士長判士主理録事各其席ニ就キタル後判士長被告人ヲ出



廷セシム

判士長ハ先ツ被告人ノ官位勳等職名氏名族籍年齢住所ヲ問ヒ訊問ヲ爲スノ旨ヲ告示シ録事ヲシテ審問委員ノ報告書ヲ朗讀セシム

其朗讀終リタルノ後判士長ハ被告事件ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ其訊問ヲ爲サシム

第六十一條 判士長ハ開廷ヨリ判決ニ至ルマテ令狀ヲ發スルコトヲ得

判士長ハ法廷ニ於テ警戒ノ爲メ其處置ヲ爲スコトヲ得

法廷ニ於テ罪ヲ犯ス者アル時ハ判士長其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシム可シ

法廷ニ於テ證人鑑定人及ヒ通事ヲ要スル時ハ第五章ノ例ニ依ル

第六十二條 判士長ハ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人出廷ノ命ニ應セサル時ハ之ヲ引致ス可シ但疾病其他正當ノ事故ニ因リ出廷スル能ハサルコトヲ證明シタル時ハ其審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十三條 罰金ノ刑ニ該ル可キ被告人召喚狀ヲ受ケ審判ノ日時ニ出廷セサル時ハ闕席裁判ヲ爲スコシ

第六十四條 被告人逃走シテ審判ノ日時ニ出廷セヌ又ハ召喚狀ヲ送達スルコトヲ得サル時ハ闕席裁判ヲ爲スコシ

第六十五條 數人共犯ノ審判ヲ爲ス時被告人中闕席シタル者アリト雖モ出廷シタル者ニ對

シ審判ヲ爲スコシ

第六十六條 判士長ハ被告人ヲ訊問シタル後證人ヲ訊問シ若クハ判士ニ命シテ訊問セシム可シ

第六十七條 判士長ハ證人ノ陳述不實ニシテ故意ニ出テ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ者ト認メタル時ハ收禁狀ヲ發シ更ニ訊問ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ訊問ヲ爲サシメ鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ判士長ハ各其所管長官ニ具申シ東京軍法會議ノ判士長ハ其證人准士官以上及ヒ同等以上ノ軍人ナル時ハ海軍卿ニ具申ス可シ

其處分ヲ爲シタル時ハ判士長ハ本件ノ審判ヲ延期スルコトヲ得

第六十八條 判士長ハ法廷ニ於テ更ニ檢證ノ處分ヲ要スルコトアル時ハ其處分ヲ爲シ若クハ判士ニ命シテ其處分ヲ爲サシムヘシ

法廷ニ於テ共犯ヲ覺擧シタル時ハ第六十七條ノ例ニ從ヒ具申ス可シ

若シ餘罪ヲ覺擧シタル時ハ本件ト共ニ其審判ヲ爲スコシ

第六十九條 判士長ハ被告人及ヒ證人ノ訊問終リタル時ハ更ニ被告人ニ對シ他ニ陳述ス可キ事件ナキヤ否ヲ問ヒ訊問終リタルノ旨ヲ告ケ被告人ヲ退廷セシム可シ

第七十條 判決書ハ判士事實ト法律トニ依リ左ノ條件ニ照シ之ヲ作り判士長判士録事署名捺印ス可シ

一有罪ノ判決書ニハ犯罪ノ證憑及ヒ其罪ヲ罰ス可キ法律ノ正條ヲ記ス



二無罪ノ判決書ニハ被告事件罪トナラサルコト及ヒ其理由ヲ記シ犯罪ノ證據備ハラサル時ハ其旨ヲ記ス

三免訴ノ判決書ニハ公訴ノ期滿免除ト爲リタルコト大赦アリタルコト法律ニ於テ其罪ヲ全免スルコト及ヒ其理由ヲ記ス

四被告人ノ官位勳等職名氏族籍年齢住所及ヒ軍法會議判決ノ年月日ヲ記ス

第七十一條 鎮守府軍法會議若クハ艦隊軍法會議ノ判士長ハ判決書ニ訴訟文書ヲ添へ各其所管長官ニ具申ス可シ

第七十二條 鎮守府長官司令官ハ左ニ記載スル事件ハ海軍卿ニ上申シテ命ヲ請ヒ其他ハ之ヲ專決ス

死刑

上長官及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪

士官准士官及ヒ同等軍人ノ重罪

第七十三條 東京軍法會議ノ判士長ハ判決書ニ訴訟文書ヲ添へ海軍卿ニ上申シテ命ヲ請フ可シ

第七十四條 鎮守府長官司令官ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ其專決ノ權アル事件ハ直ニ之ヲ再議セシムルコトヲ得

其專決ノ權ナキ事件ハ意見ヲ附シテ海軍卿ニ上申ス可シ

第七十五條 海軍卿ハ其判決ヲ不適當ト思量スル時ハ直ニ其具申スル所ノ鎮守府長官司令官若クハ東京軍法會議ノ判士長ニ下シテ之ヲ再議セシムルコトヲ得

海軍卿ハ死刑並上長官以上及ヒ同等以上軍人ノ重罪輕罪並士官及ヒ同等奏任官軍人ノ重罪ニ係ルモノハ上奏シテ命ヲ請フ可シ

第七十六條 宣告執行ノ命令アリタル時ハ判士長判士主理録事法廷ニ臨ミ被告人ヲ出廷セシメ判士長其宣告ヲ爲ス可シ

第七十七條 外國若クハ航海中ニ於テ司令官又ハ艦長ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス

第七十八條 行刑ニ關スル方法ハ海軍卿別ニ之ヲ定ム

第七章 軍中處分

第七十九條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官麾下ノ將校若クハ其地ニ在ル將校中ヨリ撰ミ專任判士ヲ置キ被告人ノ官等ニ拘ハラヌ之ヲ審判セシム但將校缺乏ノ場合ニ於テハ他ノ官吏ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

第八十條 合圍ノ地ニ於テハ第十三條第十四條第十五條ニ記載シタル者ハ合圍軍法會議ノ權限ニ屬ス

第八十一條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官被告人ノ官等ニ拘ハラヌ直ニ審判及ヒ其宣告執行ノ命令ヲ下スコトヲ得



第八十二條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官又ハ艦長ハ輕罪ノ刑ノ宣告ヲ受ケタル者ニ戴罪服務ヲ命スルコトヲ得但戴罪服務ノ日數ハ刑期ニ算入セス  
其戴罪服務中巧績アル者ハ司令官其刑ヲ減免スルコトヲ得

第八十三條 臨戰若クハ合圍ノ地ニ於テハ其司令官時宜ニ因リ此治罪法ノ條目ヲ省略處分セシムルコトヲ得

第八十四條 合圍軍法會議ヲ廢スルニ當リ既ニ審判ニ着手シタル者ハ海軍卿ノ指定スル軍法會議若クハ其事件ヲ管理ス可キ官司ニ送致ス可シ

○東海鎮守府軍法會議ヲ橫須賀ニ置ク 十七年四月一日  
海軍省第三號府縣へ達  
今般東海鎮守府ニ軍法會議ヲ設置シ該會議ヲ橫須賀ニ置候條爲心得此旨相達候事

第十三類 教育

第七十 大學令 十九年三月二日布告 勅令第三號

朕帝國大學令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年三月一日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
文部大臣 森 有 禮

勅令第三號

帝國大學令

第一條 帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ攷究スルヲ以目的トス

第二條 帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奧ヲ攷究シ分科大學ハ學術技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條 分科大學ノ學科ヲ卒ヘ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條 分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入り學術技藝ノ蘊奧ヲ攷究シ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第五條 帝國大學職員ヲ置ク左ノ如シ

第十三類 教育



總長 勅任

評議官

書記官 奏任

書記 判任

第六條 帝國大學總長ハ文部大臣ノ命ヲ承ケ帝國大學ヲ總轄ス其職掌ノ要領ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一 帝國大學ノ秩序ヲ保持スル事

第二 帝國大學ノ狀況ヲ監視シ改良ヲ加フルノ必要アリト認ムル事項ハ案ヲ具ヘテ文部大臣ニ提出スル事

第三 評議會ノ議長トナリテ其議事ヲ整理シ及議事ノ顛末ヲ文部大臣ニ報告スル事

第四 法科大學長ノ職務ニ當ル事

第七條 評議會ハ便宜ニ從ヒ帝國大學若クハ文部省ニ於テ開設ス

評議會ノ議ニ付スヘキ事項左ノ如シ

第一 學科課程ニ關スル事項

第二 大學院及分科大學ノ利害ノ銷長ニ關スル事項

第八條 評議官ハ文部大臣各分科大學教授ヨリ各二人ヲ特選シテ之ニ充ツ

第九條 評議官ハ五箇年ヲ以テ任期トス任期滿ツルノ後時宜ニ依リ更ニ勤績ヲ命スルコト

アルヘシ

第十條 分科大學ハ法科大學醫科大學工科大学文科大學及理科大学トス

法科大學ヲ分テ法律學科及政治學科ノ二部トス

第十一條 各分科大學職員ヲ置ク左ノ如シ

長 奏任

教頭 奏任

教授 奏任

助教授 奏任

舍監 奏任

書記 判任

第十二條 分科大學長ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

分科大學長ハ帝國大學總長ノ命令ノ範圍内ニ於テ主管科大學ノ事務ヲ掌理ス

第十三條 各分科大學ノ教頭ハ教授ヨリ特選シテ之ニ兼任ス

教頭ハ教授及助教授ノ職務ヲ監督シ及教室ノ秩序ヲ保持スルコトヲ掌ル

第十四條 各分科大學ノ教授助教授ノ人員ハ其學科ノ輕重及學生ノ員數ニ應シテ別ニ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

○師範學校令 十九年四月十日布告 勅令第十三號



朕師範學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年四月九日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
文部大臣 森 有禮

勅令第十三號

師範學校令

第一條 師範學校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所トス

但生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注目スヘキモノトス

第二條 師範學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等師範學校ハ東京ニ一箇所尋常師範學校ハ府縣ニ各一箇所ヲ設置スヘシ

第四條 高等師範學校ノ經費ハ國庫ヨリ尋常師範學校ノ經費ハ地方稅ヨリ支辨スヘシ

第五條 尋常師範學校ノ經費ニ要スル地方稅ノ額ハ府知事縣令其豫算ヲ調整シ文部大臣

ノ認可ヲ受クヘシ

第六條 師範學校長及教員ノ任期ハ五箇年トス滿期ノ後猶ホ繼續スルコトアルヘシ

第七條 尋常師範學校長ハ其府縣ノ學務課長ヲ兼ヌルコトヲ得

第八條 師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第九條 師範學校生徒ノ學資ハ其學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

第十條 高等師範學校ノ卒業生ハ尋常師範學校長及教員ニ任スヘキモノトス但時宜ニ依  
リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十一條 尋常師範學校ノ卒業生ハ公立小學校長及教員ニ任スヘキモノトス但時宜ニ依  
リ各種ノ學校長及教員ニ任スルコトヲ得

第十二條 師範學校ノ學科及其程度并教科書ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

○小學校令 十九年四月十日布告  
勅令第十四號

朕小學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
文部大臣 森 有禮

勅令第十四號

小學校令

第一條 小學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス

第二條 小學校ノ設置區域及位置ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第三條 兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トシ父母後見人等ハ其學齡兒童ヲ

シテ普通教育ヲ得セシムルノ義務アルモノトス

第四條 父母後見人等ハ其學齡兒童ノ尋常小學科ヲ卒ラサル間ハ就學セシムヘシ其就學

第十三類 教育



ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第五條 疾病家計困窮其他止ムヲ得サル事故ニ由リ兒童ヲ就學セシムルコト能ハスト認定スルモノニハ府知事縣令其期限ヲ定メテ就學猶豫ヲ許スコトヲ得

第六條 父母後見人等ハ小學校ノ經費ニ充ツル爲メ其兒童ノ授業料ヲ支辨スヘキモノトス其金額ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第七條 寄附金及其他ノ收入金アリテ小學校ノ經費ニ供スルトキハ其收入及支出ノ方法ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第八條 授業料及寄附金等ヲ以テ小學校ノ經費ヲ辨シ能ハサル場合ニ於テハ區町村會ノ議決ニ依リ區町村費ヨリ其不足ヲ補フコトヲ得

第九條 小學校教員ノ俸給旅費ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第十條 小學校資金ノ收入及支出ハ其管理者ヨリ毎三箇月府知事縣令ニ報告スヘシ

第十一條 小學校ニ屬スル資産ノ管理ニ關スル規程ハ府知事縣令ノ定ムル所ニ依ル

第十二條 小學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第十三條 小學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ

第十四條 私立學校ニ於テ小校學ト均シキ普通教育ヲ兒童ニ施サントスルモノハ豫メ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十五條 土地ノ情況ニ依リテハ小學簡易科ヲ設ケテ尋常小學科ニ代用スルコトヲ得但其經費ハ區町村費ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十六條 小學簡易科教員ノ俸給ハ地方稅ヲ以テ之ヲ補助スルコトヲ得

○中學校令 十九年四月十日布告 勅令第十五號 朕中學校令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年四月九日 內閣總理大臣伯爵伊藤博文 文部大臣 森 有 禮

勅令第十五號 中學校令 第一條 中學校ハ實業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ學校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ爲ス所トス

第二條 中學校ヲ分チテ高等尋常ノ二等トス高等中學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬ス

第三條 高等中學校ハ法科醫科工科文科理科農業商業等ノ分科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等中學校ハ全國北海道 神戶 關東 關西 四國 九州ノ五區ニ分畫シ每區ニ一箇所ヲ設置ス其區域ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第五條 高等中學校ノ經費ハ國庫ヨリ之ヲ支辨シ又ハ國庫ト該學校設置區域内ニ在ル府縣ノ地方稅トニ依リ之ヲ支辨スルコトアルヘシ但此場合ニ於テハ其管理及經費分擔ノ



方法等ハ別ニ之ヲ定ムヘシ

第六條 尋常中學校ハ各府縣ニ於テ便宜之ヲ設置スルコトヲ得但其地方税ノ支辨又ハ補助ニ係ルモノハ各府縣一箇所ニ限ルヘシ

第七條 中學校ノ學科及其程度ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依ル

第八條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ限ルヘシ

第九條 尋常中學校ハ區町村費ヲ以テ設置スルコトヲ得ス

○諸學校通則 十九年四月十日布告

勅令第十六號

朕諸學校通則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年四月九日

内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文  
文部大臣 森 有禮

勅令第十六號

諸學校通則

第一條 師範學校ヲ除クノ外各種ノ學校又ハ書籍館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事縣令ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府

縣立ト同一ニ之ヲ認ムルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名稱ヲ附スルコトヲ得

第二條 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第二條 學校幼稚園書籍館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經

ヘク其區町村立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ其私立ニ係ルモノハ設置變更

ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク廢止ハ府知事縣令ニ上申スヘシ

第四條 凡教員ハ文部大臣若クハ府知事縣令ノ免許狀ヲ得タルモノタルヘシ

第五條 公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシ

●同指令

●公立學校用地免稅ノ件ニ付愛媛縣ヨリ大藏省ヘ伺 十九年四月十九日 (十九年五月七日官報)

(十九年五月七日官報)

勅令第十六號諸學校通則第五條ニ公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシトアリ右用地トハ教場ハ勿論運動場文庫敷設學費  
驗用ニ供スル土地等ノ本校一區域外ニ在ルモノト雖苟モ該校ノ所用ニ屬スルモノハ學校ノ所有ト否トニ拘ラス總テ  
免稅可相成儀ト心得然ルヘキヤ

指令 十九年四月三十日

公立學校ノ所有ニ屬セサルモノハ免稅相成ラス

第七十一 教科用圖書檢定條例ヲ定ム

十九年五月十日  
文部省令第七號

教科用圖書檢定條例左ノ如ク相定ム

教科用圖書檢定條例

檢定要領



第一條 小學校師範學校若クハ中學校ノ教科用ニ充ツルニ足ルト思考スル處ノ圖書ヲ有スルモノハ文部省ニ願出テ其檢定ヲ請フコトヲ得

第二條 文部省ニ於テ檢査ノ上教科用ニ適スト認ムルトキハ免許證ヲ下付シ之ヲ公告スヘシ

第三條 檢定ヲ經タル圖書ヲ教科用圖書トシテ用ヒ得ヘキ年限ハ免許證下付ノ日附ヨリ起算シテ五箇年トス

第四條 前條ノ期限繼續ヲ請ハントスルモノ其滿期前ニ於テ追願スルトキハ更ニ檢査ノ上免許證ヲ下付スルコトアルヘシ

第五條 第一條若クハ第四條ニヨリ檢定ヲ願出ルニハ著者出版者連署ノ願書ト共ニ該圖書及其譯述旨意書ヲ添ヘ之ニ左ノ手數料ヲ付シテ出スヘシ

一 小學校教科用圖書

金拾圓

一 右追願

金三圓五拾錢

一 師範學校  
一 中學校 教科用圖書

金貳拾圓

一 右追願

金七圓

第六條 圖書檢査ノ上特ニ教育ニ有益ナルモノト認ムルトキハ文部省ヨリ其著者者ニ賞狀ヲ與フルコトアルヘシ

第七條 免許證ヲ得タル後著者者或ハ出版者轉籍轉居シ又ハ氏名ヲ變換シタルトキハ二箇月

以內ニ文部省ニ届出ヘシ

第八條 免許證ヲ有スル期限中其圖書ノ版權ヲ賣買シ若クハ分版シタルトキハ二箇月以內ニ雙方連署ノ上文部省ニ届出ヘシ

第九條 免許證ヲ毀損紛失シタル等ノトキハ其再渡ヲ願出ルコトヲ得

第十條 免許證ヲ有スル期限中ニ於テ該圖書ニ改正増補等ヲナシ又ハ書名ヲ改メタルトキハ免許證ハ其効力ヲ失フモノトス

第十一條 無効ノ免許證ヲ使用シタルモノハ金貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

檢定手續

第七條及第八條ノ届出ヲ爲サハルモノハ金壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第十二條 教科用圖書檢定ニ關スル願書類ハ總テ出版者所在地方廳ヲ經テ文部省ニ出スヘシ

第十三條 教科用圖書檢定ヲ願出ルトキハ第一號書式ニ據リ一種ノ圖書ニ付願書ニ通該圖書二部及其譯述旨意書ニ第五條ノ手數料ヲ付シテ之ヲ出スヘシ其譯述旨意書ハ明瞭ニ該圖書ノ要項ヲ記スヘシ

第十四條 第四條ニヨリ追願スルトキハ第二號書式ニ據リ前條ノ手續ヲ經ヘシ

第十五條 第七條及第八條ノ場合ニ於テ届出ヲナストキハ免許證ノ番號日附及圖書名卷冊記號等ヲ記スヘシ



第十六條 第九條ニヨリ免許證ノ再渡ヲ願出ルトキハ第三號書式ニ據リ其理由ヲ記シテ之ヲ出スヘシ

第十七條 免許證ヲ得タルモノハ出願本人ニ於テ第四號書式ニ據リ其書物ノ見返シ若クハ圖面ノ見易キ處ニ免許證ヲ有スル間ノ年限ヲ印スヘシ

第十八條 第二條ノ免許證書式左ノ如シ

(免許證雛形略之)  
第一號書式 願書ノ用紙ハ總テ半紙トス

教科用圖書檢定願

一 圖書名

卷冊記號

何年何月何日出版

右ハ小師範中學校教科用ニ充ツルニ足ルト思考候ニ付御檢定ヲ願度依テ右手數料金何圓并同圖書二部ニ旨意書相添此段相願候也

何地方廳管下

地名番地居住

族籍

氏

名 印

年 月 日

著者  
編譯者  
何地方廳管下

地名番地居住  
族籍

出版者

氏

名 印

文部大臣某殿

第二號書式

教科用圖書檢定追願

一 圖書名

卷冊記號

何年何月何日出版

右ハ何年何月何日附第何號免許證御下付相成候モノニ有之候處何年何月何日ニテ滿期相成候ニ付テハ期限ノ繼續ヲ願度依テ右手數料金何圓並同圖書二部相添此段相願候也  
(署名其他第一號書式ノ通)

第三號書式

免許證毀損(等)ニ付再渡願

一 何年何月何日附第何號免許證

一 圖書名

卷冊記號

右免許證ハ私所有ニ有之候處何年何月何日何地ニ於テ云云ノ爲メ毀損(等)候ニ付再渡相成度此段相願候也



(署名其他第一號書式ノ通)

第四號書式

寸方大小ハ圖書ニ準シ適宜ニスヘシ

自何年何月何日 文部省檢定小師範學校教科用  
至何年何月何日 中

第十四類 勸業

第七十二上 勸業會

○勸業諮問會并勸業委員設置心得條項中改正 十九年一月廿六日 農商務省第一號府縣へ達  
明治十六年<sup>七</sup>月<sup>七</sup>日<sup>七</sup>當省第八號達第十五項左ノ通改正候條此旨相達ス  
第十五項施行ノ後本省へ報告スヘキ件

諮問會員ノ人名

開會ノ筆記

勸業委員ノ人員

各會設置ノ位地及名稱

已上ニ關スル諸費用ノ豫算決定額

○勸業諮問會并勸業委員設置心得方中更正 十九年二月二十四日 農商務省第四號府縣へ達  
明治十六年<sup>七</sup>月<sup>七</sup>日<sup>七</sup>當省第八號達第一項中其三以下左ノ通更正ス

- 三 農商工水産山林鑛山ノ利害及改良保護ニ關スル事
- 四 農商工水産山林鑛山ニ關スル統計ノ事

○商工會及商法會議所等ヨリ農商工業ノ件ニ付官署ニ對シ建議答申又ハ意見書報告書呈  
出ノ節取扱方 十九年八月三日 農商務省訓令第十二號北海道廳府縣  
商工會若クハ商法會議所等ヨリ農商工業ノ件ニ付官署ニ對シ建議答申ヲ爲シ又ハ意見書若クハ報告書ヲ呈スルトキハ  
其都度直ニ騰本ヲ當省へ送付サシムヘシ  
但其應ヨリ諮問等ヲナストキハ其都度當省へ騰本ヲ送付ス可シ

第十四類 勸業



○茶業組合準則追加等 十九年二月十五日 (内務大臣連署)  
農商務省第二號府縣へ達  
明治十七年<sup>三</sup>兩省第四號達ニ據リ茶業組合規約認可ノ上農商務省へ届出ノ處自今取締所ニ係ルモノ、外ハ届出ニ及ハ  
ス  
同號達茶業組合準則第三條第二項ノ次へ左ノ一項ヲ追加シ第三項ヲ第四項トス  
追加

第三項 製茶検査法ヲ設ケ其正否ヲ區別スルヲ  
○農事巡回教師ヲ設置ス 十八年八月六日  
農商務省第三十三號府縣へ達

農事改良ヲ圖ランカ爲ニ左ノ條項ニ依リ農事巡回教師ヲ設置候條此旨相達候事  
第一條 農事巡回教師ハ普通農事及養蠶製絲製茶製茶害蟲收畜ノ業務毎ニ之ヲ設ク  
但最初ハ養蠶製絲製茶及ヒ普通農事トシ其他ハ漸次習手スルモノトス

第二條 農事巡回教師ハ甲乙二部ニ分チ甲部ハ全國ヲ巡回シ乙部ハ一府縣内ヲ巡回スルモノトス  
第三條 甲部農事巡回教師ハ常省ヨリ派出シ農務局員ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第四條 甲部農事巡回教師ノ巡回ハ六箇月以内トシ從來定ムル所ノ農區ニ據リ巡回セシムルモノトス  
第五條 乙部農事巡回教師ハ地方官ヲシテ其管内實業者中老練ニシテ名望アリ兼テ學理ニ通スルモノヲ選ハシメ當省  
ヨリ之ヲ命スルモノトス

但選定ノ上ハ本人履歷書ヲ添へ當省へ申出ヘシ  
第六條 乙部農事巡回教師ハ任期中取扱判任官ニ準シ無給トス  
但任免ノ節旅費ヲ給セス  
第七條 乙部農事巡回教師ハ巡回中手當金 旅費電信郵便運墨料 等ニ充ルモノトス 但金領ハ毎年別段ノ達ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第八條 乙部農事巡回教師ノ巡回期節及其區劃ハ府知事縣令適宜之ヲ定ムヘシ  
第九條 乙部農事巡回教師ハ其復命報告書ヲ地方官ヲ經由シテ當省へ差出スヘシ  
第十條 乙部農事巡回教師ハ左ノ如ク心得ヘシ  
乙部農事巡回教師心得

第一項 農事巡回教師ハ各其職務ニ就テ實業者ノ知識ヲ開キ拙キモノヲ巧ニシ衰ヘタルヲ盛ニセシカ爲メ専ラ勝  
導ノ力ヲ盡スヘキモノナレハ人ニ接スルニ溫柔懇切ナルヘシ決シテ倨傲ノ舉動アラサルヤウ注意スヘシ  
第二項 巡回中ハ其職務ニ就テ見聞スル事項ニ注意シ若シ有害ト認ムルモノアルトキハ細ニ其理由ヲ述ヘテ説諭ヲ  
ナスヘシ

第三項 巡回中ハ其地方ノ勸業主務者即チ勸業課課役所又ハ勸業委員ト協議シ實業者ヲ招キ頻メテ談話シ又ハ實業  
者ノ質問ヲ受ケテ答辯ヲナスヘシ  
但可成人民執業ノ時間ヲ妨ケサルヤウ注意スヘシ

第四項 巡回先ノ地ニ農談會集談會若クハ諮問會等アルトキハ其席ニ臨ミテ談話シ又ハ質問ニ答辯スヘシ  
第五項 質問中答辯シ難キ事アルトキハ其理由ヲ詳カニ記載シテ農務局ニ出シ説明ヲ乞フヘシ

第六項 有益ノ發明又ハ衆人ノ模範タルヘキ事業ヲ起シモノアルヲ見聞セシトキハ其旨ヲ報道スヘシ  
第七項 巡回中見聞セシ事ニ就キ意見アルトキハ書取ヲ以テ農商務卿又ハ地方長官ニ申出ルヲ得ヘシ  
第八項 巡回中ノ談話筆記其他見聞セシ事項ハ可成精密ニ記載シテ報告書トナシ復命スヘシ

○農商務通信規則ヲ定ム 十六年十二月廿八日  
農商務省第二十一號府縣(沖繩縣ヲ除ク)へ達  
農務工山林ノ盛衰治長ヲ詳悉スヘキ爲メ生産消費ノ數量ヲ調査スルハ勸業ノ要務ナルヲ以テ通ク全國通信ノ氣脈ヲ通  
絡スヘキ農商務通信規則左之通相定候條右ニ準シ取扱フヘシ此旨相達候事  
但本文ニ關スル通信事項ハ更ニ主務局ヨリ通牒スヘシ



農商務通信規則

- 第一條 農商工山林ニ關スル事件ハ此規則ニ據リ府縣廳及ヒ通信員ヨリ主務局ニ報告シ主務局ハ府縣廳又ハ通信員ニ諮問應答スヘシ
- 第二條 通信ヲ分チテ定期報臨時報ノ二種トス  
但府縣管内ニ施行スヘキ通信規則ハ各府縣ニ於テ適宜之ヲ設ケ通信ノ便益ヲ開クヘキモノトス 十七年第十五號省達ヲ以テ但書ヲ追
- 第三條 定期報トハ通信事件中特ニ報告期限ヲ定メタルモノヲ云フ
- 第四條 臨時報トハ通信事件中報告期限アルト否トニ關セテ臨時報告ヲ要スヘキモノヲ云フ  
但非常ノ變異ニ係ル場合ハ電報ヲ用フヘシ
- 第五條 報告上物質形狀等文辭ニ盡シ難キモノハ圖畫寫真雜形若クハ見本等ヲ添ヘ數量比例歩合等ニ係ルモノハ表ヲ附スヘシ
- 第六條 報告ハ可成平易ノ文字ヲ用井又數量歩合等ニシテ地方慣用ノ稱呼アルモノ及ヒ方言等ハ解説ヲ加フヘシ
- 第七條 府縣廳又ハ通信員ニ於テ質問ヲ要スル事件アルトキハ其事由ヲ詳記シテ主務局ニ質問スヘシ
- 第八條 定期及ヒ臨時報ノ外農商工山林ニ關シ尙ホ報告ヲ要スヘキ事項左ノ如シ  
一 地方廳ノ調査委員會協會等ノ規則并ニ報告書又ハ官民ノ著述編纂翻譯及ヒ報告書等ハ可成現本ヲ送致スヘシ  
但著譯書等冊數浩濶ナルモノハ題名目錄及ヒ其要旨ノミヲ報告スルモ妨ケナシ  
二 有功者ノ事蹟及ヒ履歷等ハ古今ニ拘ハラズ調査報告スヘシ  
三 改良發明試驗ノ成績及ヒ該事業ニ關スル各地方從來ノ習慣新設ノ方法等ハ可成周密ニ報告スヘシ  
四 博覽會共進會集談會等ノ開設アルトキハ其開閉期日及ヒ出品談話ノ景况等ヲ報告スヘシ
- 第九條 第一條第七條ニ依リ通信員ト主務局ノ間ニ於テ文書ノ往復ヲ爲シタルトキハ其寫ヲ添ヘ通信員ヨリ直チニ府縣廳ヘ申報スヘシ

第十條 通信員ハ各府縣ニ於テ適宜相設ケ族籍姓名住所ヲ記シ當省ヘ届出ツヘシ  
但府縣管内ノ通信委員ヲシテ之ヲ兼テシムヘキモノトス

○農商務通信規則ニ據リ通信員ヨリ直接ニ主務局ヘ報告ヲ要スヘキ事項ヲ定ム 十七年三月二十七日農商務省第七號府縣(沖繩縣ヲ除ク)ノ達

明治十六年十二月 當省第二十一號達農商務通信規則ニ據リ通信員ヨリ直接ニ主務局ヘ報告ヲ要スヘキモノハ當分ノ内左ノ事項ニ限ルヘシ此旨相達候事  
一 蟲害蔓延ノ勢アルトキ  
一 牛馬傳染病劇烈ノ徵候アルトキ  
○種牛馬貸與規則 十五年二月九日 農商務省第二號府縣ヘ達  
自今種牛馬貸與候節ハ別紙規則ニ照シ貸渡候條此旨相達候事  
但從前貸與之分モ此規則ニ準據スヘシ

種牛馬貸與規則

- 第一條 種牛馬貸與ノ主義ハ漸次種類ヲ改良シ良畜ノ蕃息ヲ謀ルモノトス
- 第二條 種牛馬貸與ヲ請求スルニハ其首養及ヒ蕃息ノ方法等ヲ詳記シ當省ヘ伺出ヘシ
- 第三條 一借受及返納ニ係ル一切ノ諸費ハ借主ノ自辨クルヘシ  
但當省ノ都合ニ依リ返納セシムル片ハ其率付費ヲ下付スヘシ

第十四類 勸業



第四條

一貸與中時々主務官吏ヲ派遣シ畜養等ノ實況ヲ視察セシムヘシ

但當省官吏臨時派出檢査スルコトモアルヘシ

第五條

一牡牛馬貸與年限牛ハ三ヶ年馬ハ四ヶ年トシ滿期ニ至リ返納セシムルモノトス

但牛ハ二十四ヶ月馬ハ三十六ヶ月未滿ノモノヲ貸與セルハ本條年限ニ算入セサルモノトス

第六條

一牡牛馬貸與中又ハ滿期ノ際其同種類ノ異族(例ハ短角種牛ニテ其(例ハ短角種牛ニテ其)ハ甲乙借主示談ノ上交換貸與ヲ請願スルハ之ヲ許可シ其省農務局ヘ通知スヘシ

第七條

一貸與牝牛馬ヨリ生産セシ獲駒ハ初産ヨリ交互(第一初産一頭ヲ納メ第二産ハ借主專領シ第三産)ニ左ノ頭數ヲ上納セシムヘシ

牛 七才以下ノモノ 獲三頭

馬 八才以上ノモノ 全二頭

馬 八才以下ノモノ 全二頭

第八條

一前條上納ニ充ツヘキ獲駒ハ生産後牛ハ二十ヶ月馬ハ二十ヶ月以外ニ於テスヘシ其奉付入費ハ下ヶ渡スモノトス

但本文期限内ト雖モ上納ヲ命スルコトモアルヘシ

第九條

一第七條ニ據クル獲駒ノ頭數ヲ上納シ了ルモノハ其母牛馬ハ借主ニ下與スルモノトス

第十條

一第七條ニ據クル獲駒其管内ニ貸與ノ見込アルハ其方法ヲ監査シ不都合ナキニ於テハ本則ニ違據シ貸與ノ上農務局ヘ通知スヘシ

第十一條

一交尾ノ景況ハ毎年十二月限リ別紙申號雛形ニ據リ農務局ヘ報告スヘシ

第十二條

一分娩ハ其都度別紙シ號雛形ニ據リ農務局ヘ報告スヘシ

第十三條

一死亡ハ別紙丙號雛形ニ據リ其景況ヲ詳記シ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ其都度農務局ヘ報告スヘシ

第十四條

一傳染病ヲ除クノ外斃牛馬ハ其借主ニテ適宜處分スヘシ

第十五條

一疾病ノ徴アルハ速ニ治療ノ手當ヲ爲シ其都度農務局ヘ報告スヘシ

但傳染病ニ係ルモノハ急報スヘシ

第十六條

一傳染病流行ノ際ハ種牛馬及上納獲駒共其奉付ヲ見合スヘシ

第十七條

一畜養ヲ粗畧ニシ又ハ交尾度數ヲ超過シ若シクハ本則ニ違背スルハ直ニ返納セシムヘシ

第十八條

一貸與牛馬失跡シ若シクハ畜養交尾等不注意ヨリ斃死セシムルハ借主ヨリ相當代價ヲ辨償セシムヘシ

(諸表畧ス)

○種牡牛馬取締方法項目

十八年一月二十四日 農商務省第一號府縣ヘ達



種畜條例發布相成候マテ左ノ項目ニ據リ種牝牛馬取締方法適宜相設可届出此旨相達候事  
 但種牝牛馬ハ左ノ離形ニ據リ壹箇年分取纏メ翌年二月十五日限リ農商局へ報告スヘシ  
 第一 牛ハ滿二才以上滿十才以下ノモノヲ用フヘシ但洋種ハ十才以上ニ至ルモ妨ナシ  
 第二 馬ハ滿三才以上滿十六才以下ノモノヲ用フヘシ但洋種ハ十六才以上ニ至ルモ妨ナシ  
 第三 遺傳病ナキモノヲ用フヘシ  
 第四 惡癖ナキモノヲ用フヘシ  
 第五 強壯ニシテ骨格善長ナルモノヲ用フヘシ  
 第六 寸尺ノ制限ハ適宜之ヲ定ムヘシ  
 (表式略ス)

○田圃耕作物ノ害蟲豫防規則ヲ設ケ届出方 十八年十二月五日 農商務省第四十三號府縣へ達

田圃耕作物ノ害蟲ハ其發生ノ初ニ於テ各自之ヲ驅除スヘキハ勿論ニ候處往々之ヲ忽セニスルヨリ遂ニ蔓延ノ患ヲ來シ不測ノ災ヲ醸スモノ不尠ニ付田圃ノ大害ヲナス蟲類ニ限リ左項ニ其ツキ豫防規則ヲ設ケ農商務省へ届出ツヘシ此旨相達候事

- 第一項 田圃蟲害豫防規則ヲ設ケヘキ害蟲ノ種類ハ地方ノ狀況ニ據リテ之ヲ定ムヘシ
  - 第二項 害蟲田圃ニ發生セシトキハ其作人ヲシテ直チニ驅除ニ着手セシムヘシ
  - 第三項 驅蟲地區ハ町村ノ區域ニ據リ豫メ之ヲ劃定シ害蟲蔓延ノ徴アリト認ムルトキハ其區域内人民ヲシテ驅除ニ從事セシムヘシ
  - 第四項 前項ノ場合ニ於テハ其驅除ニ係ル一切ノ費用ハ町村費ヲ以テ支辨セシムヘシ
  - 第五項 田圃蟲害豫防規則ニ違背スルモノハ違背罪ノ刑ヲ以テ之ヲ處分スヘシ
- 羊毛買上手續ヲ定ム 十八年三月十八日 農商務省第三號告示

羊毛買上手續左ノ通相定候條此旨告示候事  
 羊毛買上手續

- 第一條 一本邦各地方ニ於テ畜養セシ細羊ヨリ剪收シタル羊毛買上ヲ出願スル者ハ其頭數ト收量トヲ記載シ管轄廳ヲ經テ農務局へ申出ツヘシ  
 但運賃ハ本人自辨タルヘシ
- 第二條 一農務局ニ於テハ其斤數及品位ヲ検査シ相當ノ價格ヲ定メ代金ハ管轄廳ヲ經テ下渡スヘシ
- 第三條 一羊毛ハ其品質ニ依リ價格ヲ左ノ三等ニ定ムヘシ  
 一等 一斤(量目百) 金三十拾五錢以上  
 二等 同 金三十拾錢以上  
 三等 同 金二十拾錢以上
- 第四條 一羊毛荷作リハ綿布麻布ノ類或ハ琉球表ヲ用フヘシ
- 第五條 一小數ノ細羊ヲ畜養スルモノハ聯合總代人ヲ立テ買上ヲ出願スルモ妨ケナシ
- 第六條 一羊毛検査ノ上不適用ト認ムルモノハ其理由ヲ指示シ返還等ノ處分ヲナスヘシ  
 但本條ノ場合ニ係ル運賃ハ本人ノ自辨タルヘシ



● 伺指令

● 種牛馬取締方法之儀ニ付静岡縣ヨリ農商務省へ伺 十八年二月二日 (十八年二月廿日官報)

種牛馬取締方法適宜相設可届出旨本年御省第一號ヲ以テ御達相成候處縣下ニ於テ是迄牛馬トモ雜種ヲ以テ種牡ニ供シ候者有之右等ノ者ハ該御達中第一第二項本文ニ據リ取扱可然哉

指令 十八年二月十八日 伺之通

● 種畜取締ノ件ニ付秋田縣ヨリ農商務省へ伺 十八年十一月四日 (十八年十一月廿四日官報)

本年一月御省第一號達第二項馬ハ瀨三才以上滿十六才以下ノモノヲ用フヘキ成規ニ有之候處年輪十六才ニ至ルモ骨幹尚強壯體格善良ニシテ長駒ヲ産出スル血統ノ正確ナルモノハ當分種畜ニ供用ヲ禁許不考儀ニ候哉

指令 十八年十一月十八日 伺之趣滿十六才ヲ超ルモノハ種牡馬ニ供用難相成儀ト可心得事

第七十二下 北海道轉籍移住者ノ手續ヲ廢ス 十九年七月二十二日 閣令第二十五號

明治十六年四月 太政官第拾號布達ヲ廢止ス

第七十三上 捕魚採藻ノ爲メ海面ヲ區畫シ所有者ノ借地料ヲ納メシム

八年十二月十九日 第百九十六號布告

從來人民ニ於テ海面ヲ區畫シ捕魚採藻等ノタメ所用致居候者モ有之候處右ハ固ヨリ官有ニシテ本年二月二十三號布告以後ハ所用ノ權無之候條從前ノ通所用致度者ハ前文布告但書ニ準シ借用ノ儀其管轄廳へ可願出此旨布告候事

參照 明治八年二月二十日第二十三號布告

從來雜稅ト稱スルハ舊慣ニ因リ區々ノ收稅ニテ輕重有無不平均ニ付別紙略稅目ノ分本年一月一日ヨリ相廢シ候以下地方稅規則等ニ依

但從前官有地借用右代料トシテ米金相納候分ハ是迄ノ通可相心得事

○ 捕魚採藻ノ爲メ海面所用願出許可ノ者内務省へ届出シム 八年十二月十九日 第百九十五號沿海府縣へ達

捕魚採藻等ノタメ海面所用ノ儀ニ付今般第百九十五號ヲ以布告候ニ付テハ右借用願出候者ハ調査ノ上差許其都度内務省へ可届出此旨相達候事 九年第七十四號公達

○ 捕魚採藻ノ爲メ海面所用ノ者適宜府縣稅ヲ賦セシム 九年七月十八日 第七十四號沿海府縣へ達

明治八年二月二十五號ヲ以捕魚採藻ノタメ海面所用ノ儀ニ付相達置候條處詮議ノ次第有之右但書取消シ候條以來各地方ニ於テ適宜府縣稅ヲ賦シ營業取締ハ可成從來ノ慣習ニ從ヒ處分可致此旨相達候事

○ 捕魚採藻ノ爲メ所用ノ者湖川ト雖モ海面ニ準シ處分シ其他官有ノ池沼借用料收入所用

差許方 九年十月三日 内務省乙第百十六號府縣へ達

捕魚採藻ノ爲メ海面所用之儀ニ付本年第七十四號ヲ以沿海府縣へ公達ノ旨モ有之付テハ湖川ト雖モ總テ海面ニ準シ處分可致其他官有ニ屬スル池沼ハ人民ノ願ニ因リ他ニ無障礙分ハ明治七年當省乙第五十五號達ニ照準各種ノ名義ヲ以借用料收入所用可然許相心得當省へ可申出此旨相達候事



○漁業組合準則ヲ定ム 十九年五月六日 農商務省令第七號北海道府縣(沖繩縣ヲ除ク)  
漁業組合準則左ノ通相定ム依テ此準則ニ基キ組合ヲ設置セシメ其規約認可ノ上當省へ届出ヘシ

漁業組合準則

- 第一條 漁業 水産動植物採 二從事スルモノハ適宜區畫ヲ定メ組合ヲ設ケ規約ヲ作り管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ  
但漁者僅少ニシテ他ノ漁場ニ關係セサル地ハ管轄廳ノ見込ヲ以テ組合ヲ要セサルコトアルヘシ
- 第二條 組合ハ營業ノ弊害ヲ矯正シ利益ヲ増進スルヲ目的トスヘシ
- 第三條 組合ハ左ノ二類トス
  - 第一類 捕魚採藻 遼海漁業若クハ大地引蠶 各其種類ニ從ヒ特ニ組合ヲナスモノ
  - 第二類 河海湖沼沿岸ノ地區ニ於テ各種ノ漁業ヲ混同シテ組合ヲナスモノ
- 第四條 前條第二類ノ漁業ニシテ漁場ノ相連帶スルモノハ必ス一組合トナスヘシ
- 第五條 組合ノ規約ニ掲クヘキ事項ハ左ノ如シ
  - 一 組合ノ名稱及事務所ノ位置
  - 二 組合ノ目的
  - 三 役員選舉法及權限
  - 四 會議ニ關スル規程
  - 五 加入者及退去者ニ關スル規程
  - 六 違約者處分ノ方法
  - 七 費用ノ徵收及賦課法
  - 八 捕魚採藻ノ季節ヲ定ムル事
  - 九 漁具漁法及採藻ノ制限ヲ立ル事

十漁場區域ニ關スル事

- 十一 前各項ノ外組合ニ於テ必要トナス事項
- 第六條 組合ハ規約ヲ更正シ若クハ其組合ヲ分立合併セントスルトキハ管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ
- 第七條 組合ハ聯合會ヲ設ケ其規約ヲ作り若クハ之ヲ更正セントスルトキハ管轄廳ノ認可ヲ請フヘシ
- 第八條 二府縣以上ニ渉ル組合及聯合會ノ規約ハ交渉管轄廳ヲ經テ農商務省ノ認可ヲ請フヘシ  
但規約ヲ更正シ若クハ其組合ヲ分立合併セントスルトキモ亦本條ニ準スヘシ
- 第九條 二府縣以上ニ渉ル組合ハ便宜ノ地ニ事務所本部ヲ設ケ其他ハ每府縣事務所支部ヲ置クヘシ  
但支部ハ組合ノ事情ニ依リ其必要ナラサル場合ニ於テハ之ヲ置カサルヲ得
- 魚兒介苗其他未成長ノ菅藻等捕採制限方 十九年六月三十日 農商務省訓令第九號北海道府縣(沖繩縣ヲ除ク)  
魚兒介苗其他未成長ノ菅藻等蓋リニ之ヲ捕採セサル様各地ノ狀況ニ從ヒ適宜之カ制限ヲ立ツヘシ  
但明治十八年當省第二十三號達ニ據リ經向ノ上施行スヘキ儀ト心得ヘシ

第七十二下 蠶種検査規則ヲ定ム 十九年八月十七日 農商務省令第九號

- 蠶種微粒子病(一名黑痣病)豫防ノ爲メ蠶種検査規則左ノ通相定ム原種ノ検査ハ明治二十年検査期ヨリ施行シ製絲用種ノ検査ハ同二十一年検査期ヨリ施行ス
- 蠶種検査規則
- 第一條 凡ソ蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣セントスル者ハ管轄廳ニ願出テ鑑札ヲ受クヘシ
- 第二條 蠶種ヲ製造スル者ハ此規則ニ從ヒ其検査ヲ受クヘシ



第三條 検査證印ナキ蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第四條 蠶種検査所ハ管轄廳ニ於テ管内便宜ノ地ニ之ヲ設置スヘシ  
但地方ノ狀況ニ由リ巡廻検査ヲナスモ妨ケナシ

第五條 蠶種検査員ハ管轄廳ニ於テ之ヲ命ス可シ  
但検査ノ方法ハ別ニ訓令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 春蠶種ノ検査ハ毎年十月一日ヨリ始メ夏蠶種秋蠶種ノ検査期日ハ管轄廳ニ於テ適宜之ヲ定ムルモノトス

第七條 蠶種ヲ製造スル者ハ春蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造額ヲ毎年七月三十一日マテニ夏蠶種秋蠶種ノ掃立枚數及ヒ製造豫算額ヲ検査期日ヨリ三十日以前ニ管轄廳ニ届出ツヘシ

第八條 蠶種ニハ製造人ノ住所氏名又ハ會社若クハ組合ノ名稱ヲ記シ之ヲ原種製造用種ノヲ云フト製絲用種トニ區別シテ検査所ニ差出スヘシ

第九條 病毒ノ歩合原種ニ於テハ百分ノ五以下製絲用種ニ於テハ百分ノ十五以下ノモノニ検査證印ヲ付シ其以上ニ及フモノニハ都テ廢棄證印ヲ付スルモノトス

第十條 廢棄證印アル蠶種ハ販賣又ハ飼育スルコトヲ得ス

第十一條 蠶種ヲ製造シ又ハ蠶種ヲ販賣スル者廢業スルカ他ノ管轄地ニ寄留若クハ轉籍スルトキハ其旨ヲ管轄廳ニ届出テ鑑札ヲ返納スヘシ  
但寄留若クハ轉籍地ニ於テ營業セントスルトキハ第一條ニ據ルヘシ

第十二條 第一條第三條第十條ニ違ヒタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

○蠶種検査規則取扱手續 十九年八月十七日 農商務省訓令第十四號北海道廳府縣(沖繩縣ヲ除ク) 常省令第九號蠶種検査規則取扱手續ヲ定ムルコト左ノ如シ

- 蠶種検査規則取扱手續
- 第一項 蠶種検査規則第一條ニ據リ下付スヘキ鑑札ハ製造鑑札ト販賣鑑札トニ區別スヘシ
  - 第二項 販賣鑑札ハ輕便ナルモノヲ用ヒ販賣ノ爲外出スル時ハ之ヲ携帯セシムヘシ
  - 第三項 検査所ハ可成郡役所戶長役場ノ一部ヲ以テ之ニ充テ經費ノ節減ヲ旨トスヘシ
  - 第四項 蠶種ノ産額多カラシテ製造者各地ニ散在スル地方ニ於テハ蠶種検査規則第四條但書ニ據リ便宜巡回検査ノ法ヲ設クヘシ
  - 第五項 検査員ハ蠶業ニ熟達セルモノヲ選用シ其氏名及ヒ履歴書ヲ當省ニ届出ツヘシ
  - 第六項 原種ヲ検査スルニハ蠶種ノ全面ヲ撫摩シテ卵子百粒許ヲ取リ其中ヨリ惡キモノ五十粒ヲ撰ヒテ之ヲ十分シ其一分毎ニ之ヲ小孔鉢ニ盛リ苛性加里ノ稀薄液一滴ヲ加ヘテ能ク之ヲ磨碎シ其液ヲ顯微鏡ニ照シテ四隅及ヒ中央ヲ丁字ニ視察シ之ヲ一回ノ毎鏡面微粒子ノ有無ヲ檢シ左表ニ據リ病蟲ノ歩合ヲ定ムヘシ

視察中微粒子	百分中ノ歩合	原種	製絲用種
目擊スル回数		使用ニ適スルモノ	使用ニ適スルモノ
一 回	二	以下廢棄スヘキモノ	
二 回	四		
三 回	六		
四 回	八		
五 回	一〇		
六 回	一二		



七	回	一四	以下廢棄スヘキモノ
八	回	一六	
九	回	一八	
十	回	二〇	

病毒ノ歩合ヲ定ムルニハ視察中微粒子ヲ目撃セル數ニテ百分中ノ歩合トナスヘシ

第七項 製絲用種ハ同種中ニ於テ病毒多シト認ムルモノヨリ順次第六項検査ヲ爲シ病毒百分ノ十五以内ノモノヲ抽出スルニ至リテ止ムヘシ

第八項 顯微鏡ハ五百倍以上ノモノヲ用フヘシ

第九項 検査證印及廢棄證印ヲ定ムルコト左ノ如シ

原種検査證印

圓形 徑一寸 文字(其府廳) 其検査所原種検査之證

製絲用種検査證印

楕圓形 縱一寸八分 文字(其府廳) 其検査所製絲用種検査之證

廢棄證印

長方形 縱一寸 文字(廢棄之證)

第十項 各検査所毎年検査ノ成績ハ左ノ表式ニ準シ翌年二月限リ當省ニ報告スヘシ

検査所位置	郡	名検査人員	検査日數	受檢人員	原種		改良		製絲用		検査費用
					證印	廢棄	證印	廢棄	證印	廢棄	
何郡ノ内	何郡										
何ヶ村											

○蠶種組合準則ヲ定ム

十八年十一月二日 農商務省第四十一號府廳へ達

蠶絲業組合準則左ノ通相定候該準則ニ基キ組合爲相立其規約認可ノ上取締所ニ係ルモノハ當省へ可届出此旨相達候事

蠶絲業組合準則

第一條 蠶絲業ニ從事スルモノハ郡區又ハ町村ノ區區ニヨリ組合ヲ設置スヘシ

但自用ノミニニ供スル者ハ此限ニ非ス

第二條 組合ノ名稱ハ何府廳下何郡區町村蠶絲組合ト稱スヘシ

第三條 組合ハ左ノ目的ヲ以テ規約ヲ定ムヘシ

第一項 爾ハ春及秋若クハ黃白ノ種類又ハ太陽殺蒸殺燥殺等混淆シタルモノヲ賣買セサル事

第二項 製絲ニ最モ良好ナル種類ヲ首養スル事

第三項 桑樹ノ栽培蠶兒ノ養法ヲ改良ナラシムル事

第四項 爾ノ貯藏法ヲ完全ナラシムル事

第五項 蠶卵ノ検査法ヲ設ケ蠶病ヲ豫防スル事

第六項 繭荷造ノ上ハ其組合ノ名稱及製造者若クハ取扱人ノ姓名ヲ記入シタル標章ヲ付シ賣買スル事

第七項 一捆ハ勿論一捆若クハ一把中長否混淆等ノモノヲ製造販賣セサル事

但等級ヲ區分シテ一捆トナシタルモノハ此限ニアラス

第八項 生絲ノ製造及結束ニ不正ノ重量ヲ付シ賣買セサル事

第九項 繰取アル揚子用ヒ尺度ヲ一様ナラシムル事

第十項 生絲ノ結束及綴ノ量目ヲ一様ナラシムル事



- 第十一項 提遺島田折返造等ノ生絲ヲ揚返サスシテ其儘改造賣買セサル事
  - 第十二項 生絲検査法ヲ設ケ其精粗ヲ監別シ及ヒ製造上ノ弊害ヲ矯正スル事
  - 第十三項 生絲荷造ノ上ハ其組合ノ名稱及製造者ヲクハ取扱人ノ姓名ヲ記入シタル標章ヲ付シ賣買スル事
  - 第十四項 各組合ハ委員ヲ設ケ組合中ノ事務ヲ擔任セシムヘシ
  - 第十五項 組合員ハ必其組合ノ證據ヲ携帶スヘシ但證據ニハ管轄地方廳ノ捺印ヲ受クヘシ
  - 第十六項 組合委員ハ時々組合内ノ實況ヲ検査スヘシ
  - 第十七項 各府縣下便宜ノ地ニ取締所ヲ置キ各組合ヲ統轄シ組合規約ノ實施ヲ監査スヘシ
  - 第十八項 取締所ノ役員ハ各組合ノ委員中ヨリ互選スヘシ
  - 第十九項 組合及取締所ニ關スル費用收支ハ各組合員集議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
  - 第二十項 全國中便宜ノ地ニ蠶絲組合中央部ヲ設ケ各地方蠶絲組合取締所ノ氣脈ヲ聯通スヘシ
  - 第二十一項 蠶絲組合中央部ノ規約ハ當省ノ認可ヲ受クヘシ
  - 第二十二項 蠶絲組合中央部ノ役員ハ各地方蠶絲組合取締所ノ役員中ヨリ互選スヘシ但時宜ニヨリ役員外ノ者ト雖モ之ヲ選舉スルヲ得
  - 第二十三項 蠶絲組合中央部ノ費用收支ハ各地蠶絲組合取締所役員ノ集議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
  - 第二十四項 右各條ノ外組合ニ於テ必要ト爲ス事項ハ適宜ニ其規約ヲ設クル事ヲ得
- 蠶絲組合並取締所設置期限 十八年十二月二十五日  
農商務省第四十八號府廳令  
本年當省第四拾壹號蠶絲組合並取締所ノ儀ハ來十九年三月三十日限リ設置爲致ヘシ  
右相違候事

●同指令

蠶絲業組合準則ノ件ニ付福井縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月十六日 (十九年十二月八日官報)

本年當省第四十一號ヲ以テ蠶絲組合準則御達相成候處該準則中第三條第十三項ニ取扱人トアルハ生絲商ヲ指シタル儀ニ候哉果シテ然ルモノトセハ生絲商モ一般組合ニ加點爲致候儀ト心得可然哉將々組合區區ハ當處ニ於テ相定メ指シ候モ差向無之哉

指令 十八年十二月五日  
伺之趣左ノ通可相心得事  
前段伺ノ通

後段組合ノ區區ハ當業者ニ於テ之ヲ定ムヘシ尤モ便宜ノタメ其區區ヲ論示スルハ苦カラス  
●蠶絲業組合ノ件ニ付富山縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年一月十四日 (十九年一月十九日官報)  
桑葉賣買人ト桑園一段歩以上所有者ハ蠶絲組合ニ加入セシムヘキヤ  
指令 十九年一月十六日

桑葉賣買人ト桑園所有者ハ蠶絲組合ニ加入セシムルノ限ニアラス

●醫藥發賣禁止ノ件ニ付山梨縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月十一日 (十九年三月二日十二日官報)  
醫病ヲ醫スル目的ヲ以テ其効能書ヲ附シタル藥劑ノ發賣ヲ願出ル者アリ右ハ賣藥規則第三條ニ依リ調査ノ上配伍ノ藥品ニ就キ支障ナキ以上ハ之ヲ許可セサルヲ得サル儀ニシテ從前已ニ許可シタルモノアレ其藥方用方等多クハ無醫ニ出ルヲ以テ自然毒體ノ生機ヲ障害スルノ恐アルノミナラス養蠶者ヲシテ該藥劑ニ依信シ却テ飼養上必用ノ注意ヲ缺カシムルモノ往々有之趣相聞ヘ蠶葉獎勵ノ妨害實ニ不尠依テ是等ノ藥劑ハ從前已ニ許可シタルモノト雖モ其營業請賣共一切之ヲ禁止スルモ不苦哉且爾後出願スルモノニシテ右等ノ處アルモノハ假令賣藥規則第三條ニ抵觸スル所ナキモノト雖モ許可ヲ與ヘスシテ苦シカラサル哉  
指令 十九年三月十八日(內務大臣連署)  
伺ノ通



第七十四 鳥獸獵

● 伺指令

● 鳥獵禁制ノ件ニ付鳥取縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年一月十五日

(十九年二月廿二日官報)

管下因幡國高草郡湖山池ノ儀ハ鳥取市街ヲ距ル凡ソ壹里ニ位シ周圍凡ソ三里面積七百餘町步ニシテ舊藩政ノ時ニ在テハ禁獵ノ場所ニシテ鴻鵠雁鴨等ノ群集棲息スルノ所タリ然ルニ維新後舊法類ニ廢滅鳥類棲息ノ地ヲ失ヒ近年ニ至テハ鴻鵠ノ如キハ絶エテ之ヲ見サルノミナラス雁鴨等ノ諸水鳥類モ年一年ニ減少シ遂ニ水鳥ノ類ハ悉ク其跡ヲ絶ツニ至ラントス是畢竟獵法ノ制禁ナキニ原因セルモノナレハ今ニシテ之ヲ保護ヲ爲サ、レハ有益ノ鳥獸繁殖ノ趣旨ニ乖戾可致ニ付前陳ノ湖山池一園ヲ以テ水鳥類ノ安息生育ノ場所トシ自今鳥獵 飢餓 禁止 致度 索ヨリ藩政ノ舊慣モ有之致テ人民ノ營業上ニ差響キモ無之儀ト存候ニ付此段相伺候

指令 十九年二月十九日  
伺之那爾屆候事

第七十五 獸醫免許

● 伺指令

● 牛馬蹄剪ノ件ニ付岩手縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月六日

(十八年十一月廿一日官報)

本年十月二十六日第六百九十七號官報ニ福島縣ヨリ從來ノ馬醫ニテ農馬ヲ集メ蹄剪刺絡等ヲ施來候處本年二十八號公布實施後ハ蹄剪刺絡共ニ獸醫ニアラサレハ不相成哉ノ伺ニ對シ伺之通トノ御指令ヲ掲載有之右刺絡ハ素ヨリ獸醫

ノ職業ニ屬スレバ蹄剪ハ器用同様半ハ家畜ノ修飾ナレバ獸醫ニアラサルモ技術不審哉ニ被考候得共果シテ獸醫ニ限ルモノトセハ本縣ノ如キ家畜多數ニシテ地理不便或ハ獸醫アルモ蹄剪未熟ナル等ヨリ修飾ヲ怠リ爲メニ患者ヲ醸生スル哉ノ恐モ有之ニ付右様ノ場合ニ於テハ本縣限リ特ニ蹄剪業ヲ許可スルモ不苦候哉

指令 十八年十一月十九日

伺之趣免許獸醫ニ非サレハ營業不相成儀ト可心得事

● 獸醫免許ノ件ニ付岩手縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月十二日

(十八年十二月四日官報)

岩手縣醫學學校ハ本縣勸業課所轄トシ明治十二年十一月外山牧場内ニ創立シ同課雇海邊東洋ニ教授方擔當爲致同十三年十月同人解散ニ付本縣御用係丹下謙吉ニ擔任申付候然ルニ獸醫ハ牧畜附帶ノモノニ付該校資金ハ牧畜仕法金(拂駒分合金)ヨリ仕拂來候タメ同十四年拂駒事業ヲ移スルニ際シ該學校モ産馬事務所ヘ附屬セシメ候得共生徒ノ養成ハ本縣ニ緊急ナルヲ以テ教員モ尚引續キ擔當爲致同十六年三月八名ノ卒業生ヲ得更ニ生徒ヲ召集シ翌十七年該學校ハ縣立學校ニ引直シ目下尚繼續生徒ヲ養成致居候前通リ創始本縣勸業課所轄ニシテ中頃私立學校トナリ後縣立學校ト相成候ニ付右卒業生ノ如キモ始ヨリ私立學校ノ生徒トハ多少相違有之且試驗規則第五條ノ學科ハ己ニ該校規則ニ據リ修得セシ者ニシテ獸醫免許規則第三條府縣立學校卒業生徒トハ趣ヲ異ニスルモ組織上ニ至テハ縣立學校同様ニ有之且同規則第五條ニ於テ獸醫缺乏ノ地ニハ假開業免狀ヲ授與セラル、ノ場合モ有之該生徒ノ如キ不幸ニシテ卒業ノ際學校ハ私立ノ態ニ有之候得共學術上ニ於ケル致テ官立學校卒業生ニ異ナル者ニ無之ニ付特ニ獸醫免許規則第三條府縣立學校卒業生ニ準シ試驗ヲ要セスシテ免狀御下附可相成儀ニ候哉

指令 十八年十二月一日

伺之趣開業免狀下付候限リニ無之儀ト可心得事

● 獸醫免狀手續料ノ儀ニ付廣島縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月十八日

(十八年十二月廿一日官報)

第十四類 勸業



本年二十八號公布獸醫免許規則第五條ニ據リ假開業免狀御下付ノ節ハ同則第六條ノ手数料金徴收スルニ不及儀ト心得可然哉

指令 十八年十二月十六日

伺ノ趣獸醫免許規則第六條ニ據リ手数料金徴收スヘキ儀ト可心得事

●獸醫假開業免狀有効年限ノ件ニ付千葉縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年三月八日 (十九年三月十九日官報)

獸醫假開業免狀ハ地方ノ情況ニヨリ獸醫之シキト認メ授與ノ具申ヲナスモノナレハ後來獸醫成出ノ見込アルニ於テハ豫メ假免狀ノ有効年限ヲ定メ具狀不苦哉

指令 十九年三月十六日

伺ノ趣

●獸醫ノ件ニ付沖繩縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年二月十七日 (十九年三月十九日官報)

獸醫ヲ開業セント欲スル者ハ明治十八年第八拾八號布告ニ基キ農商務省ノ免狀ヲ得ルニアラサレハ施行スルヲ得ス又獸醫ニ乏シキ土地ハ規則第五條ニ依リ試驗ヲ要セス假開業免狀ヲ下附スルノ明條アルモ本縣ノ民情風俗ハ特殊ニシテ元來醫術ヲ賤ムノ風習アリ隨テ人醫スラ仍且進歩セズ目下其需用ニ乏シキヲ以テ折角醫生養成中ナレバ殊ニ獸醫ニ至リテハ從來類似ノ業ヲ營ム者ナシ就テハ追テ醫學生ノ内ヲ選拔シ該醫修業セシムヘキ計畫中ナレバ本縣ハ往古ヨリ牛羊豚ヲ飼養シテ以テ常食ニ供スルノ習慣アリ爲ニ家畜夥多ニシテ往々傳染病等ノタメ斃死スル者少カラズ殊ニ規則實施ノ日ニ至リテハ屠獸檢査(獸類ノ健否ヲ判別スルノ類)傳染病豫防消毒等差支ノ場合多々有之該醫修業者出來候迄ハ右豫防等ノ儀懸下開業醫ニ於テ取計候様致度既ニ獸醫免許等ノ儀ニ付テハ岩手外二縣ヨリ伺ヘ御指令ノ趣モ有之候得共本縣ノ儀ハ實ニ不得止儀ニ付特別ノ御詮議ヲ以テ御裁可相成候様致度

指令 十九年三月十六日

伺ノ趣謹開屆事

●獸醫開業試驗願ノ件ニ付栃木縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年三月二十四日 (十九年三月廿七日官報)

甲地ニ於テ獸醫開業試驗ノ許可ヲ得タルモノ病ノタメニ缺席シ乙地ニテ試驗ヲ願フ片ハ許可セラレヘキヤ

指令 十九年三月二十五日

伺ノ趣試驗規則第六條ノ外許可セズ

●獸醫開業試驗規則ノ件ニ付埼玉縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年六月二十六日 (十九年七月三日官報)

獸醫開業試驗規則第九條ニ試驗ニ落第シタル者ハ六月ヲ經ルニアラサレハ再ヒ試驗ヲ請フコトヲ得ストアリ右ハ第一期試驗ニ落第セシ日ヨリ起算シ出願期月即當六月迄ハ未タ六箇月ヲ經過セサル儀ニ付固ヨリ試驗ヲ請フコトヲ得サル儀ニ候哉將夕假令出願期月ハ未タ六箇月ニ滿タサルモ試驗期月ニ至リ六箇月以上ニ差ルトキハ出願不苦候哉

指令 十九年六月二十九日

伺ノ趣前段見解ノ趣

第七十六 獸類傳染病豫防規則ヲ制定ス 十九年九月十五日

農商務省令第十一號

獸類傳染病豫防規則左之通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年二月内務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則

第一條 此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂フ

一 牛疫

第十四類 勸業



- 二 炭疽熱
- 三 鼻疽及皮疽
- 四 傳染性胸膜肺炎
- 五 傳染性鵝口瘡
- 六 羊痘

第二條 獸類傳染病ニ罹リタルトキ若クハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患畜ト健畜トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患畜及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ

第三條 獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

第四條 獸醫牛疫ト診断シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條 第四條ノ場合ニ於テハ二人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ	手當金評價十分ノ四
評價金五十圓マテ	同 十分ノ三
評價金百圓マテ	同 十分ノ二
評價金二百五十圓マテ	同 十分ノ一

評價金五百圓マテ	同 十五分ノ一
評價金千圓マテ	同 二十五分ノ一

第六條 獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

第七條 第三條ノ届ヲ受ケタル戶長役場ニ於テハ其旨ヲ患畜所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

第八條 傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診断書ヲ添ヘ直ニ警察署及戶長役場ニ届出ツヘシ

第九條 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其排泄物及之ニ觸レタル飼料褥草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋没スヘシ

但埋没シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

第十條 傳染病畜及其排泄物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其患畜ノ在リシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フヘシ

第十一條 道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條 傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸類市場ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得



但本條ノ場合ニ於テハ停止又ハ解停ハ都度其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ハ郡區役所ヲ經警察署ハ直ニ所轄  
廳警視廳 北海道廳府府縣廳ヲ云フニ届出ツヘシ

第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ  
ハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示シ且近接ノ地方廳ニ報告スヘシ

但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示スヘシ

第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ毎土曜日其旨ヲ  
農商務大臣ニ届出ツヘシ

第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ及管下接  
近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報告ヲ得タルトキハ農商務大臣ノ允許ヲ得テ豫防  
線ヲ劃シ獸類ノ出入往來ヲ停止スルヲ得

第十七條 牛疫蔓延ノ際ニ限り其患畜ニ接近シタルトキハ假令健康ノモノタリトモ警視總監  
北海道廳長官府縣知事ニ於テ農商務大臣ノ允許ヲ經タル後之ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ金額ヲ下付スヘシ

第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ農商  
務大臣ノ允許ヲ得タル後其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰  
金ニ處ス

但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

○獸類傳染病豫防規則ニ關スル心得方 十九年九月十五日 農商務省告示第十八號  
當省令第十一號獸類傳染病豫防規則ニ關スル心得ノ事項左ノ如シ

獸類傳染病豫防心得

- 第二項 獸類ノ狀態管理飼養ニ注意スルコト
- 第三項 獸類ノ身體畜舎器具等ヲ清潔ニスルコト
- 第四項 畜舎内ニ新鮮ノ大氣ヲ流通セシムルコト
- 第五項 畜舎内ノ温度ヲ調和スルコト
- 第六項 飲水ノ清淨ヲ要スルコト
- 第七項 適度ノ運動ヲ爲サシムルコト
- 第八項 健畜ト傳染病畜トヲ隔離スルコト
- 第九項 傳染病流行地方ニ於テハ病性ニ從ヒテ獸類ヲ區別シ成ルヘク獸類ノ出入往來ヲ爲サシメサルコト
- 第十項 傳染病畜所在ノ入口ニハ其名ヲ標示スルコト
- 第十一項 傳染病流行地近傍ノ牧場ニ放牧セサルコト
- 第十二項 牧場ニ於テ傳染病發生シタルトキハ直ニ其患畜ヲ適當ノ場所ニ圍ヒ置キ他ノ健畜ヲシテ之ニ接近セシメス  
又ハ放牧セサルコト
- 第十三項 傳染病流行ノ地方ニ於テハ獸類ノ市場屠場等ニ消毒法ヲ施スコト
- 第十四項 所有者又ハ管理者ヲ問ハス創傷潰瘍等アルモノハ患畜ニ觸接セサルコト



- 第十四項 傳染病流行ニ際シテ獸類發病シタルトキハ其何病タルヲ問ハス獸醫ヲシテ速ニ之ヲ診察セシムルコト
- 第十五項 傳染病流行ノ際ハ一層排水法ヲ怠ラサルコト
- 第十六項 牛疫若クハ傳染性胸膜炎ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體腐草糞尿及其他ノ廢棄物等ヲ運搬スルニハ牛ヲ用フヘカラサルコト
- 第十七項 獸類炭疽熱ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體腐草糞尿其他ノ廢棄物等ヲ運搬スルニハ牛馬ヲ用フヘカラサルコト
- 第十八項 鼠痘及皮疽流行ノ際ハ馬匹ヲ交尾セシメント欲セハ必ス獸醫ノ診察ヲ受クヘキコト
- 第十九項 鼠痘及皮疽ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體腐草糞尿及其他ノ廢棄物ヲ運搬スルニハ馬ヲ用フヘカラサルコト
- 第二十項 傳染病畜アル舍内及牧場ニ於テハ獸醫又ハ看護者ノ外ハ溢ニ患畜ニ接近セシメサルコト
- 第二十一項 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死體排泄物ハ勿論之ニ使用シタル飼料腐草等ハ悉ク燒棄ツルコト
- 第二十二項 患畜ヲ撲殺場又ハ埋瘞場ニ移スノ途中患畜ノ近接ヲ避ケ且血液其他ノ排泄物ヲ遺散セサルコト
- 第二十三項 糞尿ハ勿論其他汚穢物ハ總テ傳染病ノ媒介トナルモノナレハ務メテ之ヲ除去スルコト
- 第二十四項 傳染病流行地方ノ犬猫鶏鴿等ハ飼主ニ於テ放飼セサルコト
- 第二十五項 傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死體排泄物ハ勿論其他該畜ノ爲メニ使用シタル畜舎欄廄貨車糞窖塵溜器具等ニハ消毒法ヲ施スコト
- 第二十六項 傳染病畜ノ看護者ハ勿論其患畜ニ觸レタルモノニハ消毒法ヲ施スコト
- 第二十七項 患畜舎ハ熱湯或ハ灰汁ヲ以テ洗ヒ石灰水或ハ粗製石炭酸水ヲ濯キ窓戶ヲ密閉シテ亞硫酸瓦斯ノ蒸氣法ヲ施シ次テ窓戶ヲ開放シ大氣ヲ通シ日光ニ曝スコト
- 第二十八項 患畜ノ糞ハ燒棄テ或ハ消毒器ヲ濯キテ深ク地中ニ埋メ尿糞ニハ石灰ヲ撒布スルコト

- 第二十九項 患畜ニ觸レタル飼槽飼架被覆獸類ニ用ヒ及其他ノ器具ハ燒棄ツルヲ良トス但鐵製ノ器具ハ火熱ヲ加ヘタル後用フルモ妨ナキコト
- 第三十項 患畜若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ニシテ止ムコトヲ得ス他行スヘキ場合ニ於テハ其身ニ消毒法ヲ施シタル後ニアラサレハ他行セサルコト
- 第三十一項 患畜若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ノ衣服ハ成ルヘク燒棄ツルヲ良トス否サレハ其衣服ヲ石鹼水ニテ洗ヒ亞硫酸瓦斯ノ蒸氣法ヲ施シ十二時乃至二十時間消毒シテ充分大氣ニ曝スコト
- 第三十二項 患畜或ハ其排泄物等ニ觸レタル者ノ草鞋木履等ハ燒棄テ靴ハ石灰水ニテ洗ヒ之ニ獸脂ヲ塗リテ大氣ニ曝スコト
- 第三十三項 消毒藥ハ其類多シト雖モ左ニ普通ノモノヲ舉ク
  - 第一 濃厚石炭酸水(二十五倍)
  - 第二 畜舎器具死體排泄物糞窖塵溜等ニ施用ス
  - 第三 稀薄石炭酸水(六十倍)
  - 第四 畜舎欄廄貨車看護者ノ衣服又ハ洗手等ニ施用ス
  - 第五 石灰水
  - 第六 畜舎ノ壁床飼槽飼架其他木製ノ器具等ニ施用ス
  - 第七 畜舎糞窖死體等ニ施用ス
  - 第八 亞硫酸瓦斯(硫黃ヲ燒キ發)
  - 第九 畜舎内器具等ヲ蒸氣スルニ施用ス
- 第三十四項 獸類ノ傳染病名及其症候ハ左ノ如シ
- 第一 牛疫



學語	Posis Bovina
英國語	Cattle Plague
佛國語	Peste Bovine
獨國語	Rinder Pest

牛疫ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ體中各部ノ粘膜ヲ侵シ就中消化器粘膜ニ特異ノ炎症ヲ呈シ牛族ヨリ他ノ反芻獸ニ傳染スルモノナリ此病ハ害母ノ慘劇ナル傳播ノ迅速ナル斃死ノ夥多ナル獸類傳染病中最モ危險ノ症ナリトス牛ノ此病ニ罹ルトキハ熱ヲ催スヲ以テ初起ノ症候トス即體温少ク増昇シ泌乳食慾共ニ減少シ倦怠シテ頭ヲ垂レ一二日ヲ經レハ加答兒ノ症候ヲ呈シ各部ノ粘膜特ニ紅ヲ潮シ反芻休止シ眼鼻口ヨリ液ヲ漏泄シ濕衣ヲ發シ漸々呼吸ノ數ヲ増シ三日乃至四日ヲ經過スレハ赤痢樣ノ下痢ヲ起ス口鼻及陰腔ノ粘膜腫起シテ其面ニ粟粒大乃至豌豆大ノ黯白色ノ小點ヲ發シ乾酪樣ノ滲出物ヲ覆フ此乾酪樣ノ質ハ容易ニ剝脫シテ爛斑ヲ現シ其他粘膜ニ赤色ノ線狀若クハ斑點ヲ見ルコトアリ以上ノ症候漸次充進スルニ從ヒ眼鼻口ノ分泌液愈増加シ呼吸益困難ヲ加ヘ下痢甚シク終ニ虛脱シテ斃ル

第二 炭疽熱

學語	Anthrax
英國語	Anthrax
佛國語	Charbon
獨國語	Milzbrand

炭疽熱ハ急性傳染病ニシテ瘴氣毒ヨリ起リ草食獸ニ發シ又他ノ畜類及人ニ傳染ス此病ハ俄然發スルモノ多ク其急性ナルハ動物類ニ卒倒シテ製播シ五分乃至十分時間ニシテ斃ル又途中若クハ夜間ニ發病シ鼻口及肛門ヨリ血液ヲ漏泄シテ斃ルモノアリ或ハ初起食慾泌乳共減少シ體温増昇シ外部ノ温度定マラス戰慄ヲ發シ各部ノ粘膜甚シク紅ヲ潮シ若クハ帶黃色ヲ呈シ糞ニ血液及粘液ヲ混シ呼吸急促脈搏增進大ニ狂亂苦悶

第三 鼻疽及皮疽

學語	Malleus Humidis et Friciniosis
英國語	Glanders and Farcy
佛國語	Morve et Farcin
獨國語	Rolz und Wurm

シ往々痲痛ヲ併發シ或ハ痲鈍トナリ或ハ感覺ヲ失フ斯ノ如キ場合ニ於テハ一般ニ熱發充進シテ衰弱ヲ加ヘ鼻口及肛門ヨリ血液ヲ漏泄シテ終ニ斃ル稀ニハ快復スルモノモアリ或ハ熱度増進シ皮膚ニ一箇若クハ數箇ノ腫瘍ヲ發ス其狀固クシテ凸隆シ熱痛ヲ帶ルモノ忽チ減退ス試ミニ之ヲ壓スレハ氣音ヲ發シ之ヲ破開スレハ帶黃色ノ液ヲ漏ス或ハ舌咽喉若クハ肛門ニモ亦之ヲ發スルコトアリ

鼻疽及皮疽ハ馬族特異ノ傳染病ニシテ二者同性ノ症ナレトモ其患部ヲ異ニシ互ニ誘發スルモノナリ即鼻疽ハ專ラ鼻粘膜肺及水脈系ヲ侵シ皮疽ハ皮膚皮下結締組織及水脈系ヲ襲フモノニシテ此病ハ人羊山羊兔及其他ノ畜類ニ傳染ス

鼻疽ノ主徴ニ三アリ(其一)鼻ノ一孔若クハ兩口ヨリ少量ノ粘稠液ヲ漏泄ス其液ハ一種特異ノ膿樣液ニシテ其狀宛モ菜種油ニ蛋白ヲ混シタルカ如シ(其二)頸下水脈腺腫脹ヲ發シ概テ下頸骨ノ内側ニ固着シテ膿腫セス(其三)鼻粘膜ニ惡性潰瘍ヲ生ス當初ニ在テハ帶黃色ノ小膿疹若クハ小結節ナルモ増大破爛シテ潰瘍ニ變ス其瘍底ハ凹陷シテ脂肪狀ヲ呈シ少量ノ惡性膿ヲ漏ス病勢充進スルニ從ヒ唇ニ鼻粘膜ヲ侵スノミナラス咽喉肺氣管支喉囊及ヒ頭ノ諸骨ニ波及シテ各其症候ヲ呈ス末期ニ至レハ呼吸困難ヲ加ヘ咳嗽頻發皮膚粗剛毛色光澤ヲ失ヒ全身潮ク羸弱ス皮疽ハ皮膚ニ局發シテ多ク四肢頭頸胸腹或ハ其他ノ部位ノ皮下ニ豌豆大乃至胡桃大ノ結節ヲ發生シ初ハ硬固ニシテ且疼痛アリ然レハ漸次其結節ノ中心ヨリ破潰シ黃色ノ液ヲ漏泄シ皮上ニ凝着シテ痂ヲ結ヒ而シテ其瘍面ヨリ絶ヘス膿汁ヲ漏泄ス病勢充進スレハ腫瘍累發シテ體ノ諸部ヲ侵シ終ニ潰爛シテ血液ヲ漏スコトアリ其他各潰瘍ニ連絡セル水脈管ハ腫起シテ索狀ヲ呈シ水脈腺亦腫脹ス而シテ久キヲ經レハ大ニ羸弱シテ遂ニ斃ル



第四 傳染性胸膜炎

- 學語 *Peripneumonia Contagiosa*
- 英國語 *Contagious Pleuro-Pneumonia*
- 佛國語 *Pneumonie Contagieuse*
- 獨國語 *Langen Seuche*

傳染性胸膜炎ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ概テ左肺ノ一葉ヲ侵シ其小葉間質ノ滲出炎ヲ發シ尋イテ胸膜炎ヲ纏發ス

此病ノ徵候ヲ大別シテ二期トス即第一期ハ短瀉ノ咳嗽ヲ發シ漸々其數ヲ増シ濕熱ノ痛咳頻發シテ體溫亢進シ呼吸疾促食慾泌乳共ニ減少シテ病勢増進ス第二期ニ至レハ熱勢大ニ亢進シテ胸膜炎ノ諸徵尤明瞭トナリ肺端乾燥シ耳角ノ冷熱定マラス食慾反常泌乳共ニ休止シ通便秘澀前肢ヲ開張シテ起立シ臥スコトヲ欲セス鼻孔開露シ腹節ノ波動甚シク呼吸スル毎ニ呻吟ス試ミニ背腰及肋間部ヲ壓スレハ苦悶ヲ訴ヘ病久キヲ經レハ呼吸益困難ヲ加ヘ倦怠羸瘦甚シク下痢ヲ發シ呼吸臭ヲ帶ヒ漸次虚脱シテ斃ル

第五 傳染性驚口瘡

- 學語 *Aphthae Contagiosae*
- 英國語 *Foot and Mouth disease*
- 佛國語 *Stomatite Aphtheuse*
- 獨國語 *Maul und Klauenseuche*

傳染性驚口瘡ハ瀉氣性發疹傳染病ニシテ雙蹄獸ニ發シ熱ヲ帶ヒテ口内趾端或ハ乳房等ニ水疱ヲ局發ス

此病ニ罹ルトキハ初メ發熱シ食慾反常共ニ減少或ハ休止シ口内趾端乳房或ハ鼻端等ニ忽チ大小許多ノ水疱ヲ發ス該疱破潰スレハ初メ澄液ヲ漏シ後ニ至レハ渾濁シ膿液ノ液ニ變ス或ハ口内ニ水疱ヲ發スルトキハ其粘膜剝脱シテ紅色ノ爛斑ヲ呈シ頻ニ唾液ヲ漏ス而シテ蹄間或ハ蹄冠部ヲ侵シ甚シキニ至ラハ跛趨トナル此病ノ經過ハ概テ二週間

許トス

第六 羊痘

- 學語 *Variola Ovis*
- 英國語 *Sheep Pox*
- 佛國語 *Clavelle*
- 獨國語 *Schaf Pocken*

羊痘ハ熱性發疹傳染病ニシテ皮膚ニ痘ヲ發生シ羊族ニ蔓延シテ大ニ猖獗ヲ極メ獸類痘瘡中最危險ナルモノナリ此病ハ初メ發熱シテ不安ノ狀ヲ呈シ食慾反常共ニ減少シ體毛ノ稀疎ナル局部即顔面或ハ肢脚ノ内面ニ紅斑ヲ呈シ豆大ノ痘ヲ發生シ二三日ヲ經レハ痘中ニ淋巴液ヲ醗成シ後膿化シ終ニ破潰シテ乾涸結痂シ二三週間許ニシテ脱落ス

●沿革要領

明治九年二月内務省乙第二十號達ヲ以テ疫牛處分假條例ヲ頒ツ○全年三月同省乙第二十四號ヲ以テ傳染牛疫豫防法並斃死處置方ヲ達ス○十九年九月農商務省令第十一號ヲ以テ獸類傳染病豫防規則ヲ定メ前令ヲ廢ス

第七十七 專賣特許條例

○專賣特許ニ關スル諸願書及明細書文例ヲ定ム 十八年四月二十三日 農商務省告示第六號

專賣特許條例本年第七號ヲ以テ布告相成候ニ付右ニ關スル諸願書式及明細書文例左ノ通相定候條此旨告示候事  
願書式 用紙美濃紙其上部曲尺壹寸程下部八分程綴シ口壹寸五分程ヲ餘白ト爲シ字體明瞭ニ認ムルヲ要ス  
第一 (一箇ノ發明者又ハ協同發明者又ハ他人ノ發明) ヲ讓受ケタル者ヨリ專賣特許ヲ願出ルトキ

十九年農商務省令第十號ヲ以テ專賣特許手續中ヲ改正ス(第七十八) 參照



專賣特許願

一 何發明

右ハ私(私共)ノ(何誰)發明者何誰ヨリ譲受候發明ニシテ從來世上ニ使用セラレサル(機械)(物品)(方法)ナルハ勿論一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間何箇年ヲ期限トシ專賣特許證御下付相成度此段奉願候也(十九年九月農商務省告示第十七號ヲ以テ相成度)下(依テ御免許料金何圓相添)ノ十一字ヲ削除ス

何府地名番地居住  
縣地名番地寄留  
族籍

業名

年月日

發明者

氏

名印

又發明者二人ナルトキ

肩書前同斷

發明者

氏

名印

同

同

氏

名印

又他人ノ發明ヲ譲受ケタルトキ

肩書前同斷

同

氏

名印

譲受人

氏

名印

農商務卿其殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第二(相續者ヨリ專賣特許ヲ願出ルトキ)

一 何發明

右ハ私(父)(亡兄)何誰發明ニ候處何年何月何日死去致候ニ付今般家名相續ノ廉ヲ以テ私受讓候右(機械)(物品)(方法)ノ從來世上ニ使用セラレサルハ勿論一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間何箇年ヲ期限トシ專賣特許證御下付相成度此段奉願候也同

故何之誰相續人

何府地名番地居住  
縣地名番地寄留  
族籍

業名

氏

名印

年月日

農商務卿其殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第三(追加專賣特許ヲ願出ルトキ)

追加專賣特許願

私(私共)所持罷在候何年何月何日付第何號專賣特許證ニ係ル發明ニ就キ今般改良ヲ加ヘ候處一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ廉無之段確信候間追加專賣特許證御下付相成度此段奉願候也同

何府知事  
令某

印

何府知事  
令某

印



年月日

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第四 (譲與又ハ分與)  
ヲ願出ルトキ

專賣權譲分與願

一 何年何月何日付第何號專賣特許証

一 何發明

一 發明者何之誰

一 現所有主何之誰

右ハ今般別紙約定書寫之通何之誰(譲與(分與)致度依テ前記ノ專賣特許証並御免許料金何圓相添此段奉願候也

何府地名番地居住  
族籍

業名

發明者

氏

名印

何府知事  
台某

印

年月日

農商務卿某殿

何府地名番地居住  
族籍

業名

譲與人

氏

名印

譲受人

氏

名印

肩書前同斷

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第五

專賣特許証紛失(燒失ニ付再渡願)

一 何年何月何日付第何號專賣特許証

一 何發明

一 發明者何之誰

右專賣特許証ハ私所有ニ有之候處何年何月何日何地ニ於テ紛失(火災ニ罹リ燒失)(水難ニ遭ヒ流失)候ニ付再渡相成度此段奉願候也

何府知事  
台某

印

何府地名番地居住  
族籍

業名

專賣特許証所有者

氏

名印

年月日

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

第六 (專賣特許証明細書又ハ圖面ニ遺漏又ハ誤認了ルトキ其補足又ハ改正ヲ願出ルトキ)

專賣特許証(發明明細書圖面)脱漏補足(誤認改正)願

一 何年何月何日付第何號專賣特許証

一 何發明

一 發明者何之誰

何府知事  
台某

印



一 現所有主何之誰  
右專賣特許證ニ係ル願書(明細書圖面)中何々ノ遺漏(誤謬)有之候ニ付別紙之通補足(改正)致度尤之カ爲メ發明ノ重要事項ニ變更ヲ生スル儀無之ト確信候間此段奉願候也

何府地名番地居住  
族籍

年月日

發明者(發明證受人 發明人死去) 氏 名印  
又發明者存生ノトキハ左ノ如シ

發明者 氏 名印

現所有主 氏 名印

農商務卿某殿

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

何府知事 氏 印

第七 (專賣特許條例附則第二項ニ依リ專賣特許ヲ願出ルトキ) 專賣特許願

一 何發明

右ハ私(私共)明治何年何月發明致シ明治何年何月何日ヨリ使用致來候處一切御條例ニ相觸候儀無之且此願書及別封明細書ニ記載セル事實并圖面(圖面ヲ添フルトキ)ニ相違ノ儀無之段確信候間何箇年ヲ期限トシ專賣特許證御下付相成度此段奉願候也上

何府地名番地居住  
族籍

年月日

發明者 氏 名印

又發明者二人ナルトキハ

肩書前同斷 氏 名印

發明者 氏 名印

同 氏 名印

同 氏 名印

農商務卿某殿

前書之通願出候付ニ進達候也

年月日

何府知事 氏 印

第八 (專賣特許條例附則第二項ニヨリ使用ノ特許ヲ願出ルトキ) 使用特許願

一 何發明

右ハ何之誰發明ノ(機械)(物品)(方法)ニシテ私儀營業ノ爲メ明治何年何月何日ヨリ之ヲ使用シ來候處今般右發明人何誰專賣權ヲ受候ニ付テハ何箇年ヲ期限トシ右發明使用ノ儀御許可相成度此段奉願候也上

何府地名番地居住  
族籍

年月日

業名 氏 名印

第十四類 勸業



農商務卿某段

前書之通願出候ニ付進達候也

年月日

府知事 何縣 合某

印

第一 (方法ノ發明ヲ) 記載スルトキ

明細書

煤氣精製ノ改良法

煤氣ヲ精製スルニ當リ其容積ヲ若シク減少セシメテ其照力ヲ増進スルヲ得ヘキ新奇有益ノ改良法ヲ發明セリ之ヲ左ニ明解ス

從來煤氣ヲ精製スルノ方法ハ煤氣ヲシテ獸炭中ヲ通過セシムルニアリト雖正單ニ獸炭ノミヲ使用スルハ暫時ヲ經ルノ後汚物ヲ吸收スルノ力ヲ耗失スルカ故ニ蒸氣若クハ水ヲ以テ獸炭ヲ洗滌スルカ或ハ煤氣ト共ニ大氣ヲ通過スルカ然ラスハ熱ヲ以テ獸炭ヲ再調セサルヘカラス而シテ單ニ獸炭ノミヲ使用スルハ當ニ煤氣ノ照力ヲ減殺スルノミナラス其容積ヲモ亦減少スルノ憂ヲ免レズ

此改良法ノ目的ハ煤氣ノ照力ヲ減殺セシメ其容積ヲモ亦著シク減少セシメテ其操作法ニ間斷ナク且ツ煤氣ヲ充分ニ精製スルニアリ即チ其法ハ煤氣中ノ汚物ヲ除去スル力ヲ増加スレトモ該氣中ノ照氣ヲ吸收セサル物體ヲ獸炭ニ混合シ大氣ト共ニ煤氣ヲシテ之ヲ通過セシムルモノトス

此發明ヲ實施スルニハ石炭「タール」若クハ該油ト水或ハ單ニ水ノミヲ以テ獸炭(新製ノモノ又ハ使用セ)ヲ浸潤シ之ヲ一器或ハ數器内ニ充填シ以テ精製器トス若シ浸潤スルニ單ニ水ノミヲ以テセサルハ獸炭ヲ乾燥シテ充填スルモ亦可ナリ而シテ煤氣ヲ該精製器内ニ通過セシムルニ當リ蒸溜器若クハ水管ヨリ少量ノ大氣ヲ導入シ例ヘハ精製スル煤氣ノ容積一百分ニ付十分ノ八乃至二十分ノ一ノ比例ヲ以テ之ヲ煤氣ニ混合セシメ然ル後煤氣ヲ該器内ニ通過セシムルモノトス但シ大氣ノ量ハ煤氣中ニ於ケル汚物ノ多少ニ關係ス若シ大氣ヲシテ煤氣ト共ニ混合セシメント欲セ

ハ蒸溜器ト精製器ノ間ニ於ケル水管ノ一局部又ハ精製器ニ密接シタル處ニ於テ適宜ノ混合機ヲ裝置スヘシ水瓦斯ヲ精製スルノ際ニモ亦大氣ヲ該瓦斯中ニ導入スルトキハ單ニ水ノミヲ以テ浸潤セシムル獸炭ニテ可ナリ

此法ニ據レハ大氣中酸素ノ一部ハ硫素ト抱合シ終ニ可溶性類ヲ生シ其殘餘ハ全ク硫化水素及其他ノ含水素硫素類體ノ水素ト抱合シテ水ヲ生シ更ニ遊離酸素ヲ殘留セシ硫化水素及其他ノ硫素類體中ニ於ケル硫素ノ一部ハ遊離狀トナリテ獸炭中ニ沈澱シ窒素ノ一部ハ殘餘ノ水素ト抱合シ終ニ「アムモニヤ」鹽類ヲ生ス若シ窒素ハ精製シタル煤氣ト共ニ通過シ去ルコトアルモ甚ク僅少ナルヲ以テ更ニ害アルナシ

此ノ如ク大氣ヲ使用スルトキハ獸炭久シク其作用ヲ保存スルヲ以テ該操作法ハ常ニ間斷ナク施行スルヲ得ヘシ 最後ニ獸炭ノ吸收力ヲ失スルニ至リタルトキハ其有用ナル「アムモニヤ」鹽類ヲ含有スルヲ以テ之ヲ賣却スヘシ然ラズンハ熱ヲ以テ獸炭ヲ再調シ或ハ水ヲ以テ之ヲ洗滌シ而シテ適宜ノ溶劑ヲ以テ硫素ヲ分離シ再ヒ之ヲ使用スヘシ 石炭「タール」ヲ獸炭ニ混合スルニ因リ其煤氣中ノ生油氣及其他ノ照性炭化水素ヲ吸收スルヲナシ

獸炭ヲ精製器ニ充填スルノ前若クハ後ニ於テ獸炭ヲ處理スルニ煤氣中ノ照氣ト相互ノ關係アル適宜ノ物體即チ該炭ニ交和シテ照氣ヲ吸收セシメサル所ノモノヲ以テスルヲ得ヘシ特ニ石炭「タール」ヲ掲ケシ所以ハ其最モ得易キヲ以テナリ但シ該油中ノ炭化水素溜液即チ「ベンゾール」屬ノモノヲ使用スルモ亦可ナリ

石炭煤氣ノ場合ニ於テハ前記ノ如ク獸炭ハ該氣中ノ硫化水素ヲ吸收ス但シ乾燥ナル獸炭中ニ煤氣ヲ通過セシムルトキハ多少其照力ヲ減殺スヘシ然レトモ大氣ヲ使用シ且ツ石炭「タール」ヲ以テ獸炭ヲ浸潤スルトキハ却テ之ヲ増進ス是レ此ノ如クシタル煤氣ノ照力ハ獸炭ヲ通過セサルトキハ同一ナレトモ通過セサルモノニ比スレハ尚ホ一層自照ヲ生スルヲ以テナリ

此法ニ據ルトキハ硫素ト水素ハ相分離シ硫素ハ獸炭中ニ殘留シ水素ハ煤氣ト共ニ通過シ炭酸氣モ亦全ク通過スルヲ以テ煤氣精製ノ前後ニ於テ實際其容積ニ差異ヲ生セス 此改良法ノ大ニ便宜トスルハ煤氣ヲシテ凝縮器ヨリ直接ニ新發明ノ精製器内ニ通過セシムルヲ得從テ該操作法ト精製法トヲ結合セシムルヲ得ルニアリ

第十四類 勸業



硫化水素ヲ除却スルニハ之ヲ煤氣中ニ於テ分解スヘキ酸化鐵錳「マンガニース」錳等ノ如キ物體ヲ獸炭ニ混合スルモ亦可ナリ

此精製器ヲ以テ精製セル煤氣ハ更ニ「アムモニヤ」及「硫素」ヲ含マス殆ント無臭ナリ

此發明ノ專賣特許ヲ請求スル區域ハ左ノ二條トス

第一 已ニ陳述セシ如ク獸炭ノ方便ニ依リ煤氣ヲ精製スルニ當リ其煤氣中ノ照氣ヲ吸收スルヲ豫防スルノ方法即チ照氣ト相互ノ關係アル適宜ノ物體ヲ獸炭ニ混合スルノ法是ナリ

第二 煤氣ヲシテ大氣ト共ニ石炭「タール」ヲ以テ浸潤セル獸炭中ヲ通過セシムルノ法是ナリ

右之通相違無之候也

年月日

發明者 氏 名印

又ハ發明者二人ナルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名印

發明者

肩書前同斷

發明者 氏 名印

又ハ他ノ發明ヲ讓受ケタルトキ

肩書前同斷

發明者 氏 名印

肩書前同斷

府地名 居住地  
縣地名 寄留  
族籍

業名

受受人 氏 名印

農商務卿某殿

第二 (組成劑ノ發明ヲ) 記載スルトキ

明細書

脫毛媒助劑

毛皮ヲ糝化スルニ當リ豫メ其毛及脂肪ヲ脫除シ易カラシムルカ爲ニ使用スヘキ新規有益ノ組成劑ヲ發明セリ之ヲ左ニ明解ス

此組成劑ハ清水石灰曹達硝石及ヒ花狀硫黃ヨリ成ル即チ其割合ヲ掲グルニ左ノ如シ

清水 一五〇

生石灰 八〇

曹達 一三〇

硝石 二四

花狀硫黃 一二

以上ノ成分ヲ攪摻シテ善ク之ヲ混和セシムルモノトス

此組成劑ノ用法ハ豫メ毛皮ヲ一日乃至八日間水中ニ浸シ皮裡ニ含有スル鹽類及汚物ヲ脫除シ之ヲ滑淨ニシタル後此液劑中ニ浸ス一四十八時間ニシテ之ヲ取出シ通法ヲ以テ其毛ヲ脫除スルモノトス

此組成劑ヲ使用スルトキハ當ニ其毛ヲ脫除シ易カラシムルノミナラス毛皮ヲ糝化スルニ當リ妨碍ヲ來タヌヘキ脂肪及ヒ其他ノ物質ヲ脫除スレトモ精良ノ皮革ニ變成スヘキ質ハ却テ之ヲ保存ス

此發明專賣特許ヲ請求スル區域ハ上文既ニ記載セシ如ク毛皮ヲ糝化スルニ當リ豫メ其毛ヲ脫除シ易カラシムル爲ニ使用スヘキ組成劑是レナリ

右之通相違無之候也



年月日

何府地名番地居住  
縣地名番地寄留  
族籍

業名

發明者 氏 名印

又ハ發明者二人ナルトキ  
肩書前同斷

發明者 氏 名印

肩書前同斷

發明者 氏 名印

又他ノ發明ヲ讓受ケタルトキ  
肩書前同斷

發明者 氏 名印

肩書前同斷

讓受人 氏 名印

農商務卿某殿

第三 (器械ノ發明ヲ  
計載スルトキ)  
明細書

「クローム」分離器械

此發明ハ牛酪製造ノ際水ノ方便ニ藉リ牛酪ヲ冷却シ以テ其「クローム」ヲ分離スル爲メニ使用スヘキ新奇有益ノ器械  
ナリ之ヲ左ニ明解ス

此器械ハ長方形ノ水槽ニシテ其内部ノ中間ニ圖中(イ)ノ如ク水塊ヲ抑止スヘキ焙格形ノ装置ヲナシ又槽ノ一側面ニ

「クローム」ノ至ク上浮セルヤ否ヤヲ窺ヒ得ヘキ玻璃窓(ロ)ト槽底ニ接近セル所ニ吸子(ハ)トヲ備ヘリ圖中ニ槽ノ側  
面ヲ截斷セル所以ハ只ク其内部ノ結構ヲ示サンカ爲メナリ

此器械ヲ以テ乳ヲ冷却スルニハ先ツ槽ノ高さ四分ノ一ニ達スルマテ清淨ナル水塊ヲ密布シ其上ニ乳ヲ注入ス但シ乳  
四十斤ニ付水十斤ノ割合ナリトス然ルトキハ水塊ハ焙格ニ抑止セラレテ液面ニ上浮スルナク從テ乳ト混合レテ「ク  
ローム」ノ分離ヲ妨碍スルノ憂アルコトナシ斯ク乳ヲ冷却スルト大約四十分時間「クローム」ノ至ク液面ニ上浮スルヲ俟  
テ之ヲヒ取り尋テ吸子(ハ)ヲ開キ殘乳ヲ瀉出シ之ヲ乾酪製造場ニ送ル此操作中溶解セル水ハ少量ニシテ未タ殘液  
ノ品位ヲ劣スニ至ラス又更ニ「クローム」ト混合セサルナリ

此器械ニ依リテ分離セル「クローム」ハ其品位頗ル良好ニシテ其量甚タ多シ而シテ此器械ヲ使用スルトキハ「クロー  
ム」ヲ速カニ分離スルヲ以テ殘液ノ酸味ヲ呈セサルニ先子之ヲ乾酪製造場ニ送ルヲ得ルト一年四季中何時ニテモ常ニ  
之ヲ施行シ得ルトノ二便アリ

此發明ノ專賣特許ヲ請求スル區域ハ已ニ記載セルカ如ク水槽中ニ装置セル焙格形ノ抑水機是レナリ  
右之通相違無之候也

何府地名番地居住  
縣地名番地寄留  
族籍

業名

發明者 氏 名印

又ハ發明者二人ナルトキ  
肩書前同斷

發明者 氏 名印

肩書前同斷

發明者 氏 名印

年月日



又他ノ發明ヲ讓受ケタルトキ  
 肩書前同斷  
 發明者 氏 名印  
 肩書前同斷  
 讓受人 氏 名印

農商務卿某殿  
 (第四圖面略之)

○專賣特許發明品標記方ヲ定ム 十八年四月二十四日  
 農商務省告示第七號

專賣特許條例第十條發明品ノ標記左ノ通相定候條此旨告示候事  
 專賣特許何年何月何日ヨリ何年間  
 專賣何年何月何日何年間  
 以下年月日ノ數  
 專賣 字ヲ記スヘシ

例ハ明治十八年七月一日ヨリ五年間專賣特許ヲ受ケケレハ  
 毎邊一ノハ出下記ヌカ如シ  
 前三項ノ内專賣人ノ便宜ニ依リ撰擇シテ標記スヘシ但縱若クハ横ニ一行又ハ二行ニ記シ或ハ圓形楕圓形等ニ一行ニ記  
 スルモ妨ケナシ

●同指令

○專賣特許ノ器械物品摸造ノ件ニ付愛媛縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十一月十日(十八年十一月廿七日官報)  
 甲者既ニ專賣ノ特許ヲ得タル發明品ニシテ他者之ヲ摸造シ己レ一人ノ使用ニ供シ候備ハ法律上ニ於テ差支無之候哉  
 又ハ假令一己ノ用ニ供スルモ之ヲ摸造スル時ハ專賣條例第二十條專賣特許ノ發明品ヲ偽造シタル罪ニ依リ處斷可相

成儀ニ候哉

指令 十八年十一月二十五日  
 伺之趣後段見解之通可相心得事

第七十八 商標條例

○商標登錄願手續及專賣特許手續 十九年九月七日  
 農商務省令第十號  
 明治十七年第十三號布達商標登錄願手續第二條第五條第七條ノ手續料及同十八年第五號布達專賣特許手續第二條第七  
 條第十一條ノ免許料ハ出願ノ日ヨリ三日以内ニ納ムヘキコトニ改正ス

●同指令

○商標登錄願書却下ノ儀ニ付栃木縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年十二月五日(十八年十二月廿三日官報)  
 從來使用ノ商標ニシテ即今登錄願出ルモノ有之右ハ商標條例附則ニ據リ出願スヘキモノニシテ既ニ期限ヲ經過候上  
 ハ當願限リ願書却下不苦候哉  
 指令 十八年十二月廿一日  
 伺之通

第七十九 國立銀行

○鎖店銀行貸金其他ノ證書中跡引受人裏書繼書式及其濟方處分ヲ定ム 十八年十二月四日  
 大藏省第四十號告示  
 鎖店國立銀行ノ貸金其他ノ證書中跡引受人ヲシテ左ノ書式ノ裏書又ハ繼書ヲナシ處分爲致候モノハ爾後裏書又ハ繼書



ノ記名主之カ債主タルヘシ依テ右証書ニ對スル負債ハ該負債者ヨリ右記名主ニ向ヒ清方可致者トス  
右告示候事

(取書又ハ細書書式)但朱書

表書ヲ本表ノニ改ム 第何國立銀行明治何年何月何日領店被申付候ニ付右處分ノ爲メ本証書ハ何縣何郡何村何  
番地何ノ誰ヘ相渡候條明治十七年十二月大藏省第百四拾號告示ニ據リ右何ノ誰ヘ負債清方可致候事  
年 月 日 第何國立銀行跡引受人

姓 名 印  
姓 名 印

第八十 米商會所條例中改正

十八年十一月廿八日 第三十六號布告

明治九年八月 第百五號布告米商會所條例第十一條及第十五條第一節左ノ通改正シ明治十八年  
十二月一日ヨリ施行ス

第十一條 手数料ノ定規

第一節 會所ニ於テ賣買者雙方ヨリ領收スヘキ手数料ハ會所ニ於テ相當ノ額ヲ定メ大藏卿  
農商務卿ノ認許ヲ受クヘシ

第二節 手数料ハ其決算ノ時ニ至リ賣買取引ニ關係スル他ノ債主ニ先ツテ收受スルコトヲ  
得

第十五條 納稅及積金ノ規則

第一節 會所ハ政府ニ於テ制定施行スル所ノ收稅規則ニ遵ヒ稅金ヲ納ムヘシ  
右奉 勅旨布告候事

米商會所株式取引所收稅規則制定

十八年十一月廿八日 第三十八號布告

米商會所并株式取引所收稅規則左ノ通制定シ明治十八年十二月一日ヨリ施行ス

但明治十一年九月 第三拾號布告明治十五年十二月 第六拾五號布告及同年同 第六十七號布告  
ハ明治十八年十二月一日ヨリ廢止ス

米商會所並株式取引所收稅規則

第一條 會所並取引所ノ稅金ハ左ノ割合ニ從ヒ每一ヶ月分ヲ翌月十日マテニ地方廳ニ上  
納スヘシ

米穀定期賣買

賣買各約定代金高  
千分ノ二

公債證書定期賣買

賣買各約定代金高  
萬分ノ三

諸株式定期賣買

賣買各約定代金高  
萬分ノ六

第二條 定期内ニ轉賣又ハ買戻ヲ爲ス者ハ其轉賣買戻ニ係ル稅金ハ免除ス  
第三條 賣買ヲ解約スルコトアルモ其稅金ハ之レヲ還付セス

第十四類 勸業



第四條 大藏卿ハ地方廳ニ委任シ又ハ隨時官吏ヲ派出シ納税ノ精算ヲ検査セシムヘシ  
 第五條 會所并取引所ニ於テ賣買約定ノ代金高ヲ詐リ脱税シタルトキハ頭取ヲ百圓以上  
 千圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ其會所并取引所ヨリ其脱税ニ係ル金額ヲ徵收スヘシ  
 右奉 勅旨布告候事

○米商會所 仲買人認許規定中ヲ改正ス 十八年十二月九日 農商務省第二十四號告示  
 株式取引所 米商會所 仲買人認許規程中第四項ヲ删除シ第三項ヲ左ノ通改正ス  
 明治十六年當省第六號告示 株式取引所 仲買人認許規程中第四項ヲ删除シ第三項ヲ左ノ通改正ス  
 第三項 米商會所並株式取引所仲買人ハ認許證ヲ下付シタルトキハ認許料ヲ地方廳ヘ納付シ地方廳ヨリ農商務省ヘ  
 上納スヘシ  
 右告示候事

● 伺指令

●米商會所資本金ノ内營業保證公債證書價格ノ件ニ付滋賀縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年四  
 月二十一日 (十九年五月  
 十一日官報)  
 米商會所條例第三條第三節會所資本金總高三分二ニ當ル營業保證公債證書價格ノ價ニ付キ去十五年十二月相伺候  
 處伺ノ趣十三年一月大藏省第一號達ニ據リ可致處分旨御指令相成然ルニ該御達書中ニハ社寺配當金札引換中山  
 道鐵道公債證書ノ三種ハ登載無之右證書ヲ以營業保證トシテ差出候節價格ハ何レニ準據取扱可申哉  
 指令 十九年五月六日  
 伺ノ趣該抵當價格ハ今後左ノ通心得ヘシ

一 一割利付金庫公債證書	額面	保證額
	百圓ニ付	百圓

一 七分利付同	同	九拾圓
一 六分利付同	同	八拾五圓
一 五分利付同	同	七拾七圓
一 神官配當公債證書	同	九拾貳圓
一 起業公債證書	同	八拾五圓
一 金札引換公債證書	同	百圓
一 新公債證書	同	七拾貳圓
一 中山道鐵道公債證書	同	九拾五圓

●米商會所保證金預リ方ノ件ニ付石川縣ヨリ農商務省ヘ伺 十九年五月十二日 (十九年五月  
 廿六日官報)  
 明治九年八月大政官第百五號布告米商會所條例第三條第三節頭取肝煎等資本金總高三分ノ二ニ當ル現金或ハ日本政  
 府ノ公債證書ヲ預リ置クヘキ成規ノ處右ハ國立銀行ノ外大藏省預金局並驛遞局貯金預ケ金證券ニテモ預リ方同様取  
 計可然哉  
 指令 十九年五月十八日  
 米商會所保證金預リ方ノ儀伺ノ通

第八十一 株式取引所條例中改正 十八年十一月廿八日 第三十七號布告  
 明治十一年五月 第八號布告株式取引條例第七章第四十一條左ノ通改正シ明治十八年十二月一  
 日ヨリ施行ス

第七章 手数料ノ事

第十四類 勸業



第四十一條 取引所ニ於テ賣買者雙方ヨリ領收スヘキ手数料ハ取引所ニ於テ相當ノ額ヲ定メ大藏卿農商務卿ノ認可ヲ受クヘシ  
右奉 勅旨布告候事

○株式取引所ニ於テ金銀貨幣取引ヲ禁ス 十八年十一月廿八日 第三十九號布告

明治十二年<sup>九</sup>第三拾七號第三拾八號布告及同十六年<sup>七</sup>第貳拾五號布達ヲ以テ東京大阪橫濱神戸各株式取引所ニ於テ當分金銀貨幣取引差許置候處明治十九年一月一日ヨリ右取引ヲ禁止ス

右奉 勅旨布告候事

○第八十二 郵便條例中改正 十九年二月十二日 (遞信大臣連署)

第四號布告

明治十五年<sup>十二</sup>第五十九號布告郵便條例第十六條及第二百十四條中左ノ通改正ス  
第十六條

第一項ヲ改メ左ノ二項トナス

- 一 毒藥劇藥、爆發燃燒シ易キ物品
- 一流動物、流動腐敗シ易キ物、孵化スヘキ物、動物、植物、鋒刃器、硝子器、陶器等他ノ郵便物ヲ傷害スヘキ物品但十分ノ豫防ヲ爲シ郵便局若クハ郵便受取所ノ承認ヲ受ケタ

ル後郵便ニ差出スモノハ此限ニアラス

第二百十四條

第三項ヲ改メ左ノ二項トナス

- 一流動物、流動腐敗シ易キ物、孵化スヘキ物、動物、植物、鋒刃器、硝子器、陶器等他ノ郵便物ヲ傷害スヘキ物品

一 第十六條第一項第三項及第四項ニ記載シタル物品

○郵便爲替細則ヲ定ム

十八年九月七日

農商務省告示第二十號

郵便爲替細則左ノ通相定メ明治十八年十月一日ヨリ施行候條此旨告示候事  
郵便爲替細則

第一章 總則

第一條 郵便爲替ハ爲替差出人ヨリ拂込ミタル金員ニ對シ甲郵便局ニ於テ爲替證書ヲ交付シ乙郵便局ニ於テ其證書ニ對シ爲替金ヲ拂渡スモノトス

第二條 爲替證書ニハ差出人受取人ノ氏名ヲ記載セス其氏名住所等ハ差出人ノ指示スル處ニ從ヒ甲振出局ヨリ乙振渡  
局ニ報知スルモノトス

第三條 爲替金額圓位以上ノモノハ驛遞總官特ニ指定スル郵便局ニ於テ差出人ノ望ニ依リ電信ヲ以テ報知スルコトヲ得

第四條 爲替證書ハ驛遞局ニ於テ發行シタル式紙ニ限ルヘシ其證書ノ雛形左ノ如シ  
爲替證書雛形



郵便替證書

振出 日附 印	何年何國 何月何 何日郵便局
證書 番號	何號何
番	番
拂渡 日附 印	

一金何圓錢厘  
右者拙者ヨリ相廻シ置候爲替報知書ニ照シ規則之通手數ノ上御渡可有之候也

金高再記	圓錢厘	何何何
------	-----	-----

爲替金取人記調  
替受人名印

何國  
何郵便局  
氏  
名印

驛遞局

四百五十二

郵便爲替報知書

振出 日附 印	何年何國 何月何 何日郵便局
證書 番號	何號何
番	番
拂渡 日附 印	

一金何圓錢厘  
右者左ノ上部ニ記ス氏名ノ者ヨリ下部ニ記ス氏名ノ者へ可差送金高ニテ其金高ハ當局へ受取候ニ付即其局へ宛テ爲替證書相渡候條受取方申出候ハ、如規則手數ノ上御渡可有之此段及報知候也

何國  
何郵便局  
氏  
名印

差出 人宿 名氏	宿所
受取 人宿 名氏	宿所

氏  
名  
氏  
名

驛遞局

第十四類 勸業

四百五十三



電信ニ依テ發シタル爲替ノ證書ニハ前ニ示ス表中各區畫ノ外ニ「番號」「振出局名」「電報著日」ノ三區畫又再渡爲替證書ニハ「振出局名」ノ一畫ヲ備フルモノトス

第五條 爲替差出人又ハ爲替證書再渡ヲ請求スルモノハ爲替料又ハ爲替料及手数料ヲ前納スヘシ但電信ヲ以テ爲替ヲ報告スルコトヲ望ムトキハ別ニ電報料ヲ納ムヘシ

爲替證書再渡ヲ請求スル場合ニ在リテハ其爲替料及手数料ハ便宜原爲替證書金額ノ内ヨリ引去リ納ムルコトヲ得

第六條 爲替差出人自ラ爲替金ヲ差出シ能ハサルトキ或ハ差出人又ハ受取人自ラ證書再渡ヲ請求シ能ハサルトキハ代人ヲ立テ爲替願書又ハ請求書ニ本人記名調印シ代人小代人ノ肩書ヲナシテ記名調印スヘシ但別紙ニ委任文ヲ記シ記名調印シテ差出ストキハ此限ニアラス

爲替受取人自ラ爲替金ヲ受取ル能ハサルトキハ代人ヲ立テ本人ニ於テ爲替證書ノ裏面又ハ別紙ニ委任文ヲ記シ記名調印シ代人ハ爲替證書相當ノ位置ニ代人ノ肩書ヲナシテ記名調印スヘシ

第七條 爲替ニ屬スル金額ヲ受授スルトキハ相互目前ニ於テ之ヲ計算スヘシ

第八條 差出人ニハ振出局ニ於テ其拂込金ニ對スル受領證書ヲ交付スヘシ

差出人ハ其受領證書ノ相當ノ位置ニ差出人受取人ノ宿所氏名ヲ記載シテ之ヲ保存シ後日爲替金ノ返戻又ハ證書再渡ヲ請求スルトキノ證據トナスヘシ

第九條 爲替受取人又ハ差出人死亡等ノ場合ニ於テハ其相續人等ヨリ事實ヲ證明シ証人ヲ立テ爲替金ノ拂渡ヲ請求スルコトヲ得

第十條 爲替差出人又ハ受取人印形紛失等ノ爲メ爲替金ノ受授ニ關スル願書證書等ニ調印シ能ハサルトキハ其旨ヲ附記シ証人ヲ立ヘシ

第十一條 爲替金ノ受授ニ關シ証人トナリ事實ヲ證明シタルモノハ其受授ニ關スル願書證書等ニ記名調印シ其事由ヲ附記スヘシ

第十二條 爲替金ノ拂渡ヲ請求スルモノハ郵便局吏員ノ尋問ニ對シ差出人受取人ノ宿所氏名等ヲ陳述スヘシ

又必要ノ場合ニ於テハ郵便局吏員ニ對シ該吏員ノ満足スヘキ証人ヲ立テ又ハ正當受取人タルコトヲ證明スヘキ證據物ヲ該吏員ニ展示シ若クハ之ヲ差出スヘシ

第十三條 爲替金ノ拂渡ヲ請求スルモノアルトキ左ニ掲クル事故アル場合ニ在リテハ郵便局ニ於テ拂渡停止書ヲ其請求人ニ付與シ爲替金ノ交付ヲ停止スルコトアルヘシ

一 爲替證書調製上遺式ノトキ若クハ其證書ニ對スル報知書未達又ハ不都合ノトキ

一 爲替資金ノ補充金未達ノトキ

第十四條 規則上爲替金ノ交付ヲ停止シタル間ハ爲替證書有効期限ノ經過ヲ中止スルモノトス

第十五條 爲替取扱時間ハ爲替ヲ取扱フ郵便局前ニ揭示スヘシ

爲替取扱休日ハ左ノ如シ

一月一日 二日 三日 新年宴會

孝明天皇祭 紀元節

春季皇陵祭 神武天皇祭

秋季皇陵祭 神宮神嘗祭

天長節 新嘗祭

日曜日

第十六條 郵便局上版ノ料紙ヲ用フヘキ願書請求書等ノ式紙ハ爲替ヲ取扱フ郵便局ニ於テ申交クヘシ

第二章 爲替振出

第十七條 爲替ヲ願出ルモノハ上版ノ願書式紙ニ式ノ如ク記載調印シ爲替金及爲替料ヲ添ヘ之ヲ郵便局吏員ニ差出シ爲替證書及受領證書キハ受領證書ニ依ルトヨリ受取スヘシ

其爲替願書ニハ受取人遠ヲ生セサル豫防トシテ家號又ハ商標ノ略符等ヲ附記スルモ妨ケナシ但其爲替電信ニ依ルトキハ此限ニアラス

第十四類 勸業



願書ノ書體ハ最明瞭ヲ要シ後日取調上差支ヲ生セサルヲ主トシ差出人受取人ノ宿所ハ其詳略ヲ斟酌シ又其氏名ハ固  
有ノ文字ヲ用フヘシ且名宛ノ郵便局ハ受取人爲替金ヲ受クルニ便宜ナル郵便局ヲ指定スヘシ但其爲替電信ニ依ル場  
合ニ在リテハ願書ニ本字ヲ以テ記載シタル差出人受取人ノ宿所氏名ノ傍ニ片假名文字ヲ附記スヘシ

第十八條 爲替ヲ願出ルモノアルトキハ振出局吏員ハ爲替願書ニ依リ差出人ノ指定シタル郵便局ヲ宛テ爲替證書ヲ調  
製シ拂込金ニ對スル受領證書ト共ニ之ヲ差出人ニ交付シ且爲替願書ノ諸件ヲ其名宛ノ郵便局ニ報知スヘシ但電信ニ  
依ルトキハ其特則ニ據ルヘシ

第十九條 爲替願書ニハ差出人又ハ受取人二名以上連帶ノ場合ト雖モ各一名ヲ記載スヘシ

第二十條 差出人旅行先又ハ一時寄留ノ場所ニ於テ爲替ヲ願出ルトキハ爲替願書ニ本籍住所ヲ記載シ尙其宿所ヲ附記  
スヘシ

第二十一條 差出人ハ受取人ニ於テ拂渡局吏員ノ詢問ニ對シ爲替報知書ニ記載アル諸件ヲ陳述シ得ル爲メ爲替願書ニ  
書入レタル諸件ヲ受取人ニ通知スヘシ其爲替電信ニ依ルトキハ但詐偽ヲ避クル豫防ノ爲メ此通知ハ爲替證書ヲ送達  
スル信書トナルヘク同時ニナスヘカラス

第二十二條 代人ヲ以テ爲替ヲ願出ルトモ爲替報知書ニ其氏名ヲ記入セサルヲ以テ一般ノ例トス但其氏名ヲ報知スル  
コトヲ望ムモノ爲替願書ニ其旨ヲ附記シタル場合ハ此限ニアラス

第二十三條 差出人爲替證書ヲ受取リタル後差出人受取人氏名宿所等ノ認メ方相違シタル事アルトキハ其振出局ニ訂  
正願書ヲ差出スヘシ但電信ニ依リ爲替ヲ報知シタル場合ニ在リテハ相當ノ電報料ヲ納ムヘシ

第二十四條 差出人爲替金ノ返戻ヲ要スルトキハ前ニ受取シタル拂込金受領證書ヲ振出局ニ返納シ爲替金ヲ受取ルヘ  
シ但受領證書紛失ノ場合ニ於テハ其爲替金高番號及振出月日等ヲ記載シタル爲替金返戻願書ヲ差出スヘシ

第三章 爲替拂渡

第二十五條 爲替證書ノ金額ハ差出人ノ指定セル拂渡局ニ於テ其振出局ノ爲替報知書ニ照ラシ受取人ヲ尋問シタル後  
拂渡スモノトス

第二十六條 爲替證書ノ金高番號又ハ受取人ノ答辯等爲替報知書ニ符合セサルカ又ハ報知書未達等ノ事故アルトキハ  
拂渡局ニ於テ受取人ニ拂渡停止書ヲ交付シ其事故ヲ振出局ニ問合スヘシ  
受取人ハ停止書ノ滿期ニ至リテ更ニ爲替金ノ拂渡ヲ申出テ尙本規則ノ通手數ノ上爲替金ヲ受取ルヘシ

第二十七條 若シ前條ノ場合ニ於テ振出局ヨリ回付セル更訂報知書ノ金額證書ノ金額ニ過不及アリテ證書金額ノ誤ナ  
ルヲ判明シタルハ其受取人ハ證書ノ裏面ニ現實受取ルヘキ金額及其事故ヲ記載記名調印シ其金ヲ受取ルコトヲ得

第四章 爲替證書再渡

第二十八條 爲替證書再渡ヲ要スルハ次ニ掲グル第二十九條乃至第三十一條ニ從ヒ爲替差出人若クハ受取人ハ上  
版ノ請求書式紙ニ式ノ如ク記載調印シ爲替ヲ取扱フ郵便局ヲ經由シテ驛遞局ニ請求スヘシ

第二十九條 左ノ場合ニ於テハ爲替差出人ヨリ證書再渡ヲ請求スヘシ但拂込金受領證書ヲ返納スヘシ  
一爲替證書紛失シタルトキ又ハ汚損毀損シテ金高番號印章等必要ノ部分不判明ニナリタルトキ

一爲替證書ニ示ス振出局ニテ爲替金ノ返戻ヲ受クルニ不便ノ爲メ他局ニ於テ返戻ヲ受クルコトヲ要スルトキ

第三十條 左ノ場合ニ於テハ爲替差出人ヨリ證書再渡ヲ請求スヘシ  
一爲替證書ニ示ス拂渡局ニテ爲替金ヲ受取ルニ不便ノ爲メ拂渡局ノ變更ヲ要スルトキ

第三十一條 左ノ場合ニ於テハ爲替差出人又ハ受取人ヨリ證書再渡ヲ請求スヘシ但差出人ヨリ請求スルトキハ拂込金  
受領證書ヲ返納スヘシ  
一爲替證書有効期限ヲ失ヒタルトキ

第五章 電信ニ依ル爲替ノ特則

第三十二條 電信ニ依テ爲替ヲ發スルトキハ振出局ニ於テ差出人ノ拂込金ニ對シ受領證書ヲ交付シ爲替願書ニ差出人  
ノ指定シタル郵便局ニ願書ノ諸件ヲ電報スヘシ

第三十三條 拂渡局ハ電信報知ニ由リ爲替證書ヲ調製シ爲替ノ諸件ヲ其受取人ニ通報スヘシ  
受取人ハ拂渡局ノ通報ニ依リ其通知書ヲ拂渡局吏員ニ差出し爲替證書ヲ受取ルヘシ



第三十四條 前條ノ通知ヲ發シタル日ヨリ七日以内ニ爲替證書ノ渡方ヲ請求セサルトキハ拂渡局ヨリ更ニ受取人ニ通知スヘシ

其通報ノ日ヨリ尚七日以内ニ證書渡方ヲ請求セサルトキハ振出局ヲ經テ之ヲ其差出人ニ交付スヘシ  
第三十五條 拂渡局ヨリ前條ノ證書到達シタルトキハ振出局ニ於テ其旨ヲ差出人ニ通報スヘシ

差出人ハ振出局吏員ニ前ニ受取シタル受領證書ヲ示シ振出局ノ通知書ト引換ヘ爲替證書ヲ受取ルヘシ  
第三十六條 前二條ノ順序ヲ經タル後ハ再度電報ニ依リテ其爲替金ヲ受取スルコトヲ得ス故ニ差出人證書ヲ受取リタル後尚其爲替金ヲ受取人ノ受取ルコトヲ望ムトキハ其證書ヲ受取人ニ廻送スヘシ若シ其爲替金ノ返戻ヲ要スルトキハ差出人ニ於テ第二章第二十四條ノ手續ヲナスヘシ

○郵便往復葉書使用法中削除及但書追加 十九年三月十六日  
逓信省告示第十二號

明治十七年 農商務省第十一號告示郵便往復葉書使用法第一項中若シノ下發ヨリ又マテノ四十七字ヲ削リ同項ヘ左ノ但書ヲ追加ス

但發信ノトキ返信紙ノ表面ニ返信ニ用ニヘキ差出人受取人ノ住所氏名ヲ記載シ又ハ返信紙ノ裏面ニ返信用ノ文字ノ幾部ヲ記入シタルモノハ使用濟ニ認メヌ又發信ノトキ返信紙ヲ截斷シ發信紙ノミ差出スヲ得ヘシ

右告示ス

○郵便受取所驛遞貯金預所及郵便支局ヲ置キ事務取扱方ヲ示ス 十九年四月二十二日  
逓信省令第六號

地方ニ便宜郵便受取所ヲ置キ貨幣封入郵便ノ外郵便物ノ受附及郵便切手賣下ノ事務ヲ取扱ハシメ又驛遞貯金預所ヲ置キ貯金受拂ノ事務ヲ取扱ハシム

一等二等郵便局區内須要ノ場所ニ郵便支局ヲ置キ本局ノ事務ヲ分掌セシム  
○郵便條例中驛遞總官ヲ遞信大臣驛遞局長ヲ遞信管理局長ト心得シム 十九年七月一日  
逓信省告示第六十六號

郵便條例第二十九條第百二十四條第百二十九條第百三十二條第百五十七條第百六十一條ニ驛遞總官トアルハ逓信大臣

第六條第十八條第五十二條第九十四條第百五條第百七條第百三十七條第百四十七條第百五十八條第百七十四條第百九十七條第百二十一條第百三十九條ハ驛遞局長第三十二條第百六十六條ハ逓信管理局長ト心得ヘシ

○驛傳營業取締人選定方 十九年四月一日  
逓信省令第三號廳府縣

驛傳營業取締人ノ儀ハ該營業人ノ選定ニ任スヘキ等ノ處地方ノ狀況ニ依リ其制ニ準據シ難キ時ハ事情ヲ具シ指揮ヲ得テ其制ヲ異ニスルヲ得

●伺指令

●渡舟營業ノ者編入方ニ付石川縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年四月十五日 (十八年十一月十六日官報)

今般驛傳取締規則ニ基キ驛傳取締規則設置可致ニ付テハ驛傳營業者ノ儀ハ尤陸運業ノ者ニ限リ候儀トハ存候得共本縣下ニ於テハ加賀國江沼郡大聖寺川通越前國吉崎村等へ達シ及江沼郡柴山瀨能美郡木葉瀨今江瀨河北郡河北瀨能美國羽咋郡邑知瀨且七尾ヨリ鳳至郡甲村等へノ渡舟(蒸汽船)營業ノ者ハ從來多クハ陸運業ノ者ノ兼業トシ物貨並人馬渡舟ヲ以テ營業トス然レ近來追々各自營業者從テ多ク而ルニ河北瀨水運ノ如キハ荷物來往々々水陸運業營業者ノ間ニ於テ紛議ヲ生シ或ハ同業者相互ニ途中へ出テ、旅客ヲ強誘シ或ハ荷物ヲ競交スル等雙方ノ間常ニ紛糾絶ヘス終ニハ行政警察ノ處分ニ歸スルカ如キ間々有之今之ヲ區別シ陸運業ノ者ニ限リ取締致候テハ彼是レ障礙モ可有之設ト被存候ニ付將來ヲ推考シ此際右等ノ渡舟ハ悉皆驛傳營業中へ編入シ其地組台規約ニ據リ營業セシメ候ハ、紛糾競爭等ノ弊ヲ脱シ畢竟取締方相立可申哉ト相認候條地方限適宜ヲ以テ驛傳業ノ中へ組入候テモ御覽支ノ筋無之哉  
指令 十八年十月廿一日  
伺之趣積荷來客取扱問屋ニ限リ驛傳業中へ編入不苦候事

●驛傳營業取締ノ儀ニ付滋賀縣ヨリ農商務省ヘ伺 十八年九月七日 (十八年十二月十九日官報)

客年農商務省第三十號御達ニ據リ驛傳營業取締規則別冊ノ通制定來ル十月一日ヨリ實施スル旨及布達置キ候元來人力車夫其他陸運業人ノ如キ常ニ自他府縣ノ間ニ往復シ營業スル者ノ如キ甲府ニ於テ免許ヲ得タルハハ七縣へ出稼



スルモ別ニ七縣ノ免許ヲ受クルニ及ハサル儀ト存シ候得共未タ右取締規則ヲ取設ケサル府縣モ有之該府縣下ノ營業者ニシテ已ニ右取締規則ヲ實施スル府縣下ヘ出稼スルモノニ至リテハ其出稼スル府縣廳ノ免許ヲ受ケシムルニアラサレハ他ノ一般營業人取締モ不相立儀ニ付之レカクメ多少運輸上不便ヲ來タスアアルモ一時止ムヲ得サル次第第二付他府縣營業者ニシテ免許營業者タルヲ證明スルニアラサレハ一般營業ヲ差止メ可然哉(別冊略ス)

指令 十八年十二月十六日

伺之懸隣府縣ニ於テ規則實施ニ至ルマテ出稼人ヲシテ免許營業人タル證明ヲ得セシムヘキ様其縣ニ於テ隣府縣ヘ協議可致候事

第八十二 船籍

○船舶検査規則施行手續及船舶検査細則ヲ廢ス 十九年四月八日  
逓信省令第五號北海道廳府縣

明治十八年<sup>四</sup>農商務省第十五號逓自今廢止ス

○西洋形船舶検査細則ヲ定ム 十九年四月八日  
逓信省令第四號

西洋形船舶検査細則

第一條 西洋形船舶検査規則ニ依リ検査ヲ受クヘキ船舶ハ此細則ニ據ルヘシ

第二條 検査規則第三條及第五條ニ掲クル船舶ハ其船主若クハ船長ヨリ第一號書式ノ願書ヲ直チニ回檢所(不登簿船ハ其地方廳)ニ差出シ検査ヲ受クヘシ

第三條 検査規則第四條ニ掲クル船舶ハ其船主若クハ船長ヨリ第一號書式ノ願書ヲ其船籍地方廳ヲ經テ豫シメ逓信省ニ差出シ検査官吏ノ派出ヲ俟テ便宜其検査ヲ受クヘシ

第四條 検査ヲ受ケ検査證書ヲ受領セサル以前ニ於テ本船ヲ運航セントスルハ其船主若クハ船長ヨリ検査官吏ニ請フテ第二號書式ノ假證書ヲ受クルヲ得但假證書ノ効用ハ三箇月ヲ以テ限リトス故ニ右期限内本證書ト交換スヘシ

第五條 逓信省若クハ地方廳ハ第三號書式ノ検査證書ヲ作り登簿船ハ回檢所ヲ經由シ不登簿船ハ便宜之ヲ船主若クハ船長ニ下渡スヘシ但検査規則第四條ニ掲クル船舶ニハ其地方廳ヲ經テ之ヲ下渡スヘシ

第六條 検査規則第七條ニ掲クル航路ノ定限ハ左ノ四項ニ區分ス

- 第一 外國航船 内外國諸港ニ航通スルモノ
- 第二 内國航船 内國諸港ニ航通スルモノ但朝鮮國南界ノ鳴梁江ヨリ露領黑龍江ニ至ル沿岸及ヒ薩威噠諸港ニ航スルモノモ包含ス
- 第三 近海航船 内國沿岸ノ近港及ヒ内地ト離島ノ間ヲ航通シ特ニ其航路ヲ定限シタルモノ
- 第四 平水航船 湖川及ヒ靜濤ノ海上ヲ限リ航通シ特ニ其航路ヲ定限シタルモノ

第七條 左ノ場合ニ限リ航路定限外ヲ航行スルモ妨ケナシ

第一 航路定限外ノ地ニ於テ製造若クハ購求シタル船舶検査ヲ經タルト否ト問ハス其航路定限内ノ地或ハ最寄回檢所其他検査ヲ受ヘキ場所迄航行スルモノ

第二 航路定限内ニ検査ヲ受クヘキ一定ノ場所ナキカ爲メ特ニ最寄回檢所其他検査ヲ受クヘキ場所迄航行スルモノ

第三 航路定限内ニ於テ船體若クハ海機漏洩其他要部ヲ修繕スヘキ場所ナク爲メニ最寄工場所在地迄航行スルモノ

第八條 船内旅客ノ定員ハ寢床ノ數ヲ以テ定ム尤モ雜居室ノ定員ハ左項ニ據ルヘシ但多數ノ兵卒若クハ移民人夫等ヲ搭載シ航通スルモノ及ヒ河川渡舟ノ如キハ旅客定員ノ限ニアラス

- 第一 外國航船ハ一坪<sup>六尺</sup>四方下等三人但内國ヲ限リ航通スルモノハ内國航船ノ旅客定員ニ據ルヲ得
- 第二 内國航船ハ一坪<sup>六尺</sup>四方上中等二人下等四人
- 第三 近海航船及ヒ平水航船ハ一坪<sup>六尺</sup>四方上中等四人中等五人下等六人但航通ノ途次他ニ寄港スルト否ト問ハス六時間以内ニ仕向港ノ地ニ到達シ得ヘキモノハ定員ノ外一坪<sup>六尺</sup>二付上中等一人下等二人マテ増加スルヲ得

第十四類 勸業



第四 湖川ヲ限リ航通スル船舶ノ下等旅客ハ場合ニヨリ一坪<sup>六尺</sup>四方十人迄ニ増加スルヲ得

第九條 登簿噸數五百噸以上ノ船舶ニシテ船體汽機ノ外國航通ニ堪ヘサルモノヲ除クノ外ハ其外國ニ航スルト否トヲ問ハス都テ外國航船トシテ検査ヲ受クヘシ

第十條 登簿免狀ヲ受有スル船舶ハ臨時検査ヲ除クノ外前回検査ヲ受ケタル司檢所(検査規則第四條ニ掲クル船舶ハ其地方廳)へ次回ノ検査ヲ顯出ヘシ但其航路ヲ變スル等ノ場合ニ於テハ此限ニアラス

第十一條 検査規則第十三條ニ掲クル船舶ハ最寄司檢所(不登簿船ハ其地方廳)ニ顯出テ検査ヲ受クヘシ

第十二條 船主ノ都合ニ依リ船舶ヲ入渠若クハ上架セントスル片ハ其旨ヲ前回検査ヲ受ケタル司檢所(検査規則第四條ニ掲クル船舶ハ管船局ニ又不登簿船ハ其地方廳)ニ届出ヘシ

第十三條 検査執行ノ際船免狀及ヒ乗組員技術免狀ヲ合セテ検査官吏ノ檢問ニ供スヘシ

第十四條 定時臨時ニ拘ハラヌ修繕等ノ爲メ運航ヲ差止メタル片ハ検査官吏ニ於テ本船現有ノ検査證書ヲ引上置クヘシ

第十五條 検査規則第十一條第十二條第十四條ノ場合ニ於テハ船主若クハ船長ヨリ其事由ヲ詳記シタル書面ヲ前回検査ヲ受ケタル司檢所(不登簿船及検査規則第四條ニ掲クル船舶ハ其地方廳)ニ差出スヘシ

第十六條 船舶検査ノ方法及ヒ細目ハ管船局發行ノ検査手續書ニ據ルヘシ

第一號書式

海  
帆船何九第何回御検査願

一本船舶主宿所氏名若クハ會社名其所在地

一總噸數及登簿噸數

一定製場

一本船製造年月及ヒ場所

一船體材料

第二號書式

一網具ノ裝置	一公稱馬力	一推進器ノ種類	一航路制限	一前期検査ノ場所(第一回ノ願書ニハ之ヲ除ク)	一前期検査證書有効期限(前ニ同シ)	一前回本船入渠検査年月日	一前回汽機水壓試驗年月日	右ノ帆船(當時何地ニ碇泊若クハ入渠中ニ付御検査被成下度)(何地ヨリ何地ノ間ヲ航通司檢所々在地ニ回航不仕候ニ付何地ニ於テ御検査奉願度候間其旨通信省へ御上申被下度)此段奉願候也	明治 年 月 日	船主若クハ船長	何	某	現任所	司檢所	地方廳宛
--------	-------	---------	-------	------------------------	-------------------	--------------	--------------	--	----------	---------	---	---	-----	-----	------

名船

検査地名



船檢査證書

汽 機 種 類	汽 機 種 類	其 他 機 具	航 路 限 定	證 書 有 効 期 限	船 名	番 號	旅 客 定 員			船 主 名 氏	定 場	登 簿 噸 數	檢 査 地 名
							上 等	中 等	下 等				

右ノ船舶檢査ノ上本書期限中記載之航路航通ニ適當ナルノ報告ヲ得ルニ依リ西洋形船舶檢査規則ニ遵ヒ此證書ヲ附與スルモノ也

明治 年 月 日  
地方廳 省 印

船檢査假證書

汽 機 種 類	汽 機 種 類	其 他 機 具	航 路 限 定	船 主 名 氏	旅 客 定 員			定 場	登 簿 噸 數
					上 等	中 等	下 等		

右ノ船舶檢査ノ上記載ノ航路航通ニ適當ナルヲ以テ此檢査假證書ヲ附與スル者也  
但シ此假證書ハ明治 年 月 日ヲ限り無効タルヘシ

官 姓 名 印

(二名以上ノ檢査ニ係ル  
片ハ連署スルモノトス)



○東京外三所船舶検査所及大坂海員試験所改稱并取扱事務  
東京大坂函館神戸船舶検査所及大坂海員試験所ヲ司檢所ト改稱ス  
前記司檢所ニ於テ取扱フ所ノ事務ハ左ノ如シ  
十九年三月十三日  
逕信省告示第十一號

- 東京司檢所ニ於テハ
  - 一 海員技術試験
  - 一 船舶検査
  - 一 水先人試験
- 大坂及函館司檢所ニ於テハ
  - 一 海員技術試験
  - 一 船舶検査
  - 一 水先人試験
- 神戸司檢所ニ於テハ
  - 一 船舶検査
  - 一 水先人試験

●伺指令

●行衛不分明ナル船舶除籍ノ件ニ付東京府ヨリ遞信省ヘ伺  
十九年六月十四日 (十九年六月十六日官報)

行衛不分明ナル船舶有之破船ト看認タル旨届出ルルハ直ニ船籍ヲ削除致シ又單ニ行衛不分明ト届出有之片ハ明治十六年大藏省第五十九號達但書ニ準シ滿三箇年經過シタル後除籍致來候處自今兩様共届出有之片ハ管内告示及府縣公報ノ手續ヲナシ該船出港後滿三箇年ヲ經過シ尙行衛不分明ナル片ハ其船籍ヲ削除致シ可然哉

指令 十九年六月十四日

伺ノ趣破船ト看認タルモノハ直ニ其船籍ヲ除去シ其他伺ノ通  
但船免狀ヲ有スル船舶ハ最後出船ノ日ヨリ一箇年ヲ經過シタル片ハ其旨當省ヘ届出ヘシ

第八十四 船燈信號器製造販賣規則ヲ定ム  
十九年七月二十三日  
遞信省令第十九號

但明治十四年農商務省甲第四號布達ハ廢止ス  
船燈信號器製造販賣規則

- 第一條 船燈燈發火信號器星火ヲ發スル燈製造セントスル者ハ其管轄廳ヲ經テ製造品ノ見本ヲ差出シ遞信省ノ許可ヲ受クヘシ
- 第二條 發火信號器ノ許可ヲ受クヘシトキハ製造人又ハ代理人各種共十個以上ノ見本ヲ携帶シテ遞信省ノ試験ヲ受クヘシ但試験入費ハ出願人ヲシテ負擔セシム
- 第三條 遞信省ハ船燈發火信號器ノ見本ヲ合格ト見認ムルトキハ管轄廳ヲ經テ製造免許證ヲ下付スヘシ
- 第四條 免許製造ノ船燈發火信號器ニハ其製造人ノ氏名ヲ彫刻又ハ貼付スヘシ
- 第五條 免許製造ノ船燈發火信號器ヲ販賣セントスル者ハ其管轄廳ノ許可ヲ受クヘシ但免許製造人ニ於テ販賣スルハ此ノ限リニアラス
- 第六條 船燈發火信號器ノ製造又ハ販賣免許ヲ受ケタル者ハ各其氏名製造所又ハ販賣所名ヲ新聞紙ニテ廣告シ且ツ其製造所販賣所ニハ看板ヲ掲クヘシ
- 第七條 免許製造人其籍ヲ轉シ若クハ氏名ヲ變スルトキハ管轄廳ヲ經テ免許證ノ書換ヲ願出ツヘシ但其廢業死亡ノ時ハ免許證ヲ返納スヘシ
- 第八條 船燈發火信號器製造人ノ員數ハ遞信省ニ於テ之レヲ制限ス其販賣人ノ員數ハ地方ノ實況ニ應シ管轄廳ニ於テ之ヲ増減スルヲ得ヘシ



第九條 遞信省又ハ地方廳ニ於テハ免許製造所及ヒ販賣所ヘ不時ニ吏員ヲ派出シ其製器ノ適否ヲ監査シ場合ニ依リ之ヲ實試スルコトアルヘシ

第十條 不合格ノ製器ハ監査官吏ニ於テ其改造ヲ命シ或ハ販賣若クハ使用ヲ停止スルコトアルヘシ

第十一條 不合格ノ船燈發火信號器ヲ製造又ハ販賣スル者アルトキハ遞信省又ハ地方廳ニ於テ其營業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

第十二條 第四條第五條ヲ犯スモノハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

○船燈監査手續概則ヲ定ム  
農商務省第十一號警視廳沿海府縣並滋賀縣(沖繩縣ヲ除ク)へ達  
船燈監査手續概目左ノ通相定候條右ニ照準可取扱此旨相達候事

船燈監査手續概目

- 第一 船燈ヲ監査スルハ其所轄ノ廳府縣於テ監査員ヲ派出シ製造所販賣所及ヒ繫泊ノ船舶ニ就キ施行スルモノトス  
但西洋形船舶檢査規則ニ據リ檢査スヘキ船舶及ヒ甲板ナキ漁舟小船等ハ此限ニアラス
- 第二 製造所販賣所ハ船燈製造及ヒ販賣規則第十條ニ遵ヒ精細ニ監査シタル上合格ノ燈器ニハ其廳名アル檢印(燈燈ハ側面舷燈ハ前面)ヲ刻シ不合格ノモノハ製造方法ニ照シテ改造セシムヘシ
- 第三 船燈ハ府縣廳ノ檢印ナキモノ及ヒ免許販賣所外ニ於テ販賣スルヲ許サス
- 第四 繫泊ノ船舶ハ其船籍ノ自他ニ係ラス定時(毎年二回)又ハ臨時監査ヲナシ別紙甲號書式ニ據リ監査證書ヲ附與スヘシ但不合格ノ舷燈隔板及ヒ旋泊燈ヲ所持シ若クハ之カ裝盤ヲ誤ルモノアルハ懸篤ニ危害ノ在ル所ヲ指示シ速カニ改良セシムヘシ
- 第五 無檢印ノ燈燈(舶來品ヲ除キ)ヲ所持スル者其購入ノ年月此監査手續施行以後ニ係ルルキハ之ヲ販賣セシ者ノ任所

氏名ヲ取糺シ其地方廳ニ通報スヘシ

- 第六 監査ノ際船長又ハ海員中重立タル者ニ就テ海上衝突豫防規則中必要ト認ムル條件ヲ尋問シ若シ之ニ通曉セサル者アルルハ懸口ニ説明スヘキモノトス
- 第七 監査證書ハ第一回ヨリ第五回目ノ監査ヲ了ル迄ハ各地方ヲ通シ該證書欄内ニ其都度加書押印シ参照ノ便ニ供スヘシ
- 第八 毎回監査ヲ了リタル上ハ別紙乙丙號書式ノ監査表ヲ製シ一箇年兩度(六月十二月)ニ取纏メ農商務省へ報告スルモノトス
- 第九 製造人販賣人ノ任所氏名ハ各府縣相互ニ通報スルモノトス  
但人員増減改名轉籍等其都度本項ニ據ルヘシ
- 第十 船燈ニ關シ犯則ノ所分ニ係ルモノアルルハ其事項ヲ詳細農商務省へ届出ツヘシ
- 第十一 右各項ニ基キ尚ホ地方ノ便宜ニ依リ細目ヲ設クルハ妨ケナシト雖モ此場合ニ於テハ更ニ農商務省へ届出ルモノトス

甲號

船燈監査之證

監査回数	一	回	二	回	三	回	四	回	五	回
監査年月日										
廳府縣監査員 氏名 印										







轟彈製造方 十九年六月二日 遞信省令第十二號

明治十八年八月第二十七號布告海上衝突豫防規則改正追加ニ記載シタル信號器中星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭信號焰管及ヒ轟彈ハ遞信省ノ許可ヲ受ケタルモノニ非サレハ之ヲ製造スルヲ得ス犯ス者ハ二圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

○海上衝突豫防規則中信號器制限 十九年六月二日 遞信省令第十三號  
海上衝突豫防規則中ニ掲クル信號器ハ左ノ制限ニ從ヒ各船舶ニ備ヘ置クヘシ

但將舟及ヒ甲板ナキ諸舟并湖川ヲ限リ航行スル諸船ハ此限ニアラス

一 外國航船

一 大砲一門若クハ二門

裝藥十二箇以上

但雜船信號轟彈ヲ以テ大砲ニ代用スルヲ得此場合ニ於テハ該轟彈十二箇以上ヲ備フヘシ

十二箇以上

一 星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭

十二箇以上

一 信號焰管

十二箇以上

一 機械製霧中號角或ハ尋常號角

一箇

一 黑色球

三箇

一 紅色球燈

三箇

一 號 鐘

一箇

一 汽 笛 (汽船)

一箇

一 萬國船舶信號旗

一 揃

一 內國航船

一 大砲一門若クハ二門

裝藥六箇以上

但雜船信號轟彈ヲ以テ大砲ニ代用スルヲ得此場合ニ於テハ該轟彈六箇以上ヲ備フヘシ

一 星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭

六箇以上

一 信號焰管

六箇以上

一 機械製霧中號角或ハ尋常號角

一箇

一 黑色球

三箇

一 紅色球燈

三箇

一 號 鐘

一箇

一 汽 笛 (汽船)

一箇

一 萬國船舶信號旗

一 揃

一 近海航船

一 星火ヲ發スル榴彈或ハ火箭

六箇以上

一 信號焰管

六箇以上

一 黑色球

三箇

一 紅色球燈

三箇

但百海里以內ヲ航通スルモノハ前四項ノ信號器ヲ備フルノ限ニアラス

一 機械製霧中號角或ハ尋常號角

一箇

一 號 鐘

一箇

一 汽 笛 (汽船)

一箇

一 萬國船舶信號器ノN.C.

一 組

(雜船信號)  
一 平水航船及不登簿帆船

第十四類 勸業



- 一 機械製霧中號角或ハ尋常號角
- 一 號 鐘
- 一 汽 笛 (汽船)
- 一 日本形回漕船
- 五百石以上ノモノ
- 一 星火ヲ發スル火箭或ハ信號炮管
- 一 機械製霧中號角或ハ尋常號角
- 一 號 鐘
- 一 萬國船舶信號旗ノM.C. (雜船信號)
- 一 日本形回漕船
- 百石以上五百石未満ノモノ
- 一 機械製霧中號角或ハ尋常號角
- 一 號 鐘

第八十六 日本坑法

○鑛山試掘并借區證券紛失ノ分所在發見ノ節證券還付方 十八年二月三日 工部省第一號府縣へ達

諸鑛山試掘并借區證券紛失ノ分ハ其都府當省ヨリ告示可致ニ付所在發見届出候者有之節ハ證券ニ理由書相添直ニ當省へ還納可致此旨相達候事

○鑛山試掘借區人相續又ハ讓渡讓受ノ節券面訂正下渡方 十八年十二月三日 工部省第三拾八號告示

從來鑛山試掘借區人相續又ハ讓渡讓受出願之節更ニ證券下渡候處自今券面訂正取重下渡スヘレ  
右告示候事

○鑛山借區稅息納者證券引上方 十九年二月二十四日 農商務省第三號府縣へ達

鑛山借區稅息納者及滿一箇年以上無故休業ノ者坑業禁止ノ儀並ニ試掘期限經過ノモノ證券引揚ノ儀ハ已來何出ニ不及其趣限リ處分シ證券引揚ケ返納ノ節其事由具申スヘシ

○鑛山借區稅徵收後廢坑又ハ減坪ニ屬スル既納稅 十九年四月七日 農商務省第五號

鑛山借區稅徵收後廢坑又ハ減坪ニ屬スル既納稅金ハ下戻サ、ルモノトス

○鑛山借區圖面調製坪數更正ノ爲メ稅金ニ増減ヲ生シタル片徵收並改正方 十九年四月八日 農商務省第六號

號北海道廳府縣

明治十七年四月工部省第三號達ニ據リ鑛山借區圖面調製坪數更正ノ爲メ其稅金ニ増減ヲ生シタルトキ納期以前更正清ノ分ハ更正坪數ニ據テ徵收シ其已後ニ係ル分ハ翌年納稅ノ節ヨリ改正スルモノトス

何指令

●諸鑛山取扱方ニ付岡山縣ヨリ工部省へ伺 十八年九月廿一日 (十八年十一月七日官報)

第一條 諸鑛山稼人ノ內稅金息納ノ爲メ坑業禁止ノ處分ヲ受ケタル者ハ再ヒ借區許可不相成旨ヲ御指令ノ趣モ有之處一箇年以上休業又ハ未着手等ノ爲メ坑業禁止ノ處分ヲ受ケタルモノハ均シク坑法違犯ニハ候得共稅金息納トハ事情モ相異リ候儀ニ付更ニ他ノ地ニ於テ試掘又ハ借區等願出ルトキハ御許可可相成哉

第二條 諸鑛山試掘借區等新規出願者ノ內是迄當縣管內ニ於テ稅金息納坑業禁止ノ處分ヲ受ケタル者有之候トキハ發ニ坑法違犯ノ廉ヲ以離開届旨直ニ此願へ及指令縣帳却下取計不苦哉

第三條 前條稅金息納ノ爲メ坑業禁止ノ處分ヲ受ケタルモノト雖モ是迄既ニ他ノ地ニ於テ試掘借區等許可ヲ得相稼



キ居候分ハ依然稼行セシメ不苦哉果シテ然ラハ該違犯者是迄試掘中鑛物發見借區出ル歟又ハ從來借區地鑛脈ノ都合ニ依リ増借區願出候節ハ是迄稼行ノ緣故ヲ以御許可可相成哉

第四條 諸鑛山稼人死亡シ其相續人ニ於テ引續稼行致度旨出願候ハ、借區期限ハ最前ノ儘ニテ證券名前御書換下附相成來候處若シ其相續人ニ於テ細續稼行ノ見込ナクシテ他へ讓渡サント欲スルトキハ其旨詳記該相續人并讓受人連署出願候ハ、一應相續人名前ニ切換ノ上ニ無之トモ直ニ讓渡ノ儀御許可可相成哉

第五條 同上稼人失踪逃亡之節其相續人ニ於テ細續稼行及ヒ他へ讓渡ノ儀共總テ前條死亡跡同様相心得可然哉

第六條 同上稼人失踪逃亡跡相續人家族等モ無之ニ於テハ親族又ハ財産管理人若クハ失踪逃亡以前本人ヨリ委託ヲ受ケン者ト雖モ失踪逃亡者ノ名義ヲ以代理稼ノ儀ハ不相成儀ニ候哉果シテ然ラハ借區試掘權ハ其時限ヲ消滅ノ儀ト相心得親族以下ノ者ヨリ證券返納セシメ可然哉

但親族以下ノ者モ無之候ハ、戸長ヨリ失踪逃亡ノ事實爲届出可然哉

第七條 數名連帶稼人ノ内失踪逃亡者アリテ其相續人家族ハ勿論親族以下ノ者モ無之ニ於テハ殘リ坑稼人ヨリ其旨詳記證券除名書換ノ儀爲願出可然哉

第八條 坑法第四章第十二款第二項ニ通洞ハ高九尺幅六尺ヨリ減スヘカラス是ヨリ小ナルハ通洞トセストアリ假令其小ナルモノハ通洞トセサルモ空氣風通シ又ハ運轉疏水等ノ爲メ必要ナルトキハ借區外ノ地ト雖モ支障筋無之上ハ開鑿スルヲ得ルハ勿論ノ儀ト存候得共別段出願ヲ要セス開鑿セシメ不苦哉

但本文ノ如ク空氣風通シ以下ノ爲メ舊坑ノ現存セルモノヲ其儘使用スルモ假令借區外ノ地ト雖モ本文同様出願ニ及ハス哉

第九條 同上第七章第二十九款ニ凡開坑人坑山外ノ場所ニ於テ有鑛質物ヲ製出センカ爲メニ建築スヘキモノアラハ先工部省ニ許可ヲ請フヘシトアリ右坑山外トハ借區外ノ儀ナル哉又ハ坑山トハ單ニ其借區内ニ止ラヌ所ク其坑山所在ノ地ヲ跋渉スル儀ニシテ假令借區外ト雖モ其借區ニ隣接シタル場所ニ於テ製鑛所ヲ建築スルハ別段願出セシムルニ及ハス哉

指令 十八年十一月四日

第一二三四條 何之通

第五條 相續人家族親戚等ヨリ保管細續稼行出願候ハ不苦候得共保管中他ニ讓渡候儀ハ不相成候事

第六條 第五條へ指令之通可相心得若シ親族已下細續稼行不欲トキハ一旦證券返納可爲致候事但書何之通

第七條 保管中ハ除名出願不及候事

第八條 通洞ヨリ小ナル者ハ都テ坑道トス借區外ニ於テ坑道新設及ヒ舊坑使用ノ儀ハ都テ通洞ニ準シ實測圖ヲ添出願可爲致候事

第九條 後段何之通

第八十七

軍用電信ニ係ル妨害者處分ノ件ヲ公布セシム 十九年四月廿二日 布告

勅令第二十一號

朕軍用電信ニ係ル妨害者處分ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御 璽

明治十九年四月廿日

內閣總理大臣伯爵伊藤博文 陸軍大臣伯爵大山 巖

勅令第二十一號

明治十八年五月第八號布告電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條第七十一條ハ軍用電信ニ亦之ヲ適用ス



軍用電信事務ヲ奉スル者電信條例第五十八條第五十九條第六十條第六十一條第六十二條第六十三條ニ記載シタル罪ヲ犯シタルトキハ各本刑ニ照シ一等ヲ加フ又電報ノ旨意ヲ漏泄シタルトキハ電信條例第六十八條第二項ニ依リ處斷ス

電信條例第五十八條第六十二條ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ普通刑法未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

○海外電報料 十九年六月九日 逓信省令第十五號

明治十八年獨逸國柏林府ニ於テ開設セシ英國電信會議ニ於テ關係ノ諸國協議ノ上本邦ト歐羅巴及埃及以西トニ直發若スル電報現行料金ノ内一割五分ヲ減額スルコトニ決定セシニヨリ同年五月第九號布達中及第七項ヲ左ノ如ク改正シ來ル七月一日ヨリ施行ス

一 海外電報ノ國內 壹岐對馬 傳送料金ハ何地ヨリ發スルヲ問ハス一語毎ニ左ノ如シ長崎以外ノ傳送料金ハ海外各國ニ於テ定ムル所ニ依ス

歐羅巴及埃及以西	正貨拾七錢
亞細亞(亞細亞露西亞及土耳其ヲ除ク)其他地方	正貨貳拾錢
香港厦門福州上海吳淞コツラフ及浦潮斯德ト長崎ト直發者	正貨拾錢

一 壹岐對馬及朝鮮國金山浦ヨリ海外へ發スル電報長崎迄一語ノ料金左ノ如シ但丁球國電信會社ノ海底線通行料金ヲモ含有ス

歐羅巴及埃及以西	鄉ノ浦長崎間正貨貳拾七錢	嚴原長崎間正貨五拾七錢
亞細亞(亞細亞露西亞及土耳其ヲ除ク)其他地方	鄉ノ浦長崎間正貨三拾錢	嚴原長崎間正貨六拾錢
	釜山長崎間正貨六拾錢	

其餘ハ海外電信料表ニ依リ收ムヘシ

○電信條例中心得方 十九年八月七日 逓信省告示第七十八號

電信條例第十一條第十二條第十七條第二十二條第二十七條第三十三條第三十七條第三十八條及第四十三條中電信中央局及分局トアルハ電信分局同第二十一條電信局長ハ逓信管理局長第二十五條及第二十六條中電信中央局及工部卿ハ一等電信分局及逓信大臣同第二十八條及第四十六條中工部卿ハ逓信大臣電信取扱規則第二條第五十六條第五十八條及第七十七條中「中央局并分局」「電信中央局又ハ分局」「電信中央局及分局」「電信分局ト心得ヘシ

第八十八 羽前羽後國界最上川へ水底電信線布設 十八年十二月三日 第廿號布達

山形縣下羽前國東田川郡落ノ目村ト同縣下羽後國飽海郡大宮村トノ間最上川へ水底電信線ヲ布設シ別紙圖面朱點内ヲ以テ該電信線路ト定ム

右布達候事



(別紙略ス)

第九十 鐵道

○幌内鐵道火藥類運送條規ヲ定ム 十九年一月二十七日 農商務省告示第二號  
當省所轄幌内鐵道火藥類運送條規左ノ通相定ム此旨告示ス

幌内鐵道火藥類運送條規

- 第一條 火藥類ヲ運送セントスル者ハ其名稱種類數量及受取人ノ氏名住所ヲ記載シタル書面ヲ發車四拾八時間以前ニ積出スヘキ停車場ニ差出シ承認ノ證ヲ領受スヘシ
- 第二條 火藥類ハ積送ノ停車場ニ到着シタル時ヨリ六時間以内ニ受取ヘシ此時限ヲ過ルトキハ一時間毎ニ目方拾貳貨目ニ付金拾錢ノ割ヲ以テ遲滞料ヲ徵收スヘシ
- 第三條 火藥類受渡ヲ爲スハ停車場吏員ニ限ルヘシ其受渡時間ハ日出後日没前ニシテ特ニ指定スル時日ニ限ルモノトス但時機ニ依リ日没後ニ渡方ヲ爲スコトアルヘシ
- 第四條 非常事變ニ際シ火藥類受渡運送急ヲ要スルトキハ其請求ニ依リ第一條第三條ノ時限ニ拘ラス便宜處分スヘシ
- 第五條 火藥類運送ハ貨物列車ヲ以テシ若シ貨物列車ヲ發立サルトキハ通常列車ニ較載スルコトアルヘシ但陸海軍入塲帶スル彈藥ハ此限ニアラス
- 第六條 火藥類受渡庫入等ヲ爲ストキハ互ニ手渡ヲ爲シ決テ地上ニ投下シ又ハ轉轍スヘカラス若シ轉轍セサルヲ得サルトキハ經過スヘキ地上ニ必ス草布木綿等ノ類ヲ敷クヘシ
- 第七條 火藥類荷造成規ニ抵觸スルモノハ一切運送セサルモノトス

第九十一 燈標私設ヲ禁止ス

十八年六月五日 第十一號布達

明治五年十月第三拾貳號布達ヲ廢止シ自今燈標私設ヲ禁止ス

但既設燈標ニシテ從前船舶ヨリ其費用ヲ徵セサルモノハ來ル明治二十五年ヲ限リ廢止シ其費用徵收願濟年限ナキモノハ此際相當ノ期限ヲ定メ更ニ工部省へ願出ヘシ  
○私築燈標ノ燈費ハ海軍艦船及燈臺視察船ヨリ取立ルヲ得ス 十九年六月二十九日 逕信省令第十八號  
私築燈標ノ燈費ハ海軍船艦及燈臺視察船ヨリ取立ルヲ得ス

伺指令

●燈費取立ノ件ニ付福岡縣ヨリ工部省へ伺 十八年七月廿日 (十八年十一月十六日官報)

本年第十一號布達ヲ以明治五年太政官第三百十二號布達被廢條處官船及外國船ヨリ燈費取立不相成儀ハ依然猶減セサルモノト確認致候然ルニ人民所有ノ船舶ヲ一時官用ノ爲借上ケ又ハ外國人へ貸渡候トキハ其貸借中ト雖正固ヨリ所有主ノ旗章ヲ掲テ航海スルモノナレハ其所有權變移無之ニ付燈費取立可然儀トハ被存候得共些シク疑義相生候條此段相伺候也

指令 十八年十一月十三日

伺ノ趣左ノ通心得ヘシ

- 一 本年第十一號布達本文ハ既設ノ燈標ニ關係セサルモノトス
- 一 民有ノ船舶ハ官ニ借上ケ又ハ外國人ニ貸渡スモ燈費ヲ仕拂フヘキモノトス但官命ヲ使用スルモノハ此限ニアラス



第十五類 契約

第九十二 登記法 十九年八月十三日布告  
法律第一號

朕登記法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年八月十一日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
内務大臣伯爵山形有朋  
大藏大臣伯爵松方正義  
司法大臣伯爵山田顯義

法律第一號

登記法

第一章 總則

第一條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ヲ請ハントスル者ハ本法ニ從ヒ地所建物  
ハ其所在地船舶ハ其定繫場ノ登記所ニ登記ヲ請フ可シ

第二條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ノ登記ハ始審裁判所長之ヲ監督ス可シ

第三條 登記事務ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ取扱フモノトス治安裁判所遠隔ノ地方ニ於テハ  
郡區役所其他司法大臣指定スル所ニ於テ之ヲ取扱ハシム

第四條 登記所ノ位置及其管轄ノ區域ハ司法大臣之ヲ定ム



第五條 登記官吏ハ登記事務取扱ニ付テハ始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス  
第六條 登記簿ニ登記ヲ爲サ、ル地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ハ第三者ニ對シ法律上其効ナキモノトス

第七條 地所建物船舶ノ賣買讓與質入書入ニ付キ登記ス可キ概目左ノ如シ

- 第一 地所ハ郡區町村名、字、番地、地目、反別若クハ坪數地券面ノ價格
- 第二 建物ハ郡區町村名、字、番地、地目、構造ノ種類、建坪、造作ノ有無
- 第三 西洋形船舶ハ汽船、風帆船ノ區別船名、番號、登簿噸數、公稱馬力、汽機及汽罐ノ種類、端船其他必要ノ所屬品

第四 日本形船舶ハ船名、番號、積石數、間數、端船其他必要ノ所屬品

第五 登記ノ事由

第六 金額

第七 質入書入ハ其期限及利息

第八 所有者及登記ヲ受クル者ノ氏名住所

第九 一筆ノ地所又ハ一棟ノ建物ヲ區別シ賣買讓與質入書入ヲ爲ストキハ其事實

第十 二番以後ノ書入ヲ爲シ又ハ書入ニ爲シタルモノヲ質入ト爲シ質入ニ爲シタルモノヲ書入ト爲ストキハ其事實

第十一 登記ノ年月日

第八條 登記ヲ請フモノアルトキハ登記官吏直ニ前條ノ概目ヲ審査シテ登記簿ニ登記シ本人ニ之ヲ示シ又ハ讀聞セタル上本人ヲシテ署名捺印セシメ且之ニ署名捺印ス可シ

第九條 地所建物船舶ニ關スル差押假差押差留假差留假處分及地所建物ノ收益差押ニ付テハ裁判所ノ命令書ニ依リ登記簿ニ其記入ヲ爲ス可シ

前項ノ記入ハ裁判所ノ命令アルトキニ非サレハ之ヲ取消スコトヲ得ス  
第十條 登記ハ第十五條第二項及第十六條第十七條第十八條ヲ除クノ外契約者雙方ノ請求若クハ裁判所ノ命令アルトキニ非ラサレハ之ヲ爲シ又ハ變更シ又ハ取消スコトヲ得ス

第十一條 登記ノ謄本又ハ拔書又ハ一覽ヲ要スル者ハ其登記所ニ出頭シテ之ヲ請求スルコトヲ得  
第十二條 登記官吏ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得  
第十三條 登記ニ關スル取扱ノ手續及登記簿ノ書式ハ司法大臣之ヲ定ム

第二章 賣買讓與

第十四條 地所建物船舶ノ賣買讓與ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示ス可シ

前項ノ場合ニ於テ其物件質入書入中ニ係ルトキハ買受人讓受人ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ

第十五條 家督相續ニ因リ地所建物船舶ノ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示

第十五類 契約



シ死亡者失踪者若クハ離縁戸主ノ遺留シタル地所建物船舶ヲ相續スル者登記ヲ請フトキハ親屬又親屬ナキトキハ近隣ノ戸主二名以上連署ノ書面ヲ差出シ且證明書類アルモノハ之ヲ示スコシ

第十六條 行政官廳ノ公賣處分ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者登記ヲ請フトキハ落札達書及其代金完納ノ證書ヲ示スコシ

第十七條 官有ノ地所建物船舶ノ拂下又ハ無代價下渡ヲ受ケ登記ヲ請フトキハ其指令ノ本書若クハ達書ヲ示スコシ

第十八條 民有ノ地所建物船舶ヲ官有ト爲シタルトキハ其官廳ハ第七條ノ概目ヲ示シテ登記ヲ求ム可シ

第十九條 裁判執行上ノ釋賣若クハ入札ニ因リ地所建物船舶ノ所有權ヲ得タル者アルトキハ裁判所ノ命令ニ依リ其登記ヲ爲スコシ

第二十條 地所船舶賣買讓與ノ登記ヲ受ケ地券鑑札ノ下付若クハ書替ヲ請ハントスル者ハ登記所ヨリ登記濟ノ證ヲ受ク可シ

第三章 質入書入

第二十一條 地所建物船舶ノ質入書入ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示スコシ

貸借ノ爲メニ非シテ義務ヲ果ス可キ保證ノ爲メ地所建物船舶ヲ質入書入ト爲シ其登記

ヲ請フ者モ亦前項ノ規定ニ依ル可シ

第二十二條 書入ノ地所建物船舶ヲ重テ書入ト爲ストキハ第二債主ニ於テ之ヲ了知セル旨ヲ申出其記入ヲ請フ可シ書入ト爲リタル地所ヲ質入ト爲シ又ハ質入ト爲リタル地所ヲ書入ト爲ストキ亦同シ

第二十三條 質入書入契約ノ全部若クハ一部ノ解除又ハ變更ニ付キ登記ヲ請フトキハ契約者雙方出頭シ其證書ヲ示スコシ

第二十四條 同一ノ地所建物船舶ニ付キ數個ノ登記ヲ爲ストキハ其登記ヲ請フ日時ノ前後ニ因リ登記ノ順序ヲ定ムルモノトス

第四章 登記料及手數料

第二十五條 地所建物船舶賣買ノ登記ニ付テハ其買受人左ノ賣買代價ノ區別ニ從ヒ每一件ニ其登記料ヲ納ム可シ

賣買代價

登記料

五圓未滿  
五圓以上  
拾圓未滿  
拾圓以上  
貳拾圓未滿  
貳拾圓以上  
伍拾圓未滿  
伍拾圓以上  
百圓未滿  
百圓以上

五 錢  
拾 錢  
貳拾五錢  
五拾錢  
壹 圓

第十五類 契約







第三十三條 評價人ノ評定シタル價格届出ノ價格ヨリ増加スルトキハ其評價ニ關スル費用ハ其登記料ヲ納ムル者之ヲ負擔ス可シ若シ其價格届出ノ價格ト同價又ハ低價ナルトキハ該費用ハ其登記所ニ於テ之ヲ支辨ス可シ

第三十四條 評價人ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三十五條 評價人ノ日當ハ登記所ノ見込ヲ以テ一日金貳拾錢ヨリ五拾錢マテヲ給ス可シ

第五章 罰則

第三十六條 詐偽ノ所爲ヲ以テ登記料ヲ減脱シ及之ニ通謀シタル者ハ二圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十七條 本法ニ依リ罰金ニ處スル者ハ刑法ノ不論罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

附則

第三十八條 明治十年第二十八號布告船舶賣買書入質手續同十三年第五十二號布告土地賣買讓渡規則同十四年第三十號布告地券證印稅則其他從前ノ法律規則中本法ニ抵觸スルモノハ本法施行ノ日ヨリ廢止ス

第三十九條 地所賣買讓與荒地起返開墾歛下年期明等總テ地券下付書換ニ係ル手續及其手數料ハ大藏大臣之ヲ定ム

第四十條 登記所ノ登記簿ニ未タ登記セサル地所建物船舶ニ付登記ヲ請フ者ハ地所建物ハ

其所在地船舶ハ其定繫場ノ戶長ノ證書ヲ以テ其所有者タルコト及其物件ニ故障ナキコトヲ示ス可シ

第四十一條 本法ハ明治二十年二月一日ヨリ之ヲ施行ス



第十六類 訴訟

第九十三 代言人規則

○代言人取扱手續ヲ改正ス 十三年五月十三日  
司法省明治九年二月第二十五號達代言人取扱手續左ノ通改正候條此旨相違候事

代言人取扱手續

- 第一條 代言ノ免許ヲ願フ者アル時ハ檢事 檢事ナキ地ハ檢事ノ 其願書及ヒ履歷書ヲ寄附シ若シ履歷ノ新末分 明ナラサル時ハ本管ニ照會シテ取調ヘタル上之ヲ試驗シ一切ノ書類ヲ總メ司法卿ニ進達スヘシ
- 第二條 試驗問題ハ出願定月前司法卿ヨリ各地方ノ檢事ニ送付ス
- 第三條 檢事ハ司法卿ヨリ受クル所ノ問題ヲ以テ出願定月ノ下半ケ月間ニ試驗ヲ行フヘシ  
但試験ニ法律書籍ヲ携帶スルモ妨ナシ其問題ニ之ヲ許サヘル旨ヲ記セシ時ハ携帶ヲ禁スヘシ
- 第四條 免許狀ハ司法卿ヨリ檢事ニ送付シ檢事之ヲ其本人ニ授與スヘシ
- 第五條 大審院裁判所并檢事ニ於テハ代言人名簿ヲ製シ年月日ヲ詳ニシテ左ノ件々ヲ登錄スヘシ  
一 氏名身分任所年齢  
二 新規及ヒ引續免許  
三 任所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等  
四 懲罰
- 第六條 代言人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シ代言人規則ニ照シテ之ヲ取扱ノヘシ若シ犯則ノ者アル時ハ其處分ヲ裁判 官ニ求ムヘシ訟庭ニ於テノ犯則ハ裁判官直ニ之ヲ處分シ後テ檢事ニ通知スヘシ
- 第七條 議會ノ規則ハ檢事之ヲ認許シ其副本ヲ司法卿ニ進達スヘシ 十九年六月司法省令丙第七號ヲ以テ(副本)ノ下(及 第八條 代言人他ノ裁判所管内ニ轉任シ又ハ廢業スルトキハ檢事ヨリ司法卿へ上申スヘシ尤モ廢業ノトキハ其免許狀



送納スヘシ

第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ書換等ニテ更ニ下付ヲ願出ル者アル時ハ檢事ヨリ司法卿へ上申シ其免許狀下付ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スヘシ但右出願ノ時其願書ノ寫へ捺印ヲナシテ本人へ與へ置クヘシ

第十條 檢事ハ免許料ヲ收領シタル上ニテ免許狀ヲ本人ニ授與スヘシ

第十一條 免許料ハ一月毎ニ司法省へ納ムヘシ十三年丙第十四號省達ヲ以テ全條改正ス

但シ檢事所在ノ裁判所へ該會計課へ交付スル候ト心得ヘシ

第十二條 代官人ノ處刑懲罰ハ其都府檢事ヨリ之ヲ司法卿へ上申スヘシ除名ノ時ハ其免許狀ヲ撤奪シテ送納スヘシ

第十三條 檢事ハ停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ其年月日ヨリ其年月日マテ停業シタル旨ヲ實書シ檢事ヲシテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

(免許狀離形略之)

第九十四 公證人規則 十九年八月十三日布告

法律第二號

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年八月十一日

内閣總理大臣 伯伊藤博文  
司法大臣 伯齋山田顯義

法律第二號

公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑託ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スルカアルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ

又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其居宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セ

ントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限り役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セ

ス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人

第十六類 訴訟



第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得  
第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管  
轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サ、ル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ  
公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルトキハ近隣ノ公證人ニ  
代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲナサシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ其始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル野紙  
ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ  
其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本ノ一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々授受シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判  
所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡ス可カラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩ス可カラス

第二章 公證人ノ選任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大學卒業生  
代理人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有スル事

第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ  
定ム

第二十條 左ニ掲グル者ハ公證人タルコトヲ得ス



- 第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者
- 第二 盜罪詐僞罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者
- 第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者
- 第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者
- 第二十一條 公證人ヲ試驗スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二個月前ニ告示ス可シ
- 第二十二條 試驗委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス
- 第二十三條 試驗ノ科目ハ公證人規則民法訴訟法商法其他公證人ノ職務ニ關スル法律命令トス
- 第二十四條 公證人タラント欲スル者ハ願書ニ試驗及第證書ノ寫ヲ添ヘ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法科大學卒業生ハ其卒業證書代言人ハ其免許ヲ以テ及第證書ニ代フルコトヲ得
- 第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス
- 第二十六條 試驗ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試驗ニ合格セサル者ハ口述試驗ヲ受クルコトヲ得ス
- 第二十七條 試驗及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

- 第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知リ面識アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス
- 公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留地ノ郡區長若クハ戶長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知リ面識アル丁年者二人以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス
- 第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス
  - 第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生
  - 第二 第二十條ニ掲ケタル者
- 第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ
  - 第一 囑託人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齡
  - 第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齡
  - 第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齡
  - 第四 郡區長戶長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所



所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作リシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス  
接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ墨線ヲ以テ之ヲ接續ス可シ  
數量并ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾陌阡萬ノ字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量、名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ  
既ニ廢シタル度量衡貨幣、曆法又ハ外國ノ度量衡貨幣、曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人并ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加、改正、消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作リタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ其治安裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ  
公證人并ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス  
若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告ニ從フ可シ之ニ違ヒタルト

十年第五十號  
布告ハ前卷第  
百六十二出ス

キハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得ス其親屬他人ノ代理人タルトキモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人トナリ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益アル條件ヲ證書中ニ記ス可ラス若シ之ヲ記シタルトキハ其條件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セス又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サハルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連綴ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連綴スルコトヲ得之ヲ連綴シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可シ

第十六類 訴訟



第二節 正本及謄本

第四十二條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒタルトキハ正本ノ効ヲ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ

第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リタル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

裁判官ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連綴ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシムヘシ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始審裁判所ノ認可ヲ經之ヲ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式謄本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡ス可カラヌ又抄録正本又ハ抄録正式謄本ヲ渡シタル者ニハ更ニ正本又ハ正式謄本ヲ渡ス可カラヌ之ヲ渡スト雖ヒ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式謄本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セス

再度以上正本又ハ正式謄本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シテ管轄始審裁判所ニ願出ツ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存スル公證人ニ其正本又ハ正式謄本ヲ渡スコトヲ命スルコトアル可シ

其正本又ハ正式謄本ニハ幾度ノ正本又ハ正式謄本ナルコトヲ末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式謄本ハ總テ正本又ハ正式謄本ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ



第五十一條 證書ノ謄本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應シ之ヲ渡ス可シ  
第五十二條 謄本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ  
第五十三條 抄録謄本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録謄本ト記シ公證人署名捺印ス可シ

第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連續シ末尾ニ命令書ヲ受ケタル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條及第二十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シテ直ニ後任者ノ命セラレサ

ル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ  
第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ

後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハズ書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ

兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三



日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ依テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原本ヲ作りタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ得

第六十七條

公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フトキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滞留スルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條

兼任者本任者ニ代リテ職務ヲ行フトキハ其手数料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條

手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ之ヲ受クルコトヲ得

第七十條

囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可シ

第七十一條

手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハラヌ管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分ス可シ

第七十三條

左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第十六類 訴訟



- 第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書ヲ爲サ、リシ時
- 第三十五條ニ違ヒタル時
- 第四十條ニ違ヒタル時
- 第四十一條ニ違ヒタル時
- 第四十二條ニ違ヒタル時
- 第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十六條ニ違ヒタル時
- 第五十二條ニ違ヒタル時
- 第五十三條ニ違ヒタル時
- 第五十四條ニ違ヒタル時
- 第五十五條ニ違ヒタル時
- 第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時
- 第六十一條ニ違ヒタル時
- 第六十三條ニ違ヒタル時
- 第七十四條 左ノ違犯ハ二圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス
- 第四十二條ニ違ヒタル時

- 第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時
- 第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第四十九條ノ第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス
- 第二條ニ違ヒタル時
- 第七條ニ違ヒタル時
- 第十條ノ第二項ニ違ヒタル時
- 第二十八條ニ違ヒタル時
- 第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時
- 第三十二條ニ違ヒタル時
- 第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時
- 第三十六條ニ違ヒタル時
- 第三十七條ニ違ヒタル時
- 第三十八條ニ違ヒタル時
- 第三十九條ニ違ヒタル時
- 第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス



第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アルトキハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保證金ヲ差入レサルトキ又前項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セシメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

○公證人規則施行條例 十九年八月三十日 司法省令甲第二號

今般法律第二號ヲ以テ公證人規則制定相成候ニ付施行條例左ノ通之ヲ定ム

公證人規則施行條例

第一條 公證人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置クモノトス

若シ公證人ノ員數不足スルハ受持區ニ依リテハ至ク之ヲ置カサルコトアル可シ

第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フ可シ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ送達ス可シ

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受ケタル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セントスルモ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル妻札ヲ掲ク可シ

役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス

書類ハ常ニ書籍ニ職メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試驗ヲ受ケント欲スル者ハ試驗願書ニ履歷書ヲ添ヘ試驗期日ノ告示アリタルヨリ試驗期日

一箇月前マテニ試驗ヲ行フ控訴院若クハ始審裁判所ニ差出ス可シ

試驗願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戶長ノ奥書ヲ受ク可シ

第六條 試驗ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試驗委員ハ筆記試驗ノ答ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試驗ヲ行フ可シ

筆記試驗ニ合格セサル者ニ付テハ口述試驗ヲ行ハス

第八條 試驗問題答按ノ適否ハ試驗委員ノ判斷ニ決スルモノトス

試驗ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リテ之ヲ定ム可シ

第九條 試驗委員ハ口述試驗ノ大略及試驗全體ノ結果ヲ記録ニ記載ス可シ

第十條 試驗ニ及第シタル者ニハ試驗委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス可シ

試驗ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試驗及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ住所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登錄ス可シ

第十一條 試驗委員ハ試驗ニ關スル一切ノ書類ヲ其試驗ヲ行フタル始審裁判所若クハ控訴院ノ長ニ差出ス可シ

始審裁判所ニ於テ試驗ヲ行フタルモ其裁判所長ハ及第者ニ關スル一切ノ書類ニ意見ヲ附シテ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ



控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ

第十二條 公證人ヲラント欲スル者ハ其願書ニ試験及筆跡書官記單位卒業證書又ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保證スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ

試験及筆跡書ヲ要セサル出願人ハ別ニ履歷書ヲ添フ可シ

第十三條 公證人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十四條 公證人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十五條 公證人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ

第十六條 司法大臣公證人ヲ任スルハ辭令書ヲ其公證人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住所族籍氏名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公證人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債證書若クハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公證人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ

東京及大坂

金五百圓

他ノ地方ニ於テハ

人口貳拾萬以上アル受持區

金四百圓

人口貳拾萬未満アル受持區

金三百圓

人口拾萬未満アル受持區

金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セス

第十九條 公證人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フコトヲ得ス  
公證人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルハ公證人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公證人ノ身元保證金ハ公證人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ抵保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタルハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公證人ニ命ス可シ

公證人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務施行ノ停止ヲ命スルヲ得此場合ニ於テ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公證人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルハ始審裁判所長ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公證人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ補充セシメ若シ餘分アルハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公證人其職務ヲ罷タルハ身元保證金ヲ還付ス可シ

第二十四條 公證人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルハ管轄始審裁判所ハ控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルモ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公證人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタル時ハ始審裁判所及控訴院ハ其旨ヲ公證人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公證人規則ニ定メアル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公證人試験願書式履歷書式及公證人願書式ハ左ノ如シ

第一 公證人試験願書式



公證人試驗願料紙美濃紙

私儀公證人試驗相受度此段奉願候也

年月日

某控訴院長誰殿 又ハ其始審裁判所長誰殿

前書ノ通族籍年齢等相違無之候也

年月日

第二 履歷書式

履歷書料紙美濃紙

現任所

氏名印

族籍 戸主嗣子又ハ二

氏名

年齢

本籍

區長又ハ戸長印

族籍

氏名印

年齢

一 何年何月ヨリ何年何月迄府縣何某ニ就キ又ハ公私何學校何塾ニ於テ何學修業

一 何年何月何々ニ職業仕官進退賃罰等

一 公證人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

年月日

前書ノ通相違無之候也

年月日

第三 公證人願書式

公證人願料紙美濃紙

本籍

區長又ハ戸長印

族籍 戸主嗣子又ハ二

氏名

年齢

私儀何府縣何國某治安裁判所管下公證人受持區ニ於テ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試驗及第證書(官記學位記卒業證書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

年月日

現任所

氏名印

又

私儀何府縣何國某治安裁判所管下及何府縣何國某治安裁判所管下(某始審裁判所管下又ハ某控訴院管下)ノ内何レノ公證人受持區ニ於テナリトモ御命令ニ從ヒ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試驗及第證書(官記學位記卒業證書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

記卒業證書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

前後ノ式ハ  
前式ニ同シ

第九十五 使丁規則ヲ定ム

十四年十二月五日

使丁規則別冊之通相定候條明治十五年一月一日ヨリ施行致スヘク此旨相達候事

司法省丁第二十六號大審院裁判所へ達



別冊

使丁規則

- 第一條 各裁判所書記局ハ刑事民事ニ關スル召喚狀其他書類ヲ送達セシムル爲メ其請負人ヲ定メ之ヲ使丁取締トス
- 使丁取締ハ一人トス但場所ニ因リ二人以上ヲ命スルコトアル可シ
- 第二條 使丁ハ使丁取締之ヲ撰ヒ其氏名ヲ書記局ニ届出鑑札ヲ受ルモノトス
- 使丁ノ人員ハ使丁取締適宜之ヲ定メ書記局ノ許可ヲ受ク可シ
- 第三條 使丁取締ハ送達ノ事ニ付總テ其責ニ任スルモノトス
- 第四條 使丁取締ハ常ニ裁判所ニ在テ送達ノ事ヲ取扱フ可シ
- 第五條 使丁ハ送達ヲ爲ス時裁判所ノ鑑札ヲ帶行ス可シ
- 第六條 送達ヲ爲スニハ其法律規則ニ從フ可シ
- 第七條 使丁取締及ヒ使丁ハ訴訟ニ付代人トナリテ認廷ニ出ルコトヲ許サス
- 第八條 送達ノ事ニ關シ他人ニ損害ヲ被ラシメタル時ハ使丁取締其償ヲ擔當スヘシ
- 但使丁ノ過失懈怠ニ由ル時ハ使丁取締ハ之ニ對シ更ニ其償ヲ求ムルコトヲ得
- 第九條 送達賃錢ハ地方ノ便否ニ從ヒ書記局ニ於テ適宜其定限ヲ立ツ可シ
- 但シ送達書ニ賃錢ノ高ヲ附記ス可シ十五年丁第三十四號  
省達ヲ以テ全條改正
- 第十條 賃錢ノ定限ハ其取扱所ニ貼示シ三日以上新聞紙ニ掲載シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ公

告ス可シ

- 第十一條 刑事ニ付テノ送達賃錢ハ其送達ヲ受クル者ヨリ之ヲ拂フ可シ同上
- 第十二條 刑事附帶ノ私訴及ヒ民事ニ付テノ送達賃錢ハ總テ其送達ヲ請求スル者ヨリ之ヲ拂フ可シ
- 第十三條 送達賃錢ニ付テノ訴訟ハ其書類ヲ發シタル裁判所ニ之ヲ爲ス可シ
- 第十四條 使丁取締ハ書類送達ヲ正實ニ取扱フ可キ旨ノ書面ヲ書記局ニ差出ス可シ
- 第十五條 使丁取締及ヒ使丁此規則ニ違背シタル時裁判所書記局ハ使丁取締ニ左ノ條件中ニテ相當ノ言渡ヲ爲スヘシ
  - 一 貳拾圓以下ノ違約金ヲ納メシムルコト
  - 二 解職セシムルコト
  - 三 事情重キ者ハ違約金ヲ納メ解職セシムルコト
- 第十六條 使丁取締タルニハ其裁判所々在地ニ家屋ヲ有シ滿二十一歳以上ノ者ニシテ書記局ノ試験ヲ經ルコトヲ要ス
- 使丁取締タルニハ身元保證トシテ金五拾圓以上ノ價格アル公債證書地券又ハ銀行其他官許アル株券證書ヲ書記局ニ納ム可シ
- 但此保證金ハ解職ノ時下戻ス可シ
- 第十七條 試験ハ書記二名以上ニテ之ヲ爲ス可シ

第十六類 訴訟



但書記不足ナルトキハ雇ヲ以テ之ニ充ツ可シ

試験ノ科目ハ左ノ如シ

一 使丁規則

二 請負郡村ノ地名又ハ里數

三 普通書簡ノ書讀

第十八條 實決ノ刑ニ處セラレタル者及ヒ身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ヲ終ラサル者ハ使丁取締又ハ使丁タルヲ許サス

第九十六 裁判所一覽表中改正

十八年十二月一日 第四十號布告

明治十六年一第貳號布告裁判所一覽表中左ノ通改正ス

- 一 札幌始審裁判所管内浦河治安裁判所ヲ日高國幌泉郡幌泉ヘ移シ幌泉治安裁判所ト稱ス
- 一 日高國沙流新冠靜内ノ三郡ヲ札幌治安裁判所ノ管轄ニ改ム

右奉 勅旨布告候事

○裁判所管轄區畫中ヲ改正ス

十九年六月五日布告 勅令第四十五號

朕裁判所管轄區畫表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年六月二日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文 司法大臣伯爵山田顯義

勅令第四十五號

明治十六年一第貳號布告裁判所管轄區畫表中福島始審裁判所若松支廳管内若松治安裁判所管轄越後國東蒲原郡ヲ新潟始審裁判所新發田支廳管内新發田治安裁判所ノ管轄トス  
○裁判所位置及管轄區畫表中ヲ改正ス 十九年八月二十六日布告 勅令第六十二號  
朕裁判所位置及管轄區畫表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年八月二十四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文 司法大臣伯爵山田顯義

勅令第六十二號

明治十六年一第貳號布告裁判所位置及管轄區畫表中左ノ通改正ス

- 栃木始審裁判所ヲ宇都宮ニ移シ宇都宮始審裁判所ト改稱ス
- 栃木始審裁判所宇都宮支廳ヲ栃木ニ移シ宇都宮始審裁判所栃木支廳ト改稱ス
- 栃木始審裁判所管内栃木治安裁判所管轄郡名中上下都賀トアルヲ(上都賀ノ内下都賀)ト改メ寒川安蘇築田足利ヲ併テ宇都宮始審裁判所栃木支廳管内栃木治安裁判所ノ管轄トス



栃木始審裁判所宇都宮支廳管内宇都宮治安裁判所管轄郡名中河内ノ上(上都賀ノ内)ノ  
五字ヲ加ヘ河内芳賀鹽谷那須ヲ併テ宇都宮治安裁判所管内宇都宮治安裁判所ノ管轄ト

新潟始審裁判所管内新潟治安裁判所管轄郡名中<sup>西</sup>中浦原トアルヲ<sup>南</sup>(西浦原南浦原ノ内)ト  
改ム

新潟始審裁判所長岡支廳管内長岡治安裁判所管轄郡名中(南浦原ノ内)ノ五字ヲ加フ

大坂始審裁判所管内天王寺治安裁判所ノ管轄タル東區ヲ中ノ島治安裁判所ノ管轄ニ改

ム  
大坂始審裁判所管内中ノ島治安裁判所管轄郡名中西成ノ下(内木津川以西)ノ七字ヲ  
加フ

大坂始審裁判所管内天王寺治安裁判所管轄郡名中(西成ノ内木津川以東)ノ九字ヲ加フ

○裁判所官制

十九年五月五日布告  
勅令第四十號

朕裁判所ノ官制ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年五月四日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
司法大臣伯爵山田顯義

勅令第四十號

裁判所官制

第一 職員

第一條 本令中裁判所トアルハ治安裁判所始審裁判所重罪裁判所控訴院大審院及高等法  
院ヲ總稱ス

裁判官トアルハ裁判所ノ長局長評定官判事及判事試補ヲ總稱シ檢察官トアルハ檢事長  
檢事及檢事試補ヲ總稱ス

第二條 治安裁判所始審裁判所控訴院大審院ニ左ノ職員ヲ置ク  
治安裁判所

判事 一人 奏任五等

判事試補 若干員

檢事試補 一人

勸解吏 一人 判任

書記 判任

始審裁判所

長 一人 奏任一等乃至四等

判事 若干員 奏任現任長ノ次等以

判事試補 若干員 奏任下五等ニ至ル

第十六類 訴訟



檢事 若干員 奏任二等乃至五等  
 檢事試補 若干員  
 書記 判任  
 控訴院  
 長 一人 勅任一等又ハ二等  
 評定官 若干員 奏任一等乃至四等  
 檢事長 一人 奏任一等  
 東京控訴院ニ限リ勅任二等ノ評定官及檢事長ヲ置クコトヲ得  
 檢事 若干員 奏任二等乃至四等  
 書記官 一人 奏任四等  
 書記 判任  
 大審院  
 長 一人 勅任  
 局長 三人 勅任二等  
 評定官 若干員 勅任二等又ハ奏任一等乃至二等  
 檢事長 一人 勅任二等  
 檢事 若干員 奏任一等又ハ二等

書記官 一人 奏任四等  
 書記 判任

第三條 第十七條ニ指定スル局長勅任ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツルノ外ハ奏任一等ノ評定官ヲ以テ之ニ充ツ  
 第四條 重罪裁判所及高等法院ノ職員ハ治罪法ノ定ムル所ニ依ル  
 第五條 裁判所ノ職員中定員ヲ限ラサルモノハ判任官ヲ除クノ外事務ノ繁簡ニ應シ司法大臣ノ閣議ヲ經テ定ムル所ニ依ル  
 第六條 試補ノ規則ハ別ニ定ムル所ニ依ル  
 第七條 治安裁判所管轄區域内ニ執行吏ヲ置ク判任トス  
 第八條 裁判官及檢察官トナルノ資格ハ別ニ試驗法ノ定ムル所ニ依ル  
 第九條 刑法第二編第四章第一節乃至第六節第九章第二節第二百八十四條乃至第二百八十七條第三編第二章第一節乃至第六節ニ掲クル重輕罪ヲ犯シテ有罪ナリトノ言渡ヲ受ケ其言渡ノ確定シタルモノハ裁判官及檢察官タルコトヲ得ス  
 第十條 大審院長局長評定官控訴院長檢事長及始審裁判所ノ長ヲ除クノ外裁判官及檢察官ノ任所ハ司法大臣ノ定ムル所ニ依ル  
 第十一條 新ニ裁判官ニ任セラル、モノハ治安裁判所ニ於テ其職務ニ服シ治安裁判所裁判官又ハ檢察官ニシテ一年以上其職務ニ服シタルモノハ始審裁判所裁判官ニ任スルコトヲ得



トヲ得

裁判官檢察官ニシテ五年以上其職務ニ服シタルモノハ控訴院裁判官ニ任スルコトヲ得  
裁判官檢察官ニシテ十年以上其職務ニ服シタルモノハ大審院裁判官ニ任スルコトヲ得  
第十二條 裁判官ハ刑事裁判又ハ懲戒裁判ニ依ルニアラサレハ其意ニ反シテ退官及懲罰  
ヲ受クルコトナシ

第二 分課及職務

第十三條 裁判所ノ權限及裁判官ノ所掌ハ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依ル  
第十四條 治安裁判所裁判官ノ分課ハ訴訟事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ一周年毎ニ  
所轉始審裁判所長ノ定ムル所ニ依ル但治安裁判所ノ便宜ニ依リ其管轄ノ區域内ニ於テ  
臨時分課外ノ職務ヲ行フコトアルヘシ

第十五條 治安裁判所裁判官ハ司法大臣ノ命ニ依リ其裁判所所在地外ニ於テ期日ヲ定メ  
法廷ヲ開クコトアルヘシ

第十六條 始審裁判所裁判官ノ分課ハ一周年毎ニ始審裁判所長ノ上申ニ依リ訴訟事件ノ  
種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ所轄控訴院長ノ定ムル所ニ依ル

第十七條 控訴院ハ民事刑事ノ類別ニ依リ須要ニ從ヒ數局ヲ置ク各局中ノ分課ハ一周年  
毎ニ控訴院長ノ上申ニ從ヒ事件ノ種類又ハ土地ノ區域ニ從ヒ大審院長ノ定ムル所ニ依  
ル局長及局員ヲ定限スルモ亦同シ但控訴院長ヲシテ院中一局ノ長ヲ兼テシメ自餘ノ局

長ハ遞次上席ノ評定官ヲシテ之ヲ兼テシム

第十八條 第十六條第十七條ニ指定シタル分課ハ其分掌ノ偏重ナルトキ又ハ其主任ニ缺  
員若クハ引續キ差支アルトキニアラサレハ定期間之ヲ變更スルコトヲ得ス但前年ニ審  
理ヲ始メ未タ終結セサル事件ハ從來ノ主任裁判官ヲシテ終結セシムルコトヲ得

第十九條 大審院ニ民事第一局民事第二局及刑事第一局刑事第二局ヲ置ク民事第一局ハ  
上告事件ノ受理不受理ヲ審判シ民事第二局ハ受理シタル事件ヲ審判シ刑事第一局ハ刑  
法ニ關スル上告事件ヲ審判シ刑事第二局ハ諸罰則ニ係ル上告事件ヲ審判ス  
民事第二局ノ長ハ大審院長ヲシテ之ヲ兼テシメ評定官ハ司法大臣ノ上奏ニ依リ其各局  
分任ヲ命ス

第二十條 治安裁判所裁判官差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキモノハ一周年毎ニ所轄始  
審裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其裁判所ニ於テ代理スルモノナキトキハ最近ノ  
治安裁判所裁判官ヲシテ代理セシム

第二十一條 始審裁判所長差支アルトキハ上席ノ判事之ヲ代理ス  
判事中差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ裁判所長ノ豫メ定ムル所ニ  
依ル若シ其裁判所ノ判事中代理スルモノナキトキハ所轄治安裁判所ノ裁判官ヲシテ臨  
時代理セシム

第二十二條 控訴院長差支アルトキハ上席評定官之ヲ代理ス

第十六類 訴訟



評定官中差支アルトキ其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル若シ其院ノ評定官中代理スルモノナキトキハ所轄始審裁判所裁判官ヲシテ代理セシム

第二十二條 大審院長差支アルトキハ上席ノ局長之ヲ代理ス

局長中差支アルトキハ其局上席ノ評定官之ヲ代理ス各局評定官中其職務ヲ代理スヘキ順序ハ一周年毎ニ院長ノ豫メ定ムル所ニ依ル

第二十四條 治安裁判所判事始審裁判所長控訴院長及大審院長ハ司法大臣ノ指揮ヲ承ケ其職務ヲ整理シ及司法ニ關スル行政ヲ掌理ス

第二十五條 大審院長ハ其院及控訴院ヲ監督シ控訴院長ハ其院及所轄裁判所ヲ監督シ始審裁判所長ハ其裁判所及所轄治安裁判所ヲ監督ス

第二十六條 控訴院及大審院ノ局長ハ其局ノ所掌ニ屬スル裁判事務ヲ指揮ス

第二十七條 治安裁判所ヲ除クノ外裁判所ニ檢事局ヲ置キ檢察官ヲシテ治罪法及訴訟法ニ定ムル職務ノ外司法ニ關スル事項及司法ノ行政ニ關スル事項ニ付監督ノ職務ヲ行ハシム其處務ノ規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

治安裁判所ニ於テハ別ニ檢事局ヲ置カス檢事試補ヲシテ其所轄ニ屬スル檢察事務ヲ掌ラシム但檢事試補ヲ置カサルノ治安裁判所ニ於テハ警察官郡區長戸長ヲシテ檢察事務ヲ行ハシムルコトヲ得

第二十八條 各檢事局ノ管轄ハ其所在裁判所ノ管轄區域ニ依ル

第二十九條 檢察官ハ其職務上其所在裁判所ニ從屬セサルモノトス

第三十條 檢察官ニハ裁判官ノ職務ヲ行ハシムヘカラス又其職務ヲ監督セシムヘカラス

第三十一條 檢察官差支アリテ止ムヲ得サル場合ニ於テハ裁判所長ハ司法大臣ノ認可ヲ承ケテ裁判官中ヨリ臨時代理ヲ命スルコトアルヘシ

第三十二條 大審院檢事長ハ所屬檢事及控訴院檢事長ヲ監督シ控訴院檢事長ハ所屬檢事及所轄内ノ檢事及司法警察官ヲ監督ス

第三十三條 檢察官ハ職務上其所屬長官ノ命令ニ服従スヘシ司法警察官ノ檢事ノ補助官トナリタルトキモ亦同シ

第三十四條 始審裁判所檢事局ニハ檢事長ヲ置カス上席檢事ヲ以テ之ニ充テ始審裁判所及其所轄内ニ在ル治安裁判所ノ檢察事務ヲ指揮シ其局所掌ノ事務ヲ掌理セシム

第三十五條 控訴院檢事長ハ其局所轄ノ事務ヲ掌理シ其局及其所轄ノ檢察官ヲ指揮ス

第三十六條 大審院檢事長ハ其局ノ檢事ヲ指揮シ及其局所轄ノ事務ヲ掌理ス

第三十七條 控訴院及大審院ノ書記官ハ書記ヲ指揮監督シテ文書記録會計ノ事務ヲ掌ル

第三十八條 裁判所ノ書記ハ上官ノ指揮監督ヲ承ケ訴訟法治罪法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書記録會計ニ從事ス

始審裁判所以上ノ裁判所ニ於テハ檢事局ニ書記ヲ置ク其職務ハ前項ニ同シ



第三十九條 執行吏ハ治罪法訴訟法及其他法律命令ノ定ムル所ニ依リ文書ノ送達及判決命令ノ執行ヲ掌ル

第三 執務及休暇

第四十條 治安裁判所及始審裁判所ノ審理判決ハ裁判官一人ニテ之ヲ行ヒ控訴院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合セテ裁判官二人大審院ノ審理判決ハ主任局長ヲ合セテ五人合議列席シテ之ヲ行フ

第四十一條 裁判ヲ爲スニハ前條ニ指定シタル主任裁判官ノ外列席スルコトヲ得ス但審問數日ニ渉ルヘキトキハ其裁判所中自餘ノ裁判官ヲシテ立會ハシムルコトヲ得

第四十二條 裁判所ノ會議及議決ハ之ヲ公行セス其狀況及結果ハ一切之ヲ漏洩スルコトヲ許サス

第四十三條 合議列席シテ審理判決ヲ行フ場合ニ於テハ主任局長其會議ノ長トナリテ議事ヲ整理シ訴件ノ要點ニ就テ問議ヲ提出シ列席員ヲシテ各意見ヲ述ヘシム其問議ノ事項及提出ノ方法順序又ハ決議ノ査定ニ關シ各員ノ間ニ異見ヲ生スルトキハ列席員ノ最多數ヲ以テ之ヲ決スヘシ

第四十四條 決議ノ際各員異見ヲ述ブルノ順序ハ各其任官ノ前後ニ依リ後任ノ裁判官ヨリ始メ局長ヲ最後トス任官ノ同日ニ係ルトキハ年少ヨリ始ム但專任ヲ命シタル事件ニ關シテハ其專任裁判官ヨリ之ヲ始ム

第四十五條 凡ソ裁判ハ過半数ノ議決ニ依リ之ヲ行フ

金額ニ關シ裁判官ノ意見ニ說以上ニ分レ其說各過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ノ意見ニ合算ス

刑事ニ關シ有罪無罪ノ問議ヲ除クノ外其意見ニ說以上ニ分レ各過半数ニ至ラサルトキハ過半数ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第四十六條 大審院ニ於テ裁判前例ニ違ヘル裁判ヲ爲サントスルトキ又ハ司法大臣ノ諮問ニ應シ司法制度ニ關スル意見ヲ提出セントスルトキハ總會議ヲ開クコトヲ得

總會議ハ院中ノ裁判官三分ノ二以上ヲ以テ之ヲ開キ院長其會議ノ長トナリテ其議事ヲ整理シ其議決ハ最多數ニ依ル若シ可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

第四十七條 治安裁判所及始審裁判所ハ裁判上ノ處分ニ關シ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第四十八條 檢察官其職務ヲ行フニ付必要ナル場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第四十九條 書記又ハ執行吏他ノ裁判所ノ管轄内ニ於テ其職務上ノ處分ヲ爲スノ必要ナル場合ニ於テハ互ニ補助ノ囑托ニ應スヘキモノトス

第五十條 裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ル

第五十一條 休暇中ハ左ノ事件ニ限り裁判ス



- 一 刑事
  - 二 差押事件
  - 三 身代限ニ關スル事件
  - 四 家宅ノ貸渡使用明渡及借家人ノ借宅ニ現存スル物品引留ニ付家主ト借家人トノ間ニ生スル事件
  - 五 爲換事件
  - 六 養料ノ請求
  - 七 既ニ着手シタル建築ノ繼續ニ關スル事件
- 以上事件ノ外ト雖モ原告若クハ被告ノ申立ニ由リ別段ノ至急ヲ要スルモノト裁判所ニ於テ認定シタルトキハ之ヲ裁判スルコトアルヘシ
- 前諸項ノ事件ヲ裁判スル爲メ裁判所長ハ休暇中臨時主任ノ局又ハ委員ヲ定ムヘシ
- 人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟假規則 七年九月二日 司法省第二十四號各裁判所各縣へ達  
 今般人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則別冊之通相設ケ候間以後右ニ遵據可致候條此旨相達候事  
 別冊
- 人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟假規則
- 第一條 凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法官ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ
- 一 但闔區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做スヘシ
  - 一 院省使府縣所有ノ土地ニ關シタル事

- 一 院省使府縣ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事
  - 一 院省使府縣ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事
- 第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル院省使府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ミ差出スヲ得ヘシ其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サ、ルヲ得サルトキハ其本人ヲ呼出スヲモアルヘシ但奉任以上ニ係ル者ハ奉請ヲ經テ區處ス
- 第三條 裁判上院省使府縣ヨリ人民ハ對シ償還スヘキ條理アルトキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟ス可シ若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還スヘキハ具狀申稟スルニ及ハスト雖モ其停止ヲ得サル場合ニテ院省使府縣ヨリ償還セサルヲ得サルモ其具狀申稟スルノ前項ニ同シ但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ終審トシ更ニ控告スルヲ得ス
- 第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲ニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ歸スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルトキハ先以テ之ヲ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フヘシ
- 一 官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事
  - 一 道路ヲ作ルニ付一般ノ人民ニ關スル事
  - 一 工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事
  - 一 此官廳ト彼官廳トニ起ル權限ノ事 以下ニ件ハ消滅ス
  - 一 行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事
- 但右ノ裁判ニ付テ手續ハ第二條第三條ニ同シ

第九十七 華士族身代限



○華族及華族ノ子弟身代限處分濟宮内省華族局へ通牒方  
十八年十一月十二日  
司法省丁第二十五號始審裁判所治安裁判

所へ  
民事裁判上ニ於テ華族及華族ノ子弟身代限處分ニ及ヒタル者有之候ハ、處分完結ノ上其旨直ニ宮内省華族局へ通牒  
可致此旨相達候事

第九十八 裁判執行

○民事裁判執行手續 十八年七月二十八日  
内務省甲第二十六號警視廳府廳(東京府ヲ除ク)へ達  
民事裁判執行ヲ遂ケサル者アルハ權利者ヨリ執行命令書ノ下付ヲ請求スル場合ニ於テハ裁判所ハ審ニ權利者ニ下付シ  
タル裁判言渡書寫ノ末尾ニ左式ノ如キ命令書ヲ添付シ契印ヲ捺シ下付スヘキ旨ニ付權利者ニ於テ之ヲ提供シ義務者所  
轄ノ警察署ニ願出ルルハ警察官ニ於テ別ニ裁判所ノ照會ヲ須タス直ニ義務者ヲシテ該裁判ノ通執行セシメ候様可致此  
旨相達候事

執行命令書

當裁判所ハ誰某ヨリ誰某ニ對スル何々事件ニ付大審院(某控訴裁判所)(某始審裁判所)(當裁判所)ノ與ヘタル此裁判ノ  
執行ヲ命令スル者也

明治 年 月 日

某始審(治安)裁判所印

第十七類 刑法

第十八類 治罪法

第九十九 釧路集治監ノ囚人犯罪ノ者處分方 十八年十二月十七日  
第四十二號布告

釧路集治監ノ囚人<sup>假出獄免幽</sup>ノ者トモ罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手  
續モ便宜取計フヘシ

但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

右奉 勅旨布告候事

○罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件 十九年六月十日布告  
勅令第四十六號

朕罰金及追徴ニ係ル上告豫納金ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御 名 御 璽

明治十九年六月九日

内閣總理大臣伯爵伊藤博文  
司法 大臣 伯爵山田顯義

勅令第四十六號

罰金及追徴ノ言渡ヲ受ケタル者上告ヲ爲サントスルトキハ其罰金及追徴金ノ十分ノ一ニ  
當ル金額ヲ上告趣意書ニ添へ原裁判所書記局ニ預置ク可シ否ラサレハ上告ヲ爲スコトヲ



得ス若シ上告不當ナルトキハ大審院ニ於テ其全部又ハ幾分ヲ没入スルノ言渡ヲ爲スヘシ  
○刑事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍へ通知方十四年十二月十九日 司法省第三十三號裁判所へ達  
刑事裁判言渡ヲ犯人ノ本籍へ通知シ及ヒ犯人前科取調ノ儀是迄區々相成居候處來明治十五年一月ヨリ左ノ通可相心得  
此旨相達候事

刑事裁判言渡アリタルキハ治罪法第四百六十四條ニ掲クル既決犯罪表寫ヲ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ送致ス可  
シ右送致ヲ受タル檢事ハ其旨ヲ犯人本籍ノ地ノ戶長ニ通知シ該表ハイロハ標號ニ從ヒ區別編纂致置可シ  
犯罪人ノ前科取調ヲ要スルキハ犯人本籍ノ地ノ輕罪裁判所檢事ニ照會シ檢事ハ編纂致置タル既決犯罪表寫ヲ送致スヘ  
シ

(既決犯罪表式略ス)

○帶動者ノ犯罪ニ付勳章ヲ褫奪シタルキ犯人本籍へ通知方十九年四月三十日 司法省令第六號大審院裁判所  
刑事裁判言渡ヲ犯人本籍へ通知方ノ儀明治十四年當省丁第三十三號ヲ以テ相達置タル處自今帶動者ノ犯罪ニ付勳章ヲ  
褫奪シタル時ハ其旨併セテ通知ス可シ

○送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀宣誓書ハ半紙換用ヲ許ス十八年八月十三日 司法省丁第十六號大審院裁  
判所  
明治十四年當省丁第二十八號送達書呼出狀召喚狀勾引狀勾留狀收監狀宣誓書式第壹號及ヒ明治十七年當省丁第八號  
達民事呼出狀並送達書式第壹號ニ用紙黃澱紙ノ類ト記載有之候處右ハ半紙ヲ以テ換用スルモ苦シカラズ此旨相達候  
事

○犯則ニ由リ官没ノ物件ヲ戶長ニ於テ公賣ノ節公賣費用支辨方十八年九月十八日 內務省甲第三十二號府縣へ達  
犯則ニ由リ官没シタル物件ヲ裁判所ノ囑托ニ依リ戶長ニ於テ公賣取扱タル節右公賣ニ關スル費用(物件看守者ノ手當并  
雜費)ハ其裁判所ノ費用ニ相立ヘキモノニ付戶長役場費ヨリ支辨セサル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○犯罪又ハ犯則ニ依リ没收ノ物件地方廳へ引繼處分方十八年十一月廿六日 第六十三號府縣へ達  
裁判所ニ於テ犯罪又ハ犯則ニ依リ没收シタル物件ハ自今都テ地方廳ニ引繼地方廳ニ於テ便宜之ヲ廢却スヘシ此旨相達  
候事

○違警罪裁判言渡ノ謄本又ハ拔書ヲ下付スル費用徵否取計方十八年十二月九日 司法省丙第十號裁判所警視廳府縣  
(東京府ヲ  
除ク)へ達  
明治十五年三月當省丙第九拾貳號ヲ以テ違警罪裁判言渡書ノ謄本又ハ其拔書ヲ下付ス可キ費用ハ當分徵收ス可カラサル旨  
相達置候處本年九月第三拾壹號ヲ以テ違警罪即決例公布相成候付テハ自今該裁判ノ正式ニ係ルモノハ該費用ヲ徵收シ其  
即決ニ係ルモノハ從前ノ通取計可シ此旨相達候事

○犯罪又ハ犯則ニヨリ没收シタル物件取扱手續十九年四月十九日 大藏省訓令第三號北海道廳府縣  
明治十八年十一月太政官第六十三號違犯罪又ハ犯則ニヨリ没收シタル物件ハ左ノ手續ニ據リ取扱フヘシ  
第一項 裁判所ヨリ没收物件引渡ノ通知ヲ得タルトキハ其物件受取ノ手續ヲ爲シ物件ノ性質ニ從ヒ得失ヲ量リ其處  
ニ取寄セ又ハ其所在地ノ戶長ニ保管セシムヘシ  
第二項 没收ノ物件ハ裁判所ヨリ受取タル後三箇月以内ニ於テ公賣ニ付スヘシ但公賣ノ場所ハ物件所在ノ地ニ限ラス  
總テ適當ノ地ヲ選定スルモノトス

第三項 没收物件中官廳ノ烙印アルモノハ公賣ニ付スル前其烙印ヲ削除スヘシ  
第四項 公賣ノ方法ハ入札拂若クハ競賣ニ據ルヘシ  
第五項 没收ノ物件公賣ニ付スルモ買受人ナキカ若クハ代價相當ノ價格ニ達セサルトキハ公賣ヲ停止シ爾後三箇月  
以内ニ於テ更ニ公賣ニ付スヘシ

第六項 没收物件中毀損腐敗ニ係リ若クハ物品輕微ニシテ公賣ニ付スルモ價値ナシト認ムルモノ或ハ運搬費置場敷  
料ヲ要シ公賣スルモ其得失相償ハサルモノ或ハ第五項期限内ニ於テ公賣ニ付スルモ買受人ナク若クハ代價不相當



ニシテ公費ヲ停止シタルモノハ適宜處分スヘシ

第七項 沒收物件中其物品取扱上特ニ成規アルモノハ各主管廳ノ指揮ニ據リ之ヲ處分スヘシ

伺指令

郡吏員戸長等職務上刑事裁判所へ證人トシテ出頭旅費日當請求方ニ付千葉縣ヨリ司法省へ伺 十八年九月四日 (十八年十一月六日官報)

一郡吏員戸長等職務上ニ係リ刑事裁判所ノ證人トシテ裁判所ニ出頭スルトキハ治罪法ニ依リ旅費日當ヲ請求スルヲ得ルハ勿論ノ儀ト存候得共被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ明治十七年六月大政官第五十七號公達ニ準シ請求セサル儀ト心得可然哉又ハ右ノ場合ト雖モ郡吏員戸長等ニ在テハ請求スルヲ得ヘキ儀ニ候哉

一前編大政官第五十七號公達ニハ被告事件無罪又ハ免訴トナリタルトキハ請求セサル儀ト有之候得共治罪法第百九十條ニハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルヲ得ト有之然レハ被告事件未タ判決ヲ經サル以前ニ在テ之レヲ請求シ置キ無罪又ハ免訴トナリタルトキハ之ヲ受取ラサル儀ト心得可然哉

伺之趣第一項前段伺之通第二項伺之通

違警罪正式裁判ニ係ル認廷内治罪手續ニ付滋賀縣ヨリ司法省へ伺 十八年十月十五日 (十八年十一月十七日官報)

明治十四年第五十四號布告但書ニ依レハ始審裁判所々在地ヲ除クノ外治安裁判所ニ於テ輕罪裁判ヲ爲ス際認廷内治罪ノ手續ハ便宜取計ヲ以テ得ル上ハ令般第三十一號布告違警罪即決處分ニ對シ正式ノ裁判ヲ請求シ其裁判ヲ爲ス際認廷内治罪手續モ亦便宜ニ取計ト可然哉果シテ然ラハ裁判官ト協議ノ上其事件ノ難易ニ依リ檢察官ノ公廷ニ立會ハサルモ敢テ差支無之様相考候得共違警罪正式裁判ニ係ル認廷内治罪手續ニ付テハ未タ何等御布告等モ無之ニ付一應

此段相伺候

指令 十八年十一月十一日

伺ノ趣治罪法ニ從テ可キ儀ト心得可シ

無屆遲不參ノ者罰金科料徴收執行ノ件ニ付横濱輕罪裁判所檢事ヨリ司法省へ請訓 十八年十月廿日 (十八年十一月十一日官報)

明治十五年一月三三號ヲ以テ御内訓中ニ裁判所ノ呼出ニ遲不參セシ者始審裁判所々在地ノ治安裁判所ニ於テ處分シタル時ハ其旨ヲ輕罪裁判所ノ檢事ニ通知ス可シ其通知ヲ受ケタル檢察官ハ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ執行ス可シト有之右ハ畢竟治安裁判所ニ於テ違警罪裁判所ヲ開カサルヨリ從テ檢察官モ之レナキニ依リ輕罪裁判所檢事ニ於テ執行スル事ト規定セラレタル儀ニ可有之候處本年第三十一號御布告ヲ以テ明治十四年第四十四號及同年第八十號ノ御布告ヲ廢セラレタル上ハ無論右御内訓中治安裁判所ニ於テ處分セシ者ハ爾來違警罪裁判所ノ檢察官ニ於テ執行スル儀ト心得可然哉

内訓 十八年十一月七日 別紙請訓ノ趣ハ見解ノ通此旨及内訓候也

違警罪事件取扱方ニ付福島輕罪裁判所若松支廳檢事ヨリ司法省へ請訓 十八年十月六日 (十八年十一月二日官報)

本年九月廿四日第三拾壹號ヲ以テ違警罪即決例公布セラレ候ニ付テハ自今違警罪事件ハ總テ一應即決ノ旨渡ラ交シタルモノ、如ク被相考候果シテ然ラハ本職又ハ違警罪裁判所檢察官ニ於テ告訴告發其他ノ原由ニヨリ認知シタル違警罪事件ハ必ス警察官へ送致スヘキ儀ト相心得可然哉

内訓 十八年十一月三十日 別紙請訓之趣見解之通右及内訓候也

假出獄者刑期計算並ニ假出獄停止申渡書式ノ件ニ付栃木縣ヨリ司法省へ伺 十八年九月廿一日

第十八類 治罪法



(十八年十二月九日官報)

第一條 刑法第五十六條ニ假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直ニ出獄ヲ停止シ出獄中之日數ハ刑期ニ算入セスト有之右所謂出獄中之日數トハ即本年九月内第七號御達假出獄停止手續第一條ニ依リ典獄ニ於テ假出獄ノ停止申渡ヲナシ前日迄ヲ云フモノナルヤ果シテ然レハ刑法第五十二條刑期限内逃走シ再ヒ捕ニ就キ未決監ニ拘禁中之日數ヲ本刑刑期ニ算入スル者ト權衡如何ト被考候因テハ前文第五十六條出獄中之日數計算方ハ假出獄停止ノ申渡ヲナサレモ既ニ假出獄スル以上ハ其日數ハ刑期ニ算入スル儀ト心得可然哉

第二條 假出獄停止手續中假出獄申渡書式之末文ニ其出獄ヲ停止シ證取上候事トアルハ出獄中已ニ其證取紛失等ノ爲メ所持セサル者ト雖猶證取上ノ四字ヲ記入スル儀ニ候哉

指令 十八年十二月五日(内務卿連署)  
書面伺ノ趣左ノ通可心得事

第一條 未段伺ノ通

第二條 證取上ノ四字ハ省クヘシ

●違警罪即決例ノ件ニ付長野縣ヨリ内務省ヘ伺 十八年十月十日 (十九年三月八日官報)

第一條 十四年御省丙第拾九號達中違警罪既決未決事件表ハ客月第三十一號違警罪即決例公布ニ付キテハ自然消滅ノ趣ト心得ヘキヤ

第二條 違警罪即決事件ハ客月御省丙第八號達違警罪公判表ヘ如何記載スヘキヤ

第三條 即決例第二條末項ニ據リ處分シタル片送達スヘキ手續ハ便宜取計ヒ其ノ費用及呼出狀等ニ關スル費用ノ如キハ被告人ニ負擔セシムヘキヤ

第四條 即決例第八條以下ノ處分ヲナシ留置中正式裁判ヲ請求シ留置期限ヲ經過スルモ呼出狀到達スル迄ハ留置スヘキヤ

第五條 留置ノ費用ハ何ノ支辨ニ屬スヘキヤ

第六條 官吏職務ヲ行フニ當リ發覺シタル違警罪管ヘハ收稅檢査員ノ證券印稅規則違犯者等ノ告發ハ違警罪裁判所檢査官若クハ警察署長又ハ其分署長等ニ告發スヘキモノナルヤ果シテ然リトセハ警察署長及分署長等ニ於テ受理シタル事件ハ直チニ即決スヘキヤ

指令 十九年三月五日(内務司法兩省連署)

第一條 客年司法省丙第九號達ノ通

第二條 客年司法省丙第十一號達ノ通調製スヘシ

第三條 送達手續ノ儀ハ何ノ通費用ハ被告人ニ負擔セシムルノ限ニアラス

第四條 留置期限ヲ經過シタル時ハ直ニ釋放スヘシ

第五條 監獄費ヨリ支辨スヘシ

第六條 見込ノ通

●公判審問中拘留狀期限經過セシトキ其効力有無ノ件警視廳ヨリ司法省ヘ伺 十八年八月十五日

(十九年四月廿二日官報)

茲ニ輕罪犯ノ檢査ヨリ直ニ公判ニ付シ審問中拘留狀期限經過シ收監狀ニ換ヘサルヨリ其旨檢事ニ通知セシニ公判ニ付シタル以上ハ關係セスト云ヒ公判判事ニ於テハ法律上明文ナシトテ收監狀ヲ發セス又被告人ニ於テ異議ノ申立ヲナシタルニ收監狀ヲ發付スル如キハ總テ被告事件豫審中ノ處分ニ屬シ公判判事ニ於テ之ヲ發スルハ法律ニ規定スル所ナシ然ラハ拘留狀ヲ執行シタルヨリ十日ヲ經過スルモ既ニ公判判事ノ管理ニ屬スル以上ハ其効力ノ消滅スルモノニ非スト判決セリ抑拘留十日ヲ過クルトテ得サルハ治罪法ニ明文之アリ又檢事ヨリ直ニ公判ニ付シタル事件ニシテ拘留十日ヲ過クルハ治罪法第百二十七條第二項ニ從ヒ檢査官ノ請求ニ依リ更ニ十日間拘留ヲナシ又ハ公判判事ニ於テ收監狀ヲ發スルヲ得キ旨往々御指令有之就テハ公判判事ト雖モ收監狀ヲ發スルヲ得ルハ勿論ニシテ若シ其處



分ヲナサ、ルキハ典獄ニ於テハ令狀ナキ被告人ヲ拘留スル不能ヲ以テ直ニ解放セサルヲ得ス然ニ前顯判決ニ依テ見  
レハ拘留十日ヲ過グルモ其効力ヲ有スルモノ、如シ右ハ果シテ効力之アルモノニ候ヤ若シ之ニ反シテ効力ナキモノ  
トセハ前顯ノ如キ判決アリタル場合ニ於テハ如何相心得可然哉

指令 十九年四月九日

同ノ懸被告事件ヲ公判ニ付シタル後ハ治罪法第百二十七條ノ規則ニ據ルヘキモノニアラス即チ裁判宣告ニ至ル  
マテ拘留狀ノ効力ヲ有スルモノト心得ヘシ

第十九類 罰則

第二十類 雜

第百一 本初子午線經度計算方及標準時ノ件 十九年七月十三日布告

朕本初子午線經度計算方及標準時ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治十九年七月十二日

- 内閣總理大臣 伯爵 伊藤博文
- 内務大臣 伯爵 山縣有朋
- 陸軍大臣 伯爵 大山 巖
- 海軍大臣 伯爵 西郷從道
- 文部大臣 森 有禮
- 農商務大臣 伯爵 西郷從道
- 逓信大臣 榎本武揚

勅令第五十一號

- 一 英國グリニッチ天文臺子午儀ノ中心ヲ經過スル子午線ヲ以テ經度ノ本初子午線トス
- 一 經度ハ本初子午線ヨリ起算シ東西各百八十度ニ至リ東經ヲ正トシ西經ヲ負トス



一明治二十一年一月一日ヨリ東經百三十五度ノ子午線ノ時ヲ以テ本邦一般ノ標準時ト定ム

第一百一 内務報告例ヲ定メ本例ニ矛盾スル從前ノ諸式ヲ廢止ス 十九年九月二

十七日

内務省令第十七號廳府縣憲兵本部集治監假留監

内務報告例別冊ノ通相定メ本年分ヨリ施行ス

但本例ニ矛盾スル從前ノ諸式ハ廢止ス

内務報告例

別冊

凡例

第一條 報告例ハ警視廳府縣廳及憲兵本部集治監假留監ニ於テ法律命令ヲ執行シ或ハ權内ノ事務ヲ處分シタル事項ニ就キ緩急輕重ニ從ヒ報告スヘキ順序ヲ示スモノナリ

第二條 從前本省各局長ノ名ヲ以テ報告ヲ求メ來タリシ者アリト雖モ自今ハ一切本例ノ式ニ循ヒ本省ニ報告スヘシ

第三條 報告ヲ分テ豫報即報月報季報半年報年報ノ六種トス但事倉卒ニ起リ瞬間モ聞ク可ラサル者ハ固ヨリ此例外トス

第四條 豫報ハ將來日月ヲ期シテ舉行スヘキ者又ハ事變ノ兆候ヲ偵知シタル時之ヲ未然ニ報スル者月報ハ每月季報ハ毎三箇月半年報ハ每半年(會計年度ニ關スル者ハ上下半年度

ニ分ツ)年報ハ一箇年(會計年度ニ關スル者ハ一周年度)ニ係ル事項ヲ報告スル者トス  
第五條 例目中部門ヲ分チ從前ノ即報月報二月報ヲ半年報若クハ年報ニ改ムル者アリ又之ニ反スルアリ各其定ムル所ニ依ルヘシ

第六條 報告書差出期限從前定期アル者ト否トヲ問ハス總テ例目ノ下欄ニ於テ指定シタル時日ニ於テ各地ヲ發送スル者トス但即報ハ即時即日若クハ事ヲ了シタル日ヨリ三日以内ニ發送スヘシ

第七條 報告ノ料紙ハ他ノ文書ト混同セサル爲メ左ノ雛形ノ通墨線ノ野紙ヲ用井六種ニ通用スヘシ

第八條 各報告ノ記載方一事件毎ニ紙頁ヲ改メ纏メテ一括トナシ目錄ヲ料紙ニ記シ添付スヘシ

第九條 諸表ノ様式ハ各項ニ因リ大小廣狹アリ豫メ一定シ難シト雖モ成ルヘク美濃紙一葉ニ調製スルヲ要ス其短縮シ得ヘキ者ハ半葉ニ調製スヘシ但諸表諸圖面共編綴ノ爲メ四隅ニ餘白ヲ存ス可シ

第十條 様式ニハ横線ノミヲ示スモノト雖モ進達ノ表ニハ縦線ヲ加フヘキ者トス又登記スヘキ事項ナキ空欄アラハ「」ヲ填充シテ脱漏ニ非ラサルヲ證ス可シ

第十一條 諸表様式ハ已ニ頒布ノ者ト雖モ執務者ノ便ヲ圖リ茲ニ彙集シテ本例ニ編入ス若シ今後令訓ニ依リ原則ノ改正ニ係ルコトアル時ハ延テ本例ニ及フモノトス



第十二條 茲ニ示ス所ノ例目中從前ノ令訓ニ出ルモノ、外慣例ニ因リ或ハ特ニ報告ヲ要スルモノ等ニシテ其式ヲ設ケサルモノハ適宜調製ス可シ  
第十三條 凡各廳ノ經費豫算決算等ニ關スル諸報告ハ別ニ定リタル規則ニ依準ス可シ  
內務報告例目

豫報

摘要

發送期日

第一 府縣會開設

第二 府縣會ニ發付スヘキ議案

明治十七年十二月五日坤底第九一六號訓示

即報

第一 管内布達諸件

第二 廳府縣分課廢置

第三 郡區長委任條件

第四 臨時府縣會及常置委員急施會決議諸件

第五 營業稅雜種稅課目課額

第六 府縣會閉場

第七 議長副議長改選

第八 府縣會開設中景況

第九 地方ニ於テ定メタル違警罪目

十三年四月第十五號布告府縣會規則第十一條

十四年八月第七十七號公達

第十

第十一 火藥類賣買營業免許並火藥庫設置許可

第十二 銃砲賣買營業免許

第十三 囚人ノ特赦特典減等集會條例違犯者處分

第十四 囚徒反獄越獄及逃走

第十五 假出獄停止

第十六 警察署諸裁判所等ノ位置ノ圖面

第十七 國庫ノ補助ヲ要スル土木工事落成

第十八 國縣道竣功

第十九 傳染病流行ノ徵候

第二十 避病院ノ開設

第二十一 檢疫委員ノ設置

第二十二 警察費警察廳舍建築修繕費豫算決議預

月報

第一 新聞紙(雜誌)發行高

第二 在監八月未現在

第三 官沒地

十八年一月第一號公達第一項

五年正月第二十八號布告

十四年十月第八十一號公達監獄則第廿五條及第五十八條

十二年五月六日番外達

十七年四月四日內達

十八年九月司法省丙第七號

十五年二月乙第十號達

十八年三月土丁第三號達

十九年五月省令第四號

十九年三月省令第一號第十八項

同 上第十九項

十五年十月乙第五十六號達

十六年五月十日訓示

十九年五月省令第七號

十八年二月外第一七三號及同年十二月發第三三七號地理局長通

翌月十日

翌月十五日

翌月十日



第四	廳府縣ヨリ徒流刑禁獄及懲役終身囚徒收監港	十八年九月司法省丙第七號 十七年九月十五日假開監へ達	翌月五日
第一	土地増減	十九年三月省令第一號第五、第八第九第十第十二第十四ノ諸項並十七年三月第七號布告十一月十七日外第五六三號地理局長通知 十九年三月省令第一號第十一年二月乙第十號並第七項同年三月外第四號並知 十九年三月省令第一號第十三項並八年五月乙第六十五號並第一第二第三第四ノ四項 十九年三月省令第一號第六第七第十四ノ三項並十二年六月乙第二十九號並第三項十七年二月乙第十號並第四項	十四月十日
第二	土地貸渡	同	同
第三	地種目變換	同	同
第四	傳染病患者	同	同
第五	同上在監人患者	同	同
第一	新聞紙雜誌開廢業及定期變更	同	同
第二	廳府縣官及郡區町村吏	同	同
第三	地方事務並ニ管内ノ景況	同	同
第四	河川港灣土木竣功	八年一月乙第四號達	同

第五	國縣道幅取擴落成	十九年三月省令第一號	同	同
第六	中毒	十一年十二月乙第八十八號達	同	同
第七	社寺ノ改稱及移轉廢合	十一年九月乙第五十七號達	同	同
第八	官社社入金遊拂並豫備蓄積金處分	十八年五月甲第十六號達	同	同
第九	官社經營ヲ以テ常用器品新調修繕處分	同	同	同
第十	官社不用ノ建物古材賣却處分	同	同	同
第十一	官社社營建物改造修繕處分	同	同	同
第十二	官社寄附物品處分	同	同	同
第十三	官社神官派出出京發刑歸省處分	同	同	同
第十四	社寺廢合跡建物處分	同	同	同
第十五	社寺什物祠堂金處分	同	同	同
第十六	社寺官有地境內木竹伐採及社寺民有地境內ノ紀念碑建設處分	同	同	同
第十七	社寺明細帳ノ異動	十二年六月乙第三十一號達取調心得第十二項	同	同
第十八	離末本寺換	十一年二月乙第八號達	同	同
第十九	社寺創立再興復舊建築火災	十五年十一月乙第五十九號達ノ後半	同	同
第二十	同上建設延期	十九年三月省令第一號第四項	同	同
第二十一	社寺由緒アル地所建物處分	同	同	同